

# 上野遺跡

1989・3

山梨県西八代郡三珠町教育委員会

# 上野遺跡

1989・3

山梨県西八代郡三珠町教育委員会

## 序

本報告書は、三珠町農村広場建設に伴い、昭和63年度に発掘調査された山梨県西八代郡三珠町上野遺跡について、その成果をまとめたものです。

現在三珠町では、歌舞伎文化公園隣接地12,000m<sup>2</sup>に農村広場を建設中です。その全域を対象に、山梨県教育委員会文化課と山梨県埋蔵文化財センターの指導監督のもと、発掘調査を実施しました。検出された遺構は、主として大規模な方形周溝墓・円形周溝墓、縄文時代の土壙、中世の墓域、縄文時代から古墳時代の住居址群、環濠状遺構等の貴重な文化遺産であります。ともあれ、既発掘の一条氏館跡遺跡、一城林遺跡や未発掘のエモン塚等の遺跡群との関連が注目されます。

今後なお引き続いて文化遺産の解明を続けると共に、なお今回の発掘の成果を、末長く後世に残すことが我々の責任かと思います。そのような意味合いから、発掘の全貌を細大漏らさず報告書としてまとめました。どうぞ、引き続いてご指導ご支援のほどをお願いいたします。

末筆ながら、ご協力を賜った関係各位、並びに直接発掘調査に当たられました皆様に改めて厚くお礼申し上げます。

平成元年3月

三珠町教育委員会  
教育長 小林君男

## 例 言

1. 本書は、平成元年度完成予定の三珠町農村広場建設工事に先立ち、三珠町教育委員会が実施した、三珠町上野3590番地に所在する上野遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は昭和63年4月1日から昭和63年6月30日まで行った。整理作業と報告書作成は昭和63年9月1日から平成元年3月31日まで行った。
3. 調査組織、及び調査参加者は下記のとおりである。

調査主体 三珠町教育委員会

調査担当 堀ノ内泉

調査員 土橋通貴（三珠町文化財審議会委員）

調査事務 武田智宏（三珠町教育委員会社会教育主事）

調査参加者 若林初美、岩崎登加（一般）、土橋美和（都留文科大学）

塙島光仁（東京農業大学）、樋口治・石原明（山梨大学）、伊藤弘（山梨学院大学）、阿部純江、有泉勝子、有泉たま子、有泉広勝、石原一恵、市田鎮夫、長田豊子、小林賢治、小林光代、小林よ志子、塙島富美子、丹沢町子、内藤真一、平原志津江、松木則子、三神あや子、三神信子、渡辺とも江（一般）

市田明彦・村松悠子（市川高校）、高石和希・長倉真悟（甲府工業）

4. 本報告書の編集は、堀ノ内が行った。挿図関係は岩崎、土橋（美）、若林が作成した。
5. 石材は河西学氏（山梨文化財研究所）に鑑定していただいた。
6. 遺跡全体図、住居址平面図及びそれらの写真等に関しては、シン航空写真株式会社の協力を得た。
7. 発掘調査から報告書作成まで、下記の方々の御指導御助言をいただいた。記して謝意を表する次第である。  
新津健（県教育委員会文化課）、小林広和・末木健・田代孝・長沢宏昌・中山誠二・森和敏（県埋蔵文化財センター）、清水博（櫛形町教育委員会）、河西学・樋原功一（山梨文化財研究所）、林部光（境川村教育委員会）、山本寿々雄、シン航空写真株式会社（順不同）
8. 本調査に係る出土品、及び記録図面・写真等は一括して三珠町教育委員会で保管している。

## 凡 例

1. 挿図の縮尺は原則として下記のとおりである。  
I区・II区全体図 - 1/600、方形・円形周溝墓平面図 - 1/100、同断面図 - 1/40、竪穴住居址 - 1/60、同炉址 - 1/30、土壤及び中世墓 - 1/30、土器 - 1/3・1/4、石器 - 1/1・1/3・1/4
2. 挿図内のスクリーントーンの指示について。  
住居址平・断面図内のものは灰を表す。その他の遺構図内のものは焼土を表す。  
土器実測図内のものは赤色塗彩とその範囲を示す。  
墓石実測図内のものは欠損部を示す。
3. 土層説明は各遺構、トレンチごとに記した。

# 目 次

## 序

### 例言 凡例

第Ⅰ章	調査に至る経緯と経過	1
第Ⅱ章	遺跡を巡る環境	1
第1節	地理的環境	1
第2節	歴史的環境	3
第Ⅲ章	調査の方法と層位	3
第Ⅳ章	発見された遺構と遺物	8
第1節	縄文時代の遺構と遺物	8
1)	竪穴住居址	8
2)	土壙	14
第2節	弥生時代の遺構と遺物	19
1)	竪穴住居址	19
2)	方形周溝墓	35
3)	掘立柱建物遺構	53
4)	環濠と溝	53
第3節	古墳時代の遺構と遺物	57
1)	竪穴住居址	57
2)	円形周溝墓	64
第4節	中世の遺構と遺物	69
1)	中世墓	69
2)	土壙と溝	76
第5節	遺構外出土の遺物	78
第Ⅴ章	成果と課題	86
第1節	弥生時代の遺構と遺物について	86
第2節	中世の墓について	89
第3節	その他の時代の遺構について	92
第VI章	まとめ	93
	引用・参考文献	95

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡周辺地形図〔1/2000〕	2
第2図	周辺遺跡分布図〔1/25000〕	4
第3図	グリッド設定図〔1/1200〕	5
第4図	I区全体図〔1/600〕	6
第5図	II区全体図〔1/600〕	7
第6図	10号住居址〔1/60〕	8
第7図	10号住居址出土土器〔1/3〕	9
第8図	10号住居址出土石器〔1/2・1/4〕	10
第9図	16号住居址〔1/60〕	11
第10図	16号住居址出土土器〔1/3〕	12
第11図	16号住居址出土石器〔1/4〕	13
第12図	1号・2号土壤〔1/30〕	14
第13図	1号土壤出土土器〔1/4〕	15
第14図	2号土壤出土土器(1)〔1/3〕	17
第15図	2号土壤出土土器(2)〔1/4〕	18
第16図	1号住居址〔1/60〕	19
第17図	1号住居址同炉址〔1/30〕	20
第18図	1号住居址出土土器〔1/3〕	20
第19図	2号住居址 同炉址〔1/60・1/30〕	21
第20図	2号住居址出土土器〔1/3〕	22
第21図	3号・4号住居址〔1/60〕	23
第22図	3号住居址出土土器〔1/3〕	24
第23図	4号住居址出土土器〔1/3〕	25
第24図	5号住居址〔1/60〕	26
第25図	5号住居址出土土器(1)〔1/3〕	27
第26図	5号住居址出土土器(2)〔1/3〕	28
第27図	6号住居址〔1/60〕	30
第28図	7号住居址〔1/60〕	30
第29図	7号住居址出土土器〔1/3〕	31
第30図	8号住居址〔1/60〕	31
第31図	8号住居址出土土器〔1/3〕	32
第32図	9号住居址出土土器〔1/3〕	33
第33図	9号住居址〔1/60〕	34
第34図	1号方形周溝墓〔1/100〕	35・36
第35図	1号方形周溝墓土層断面図〔1/60〕	37
第36図	1号方形周溝墓出土状況図(1) 〔1/30〕	38
第37図	1号方形周溝墓土器出土状況図(2) 〔1/30〕	39
第38図	1号方形周溝墓出土土器(1)〔1/4〕	40
第39図	1号方形周溝墓出土土器(2)〔1/4〕	41
第40図	1号方形周溝墓出土土器(3)〔1/4〕	42
第41図	1号方形周溝墓覆土内出土土器(1) 〔1/3〕	45
第42図	1号方形周溝墓覆土内出土土器(2) 〔1/3〕	46
第43図	2号方形周溝墓〔1/100・1/40〕	48
第44図	2号方形周溝墓出土土器〔1/3〕	49
第45図	3号方形周溝墓〔1/100・1/40〕	50
第46図	3号方形周溝墓出土土器〔1/3〕	50
第47図	4号方形周溝墓〔1/100・1/40〕	51
第48図	4号方形周溝墓出土土器〔1/3〕	52
第49図	5号方形周溝墓〔1/100・1/40〕	52
第50図	掘立柱建物遺構〔1/60〕	53
第51図	溝断面図〔1/60〕	54
第52図	環濠内出土土器〔1/3〕	55
第53図	環濠内出土石器〔1/1〕	56
第54図	11号住居址〔1/60〕	57
第55図	12号住居址出土土器〔1/3〕	58
第56図	12号住居址〔1/60〕	59
第57図	13号住居址 同炉址〔1/60・1/30〕	60
第58図	14号住居址出土土器〔1/3〕	61
第59図	14号住居址〔1/60〕	62
第60図	15号住居址〔1/60〕	63
第61図	円形周溝墓遺物出土状況図〔1/30〕	64
第62図	円形周溝墓〔1/100・1/40〕	65・66
第63図	円形周溝墓出土土器〔1/3〕	67
第64図	中世墓(1)〔1/30〕	70
第65図	中世墓(2)〔1/30〕	71
第66図	中世墓(3)〔1/30〕	72
第67図	中世墓出土古銭(1)〔1/1〕	74
第68図	中世墓出土古銭(2)〔1/1〕	75
第69図	15号中世墓出土土器〔1/3〕	76
第70図	3号土壤〔1/40〕	77
第71図	9溝〔1/40〕	77
第72図	遺構外出土土器(1)〔1/3〕	79
第73図	遺構外出土土器(2)〔1/3〕	80
第74図	遺構外出土五輪塔及び宝篋印塔 〔1/8〕	81
第75図	遺構外出土石器(1)〔1/2・1/3〕	82
第76図	遺構外出土石器(2)〔1/1〕	83
第77図	遺構外出土古銭〔1/1〕	83
第78図	トレンチ土層断面図(1)〔1/120〕	84
第79図	トレンチ土層断面図(2)〔1/120〕	85

## 表 目 次

第1表	1号住居址出土土器観察表	20	第14表	1号方形周溝墓出土土器観察表(4)	47
第2表	2号住居址出土土器観察表	22	第15表	2号方形周溝墓出土土器観察表	49
第3表	3号住居址出土土器観察表	24	第16表	3号方形周溝墓出土土器観察表	50
第4表	4号住居址出土土器観察表	25	第17表	4号方形周溝墓出土土器観察表	52
第5表	5号住居址出土土器観察表(1)	26	第18表	掘立柱建物遺構柱穴規模	53
第6表	5号住居址出土土器観察表(2)	29	第19表	環濠内出土土器観察表	55
第7表	7号住居址出土土器観察表	31	第20表	12号住居址出土土器観察表	59
第8表	8号住居址出土土器観察表(1)	32	第21表	14号住居址出土土器観察表	61
第9表	8号住居址出土土器観察表(2)	33	第22表	円形周溝墓出土土器観察表	68
第10表	9号住居址出土土器観察表	34	第23表	15号中世墓出土土器観察表	76
第11表	1号方形周溝墓出土土器観察表(1)	43	第24表	遺構外出出土土器観察表	80
第12表	1号方形周溝墓出土土器観察表(2)	44	第25表	中世墓一覧表	89
第13表	1号方形周溝墓出土土器観察表(3)	46	第26表	出土古錢一覧表	91

## 写真図版目次

図版1	上野遺跡遠景		図版21	14号中世墓 15号中世墓
図版2	上野遺跡I区全景		図版22	1号土壤土器出土状況 1号土壤土層断面
図版3	上野遺跡II区全景		図版23	1号土壤完掘 2号土壤土器出土状況
図版4	1号住居址 2号住居址		図版24	N-1トレンチ N-2トレンチ N-3トレンチ
図版5	3号・4号住居址 5号・6号住居址		図版25	N-2トレンチ溝2 N-3トレンチ環濠 N-2トレンチ環濠
図版6	7号住居址 8号住居址		図版26	1号方形周溝墓出土土器(1)
図版7	9号住居址・掘立柱建物遺構 10号住居址		図版27	1号方形周溝墓出土土器(2) 円形周溝墓出土土器
図版8	11号住居址 12号住居址		図版28	5号住居址出土土器 2号住居址出土土器 8号住居址出土土器
図版9	13号住居址 14号住居址		図版29	10号住居址出土土器 16号住居址出土土器
図版10	15号住居址 16号住居址		図版30	1号土壤出土土器 2号土壤出土土器 E-2トレンチ5溝出土土器
図版11	1号・2号方形周溝墓 3号方形周溝墓		図版31	16号住居址出土石器 遺構外出出土石器
図版12	1号方形周溝墓南辺土器出土状況		図版32	10号住居址出土石器 遺構外出出土石器五輪塔・宝鏡印塔
図版13	1号方形周溝墓東辺土器出土状況			
図版14	1号方形周溝墓北辺土器出土状況			
図版15	円形周溝墓 円形周溝墓土器出土状況			
図版16	1号中世墓 2号中世墓 3号中世墓			
図版17	4号中世墓			
図版18	5号中世墓 6号中世墓			
図版19	7号中世墓 8号中世墓 9号中世墓断面			
図版20	10号中世墓 12号中世墓 13号中世墓 14号中世墓			

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

三珠町では、昭和63年度事業として「農村ひろば」の造成を計画し、その予定地として三珠町字上野の丘陵が選ばれた。ここは昨年度調査された…条氏館跡遺跡の占地する丘陵で造成予定地は、一条氏館跡遺跡より一段昇った隣接地で、弥生時代の包蔵地である可能性が非常に高かった。また、地元の人達はこのあたりを「ホトケヤマ」と呼んでいることなどから、県教育委員会文化課が立ち会い、現地踏査を実施した。その結果、弥生時代後期の土器片や五輪塔の一部などが見つかった。これらのことから三珠町では発掘調査の準備に入った。

調査は工事の関係上 7 月までには終わることとし、そのため 4 月 1 日から 3 ヶ月間が用意された。遺跡は谷を挟んだ 2 つの丘から成り、東側の丘を I 区、西側の丘を II 区と名付けた。まず機械により I 区の平坦面から排土を始め、後は人力により遺構の検出、掘り下げを行った。I 区がある程度のめどがついたところで II 区に移った。両区とも平坦面を重視し、傾斜面は 3 本程度のトレーナーを入れ、丘陵の性格を調べた。

調査開始から 2 週間くらいは作業員が少なく目に見えるような成果はなかったが、4 月末には既に 1 号方形周溝墓と円形周溝墓は検出されていた。そのため、調査が期限内に終了するかどうか分からなくなってきたが、作業員に休日にも出勤してもらう等の協力を得、また教育委員会の尽力もあって、6 月 30 日には終了することができた。その間、町内の小・中学校の児童・生徒、また町外の中学校生徒をはじめとした多くの見学者が訪れ、6 月 26 日には山梨考古学協会主催と町民の皆様を対象にした現地説明会を実施し、100 人を越える見学者を迎えることができた。

整理作業は 9 月から開始したが、出土品の一部は既に 5 月にオープンしたばかりの三珠町民文化資料館に展示されている。他の出土品についても三珠町で保管し、展示等に活用していくたい。

(堀ノ内)

## 第Ⅱ章 遺跡を巡る環境

### 第 1 節 地理的環境

上野遺跡は西八代郡三珠町上野に所在する。三珠町はほぼ逆三角形状を呈する甲府盆地の南端にあたり、笛吹川と芦川の合流地点よりやや東に位置する。町内は大きく 3 つの地区に区分される。丘陵地帯の大塚地区、芦川の扇状地を中心とする上野地区、芦川峡谷に沿った下九一色地区的 3 地区であるが、概して山地が大部分を占めている。

遺跡の上野地区的丘陵は、数多くの遺跡や古墳が点在し考古学上重要な地である曾根丘陵の南西端に属する。曾根丘陵は甲府盆地の北東から南西にのびた丘陵で、本町における標高は 300



第1図 遺跡周辺地形図 [1/2,000]

m前後である。

本遺跡はこの曾根丘陵の南西端にあたる上野地区の舌状台地上に占地し、小谷をはさむ東西2つの台地で構成され、I区・II区と区分されている。I区は東側の方形に広がる台地で、その標高は約305mを測る。II区は谷を越えた西側に舌状に広がり、標高はI区とはほぼ同じである。盆地面との比高差は約60mを有する。また、一条氏館跡遺跡はこの台地から北西方向にのびた一段下位の小規模な舌状台地上に所在し、本遺跡とは農道をはさんで隣接する。

## 第2節 歴史的環境

上野遺跡の所在する三珠町は甲府盆地の南端に位置し、多くの遺跡や古墳が点在し考古学上注目されている曾根丘陵の南西端部にあたる。町内でも丘陵を中心とし、いくつかの遺跡が確認されている。以下概略を述べる。

二段で形成されている大塚地区の丘陵の上段、標高約370mの地には、旧石器時代の石器や縄文時代早期の押型文土器が出土した水呑場遺跡があり、また、縄文時代前期末から中・後期の遺物が中心に出土し、馬の刻線画が施された土師器蓋の破片が出土した上野原遺跡がある。豊富村との境付近の台地の先端部には鳥居原古墳⑧が存在する。この古墳は5世紀初頭から中頃のもので、赤鳥元年銘対置式神獸鏡が出土し学界でも著名である。丘陵下段では、大塚地区西原に敷石遺構⑦の存在が知られているが、現在では原形をとどめていない。更に前期古墳の大塚古墳⑥、伊勢塚古墳⑤、エモン塚古墳④など丘陵上には10数基の古墳が点在しているが、現在内容の判明しているものは僅かである。

丘陵を南西にぐだると、金川曾根広域農道建設に伴って調査された一城林遺跡③が存在する。弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺跡で、上野遺跡①と一条氏館跡遺跡②ののる台地とは谷を一つ隔てた東側に位置している。なお、昭和26年の調査では炭化米が発見されている。また、上野遺跡から一段下った北西にのびる舌状台地には、一条氏館跡遺跡が存在する。町民文化資料館建設に伴って調査され、方形周溝墓6基等が確認された。

(土崎美和)

## 第III章 調査の方法と層位

今回の調査地域は12,000m<sup>2</sup>が対象であったが、その中には谷や斜面も含まれている。実際に調査したのはトレンチも含めてほぼ4,000m<sup>2</sup>である。調査終了後は造成のため現状より1mほど削平されるため、平坦面はできる限り広く取り、傾斜面はトレンチで補った。そのため、調査区の形状は一定していない。

機械による排土後、人力で精査し遺構検出を行い、並行して南北を軸に10mメッシュのグリッドを設定した。グリッドの呼称については、第3図を参照されたい。

本遺跡の基本土層は、第I層が耕作土、第II層が暗褐色弱粘質土層で、遺物はこの層に包含さ



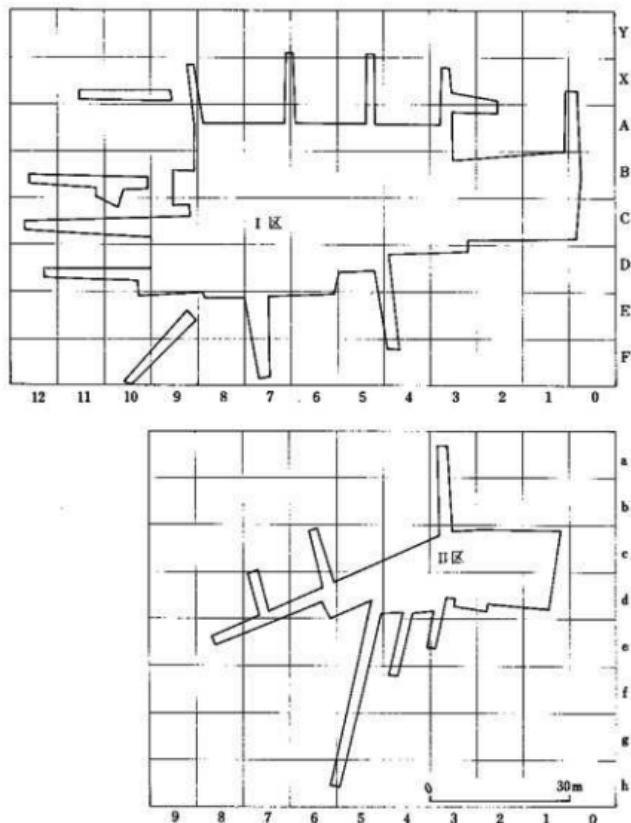
第2図 周辺遺跡分布図〔1/25,000〕

遺跡地名表

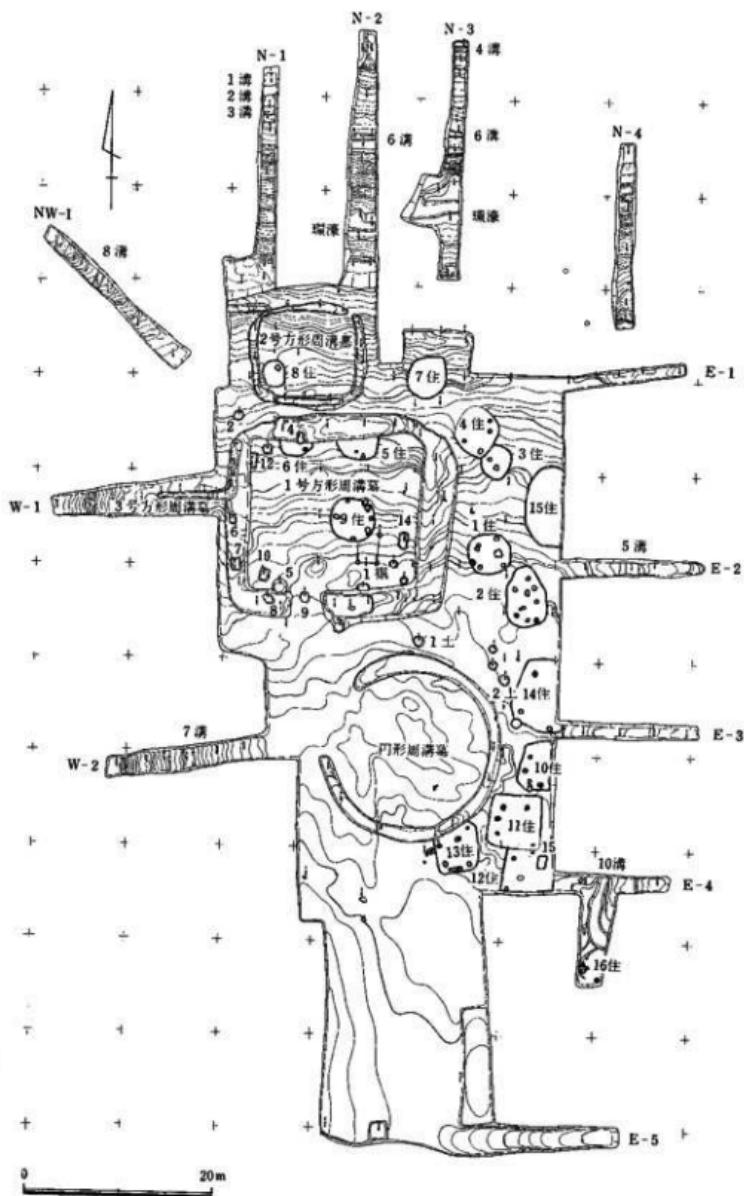
- |          |            |          |           |
|----------|------------|----------|-----------|
| 1. 上野遺跡  | 2. 一条氏館跡遺跡 | 3. 一城林遺跡 | 4. エモン塚古墳 |
| 5. 伊勢塚古墳 | 6. 大塚古墳    | 7. 敷石遺構  | 8. 鳥居原古墳  |

れる。第III層は黄色ローム層でII層上面が遺構確認面でもあるが、II区は擾乱がひどいため、薄い耕作土の直下にローム層がくる。第IV層は、黄白色軽石層で、これは古御岳の第1浮石層（Pm-1）である。第V層は淡黄灰色粘質土層、第VI層は乳灰色粘質土層、第VII層は橙褐色強粘質土層であった。第V層以下は洪積世の所産である。

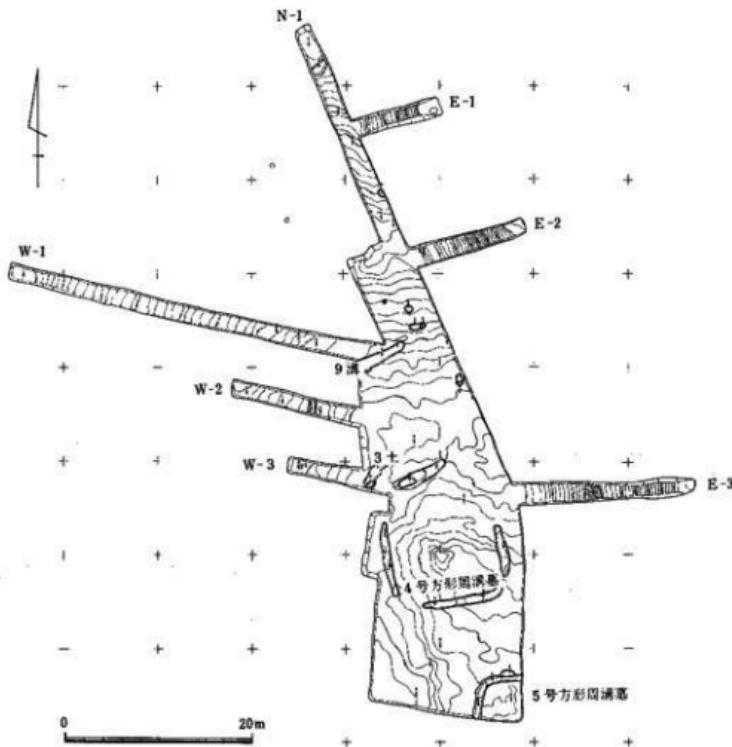
2つの丘に挟まれた谷部は大きく削りとられている。斜面上位では第IV層が天地返しを受け耕作土中に混入し、斜面下位では耕作土直下に第V層以下の層があらわれている。I・II区とも第II層及び第III層上面の削平が激しく、現在の耕作土形成以前に、かなり人為的な地形改変が行なわれた可能性が強い。



第3図 グリット設定図 (1/1200)



第4図 I区全体図 (1/600)



第5図 II区全体図 (1/600)

耕作による搅乱はほぼ全域にわたっており、住居址およびII区はその影響を多く受けていたが、そんな中1号方形周溝墓の供献土器は、溝が深かったことが幸いし、そのままの形を保っていたものが多かった。

図面作成など一部7月まで入り込んだが、ほぼ3ヶ月の調査でこれから述べる成果を上げることができた。

(堀ノ内)

## 第IV章 発見された遺構と遺物

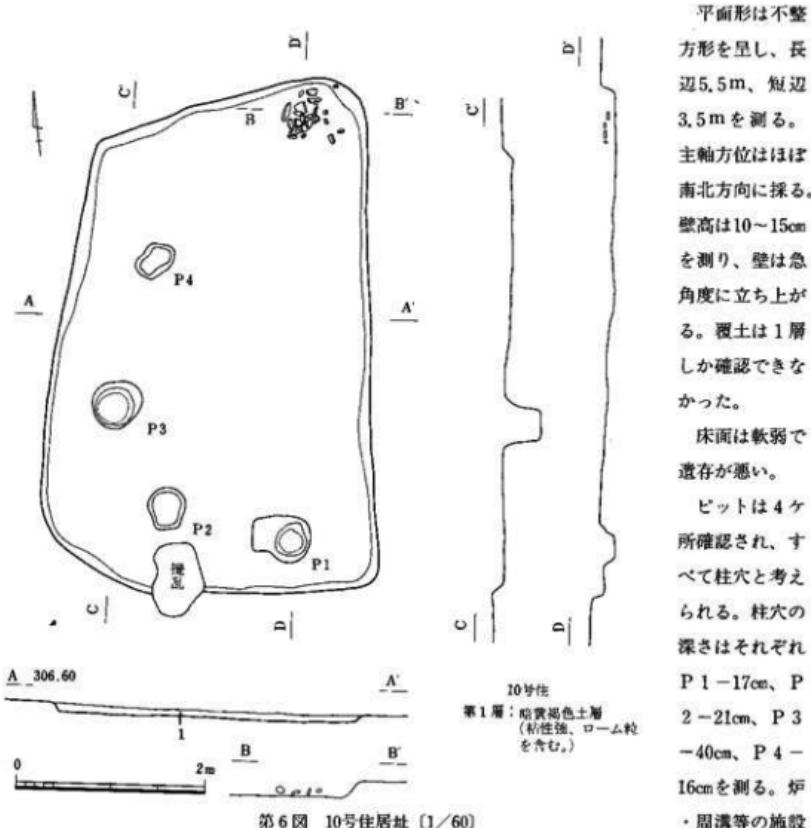
### 第1節 繩文時代の遺構と遺物

#### 1) 竪穴住居址

10号住居址 (第6~8図、図版4・29)

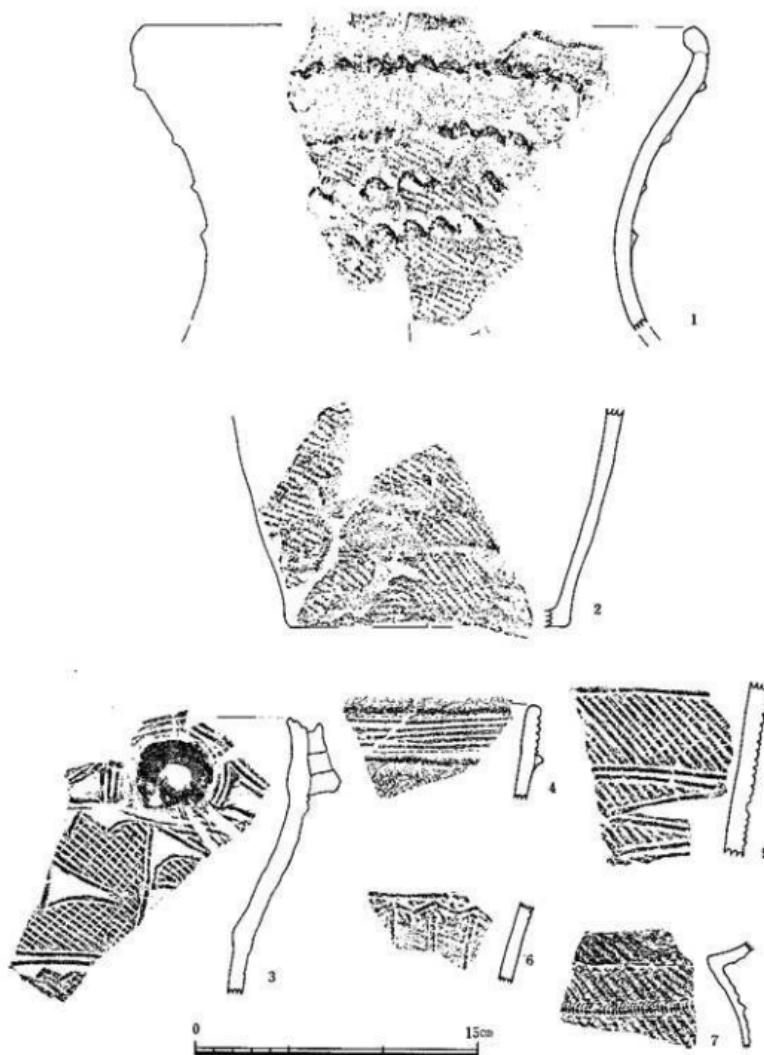
A-4・5区に位置する。西2.5mに円形周溝墓が存在し、南北それぞれ11号・14号住居址が接している。北西15.5mは1号土壙が、6.7mには2号土壙が存在する。

遺存状態は悪く何ヶ所も後世の搅乱を受けている。



は検出されなかった。

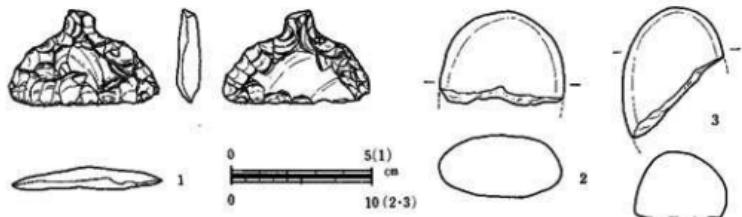
出土遺物は豊富で、床面上では北東隅に集中して認められた。



第7図 10号住居址出土土器 [1/3]

### 10号住居址出土土器

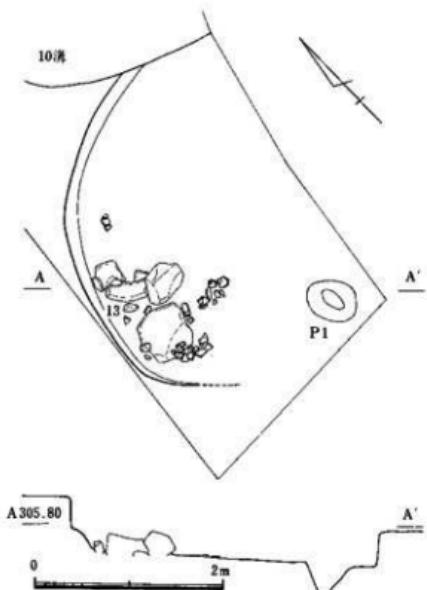
- 深鉢の口縁から胴部。胴部は緩やかにくびれ外反するが、口縁部は内湾し粘土をかぶせて肥厚した口唇を作る。口縁は無文、胴部は繩文で波状の粘土紐が4条貼られる。色調は若干スヌが付着しているため暗褐色を呈する。胎土には雲母を多く含む。
- 深鉢の底部。色調、胎土とも1に酷似し、同一個体と考えられる。
- 深鉢口縁部の大破片。山型の口縁部に、注口状の突起が付く。文様は半裁竹管による平行沈線で直弧の区画を作り、その中に集合沈線を充てる。区画間などの空いた部分はえぐり取られている。色調は暗褐色だが、外面はスヌ付着のため黒褐色の部分が多い。胎土は雲母が目立つ。
- 器種不明、口縁部小破片。口縁部から下には平行して6~7条の沈線が巡り、貼付突帯の下には繩文が施される。色調は黒褐色、胎土には砂が目立つ。
- 深鉢剥部小破片。斜位の集合沈線を切るようにM字状に平行沈線が入る。色調は暗褐色。胎土には雲母を多く含む。
- 深鉢剥部小破片。鋸歯状の平行沈線の下に垂下する平行沈線を入れ、連続した「↑」字状を作る。地文として繩文がうっすらと見える。色調は外面が黒褐色、内面は暗褐色で、胎土には砂が含まれる。
- 深鉢の頸部付近の小破片。口縁は大きく傾き、やや内湾して立ち上がる。胴部は口縁とほぼ90度の角度を持ち、若干の膨らみを持つ。繩文を地文とするが、胴部には半裁竹管で連続剥突された突帯が巡る。色調はやや黄色を帯びた暗乳褐色。胎土は非常に密である。



第8図 10号住居址出土石器 (1/2・1/4)

### 10号住居址出土石器

石匙が1点、磨石が2点出土している。北隅の土器群からの出土で、石匙の刃部は両面から調整されている。1が黒曜石製である。また磨石は両方とも半欠している。2・3が輝石安山岩製である。



第9図 16号住居址 (1/60)

#### 16号住居址出土土器

- 大型の深鉢。口縁には2つずつの山型突起が推定4ヶ所付く。表面全体に羽状繩文が施され、内面には指頭圧痕が顕著に残る。色調は暗褐色、胎土には砂が含まれる。
- 大型の深鉢胴部。表面の風化が激しく、単斜繩文か羽状繩文か判別できない。色調は1に似て暗褐色、胎土は砂が多い。
- 深鉢口縁部破片。傾斜して半調に立ち上がり、表面には羽状繩文が施されるが、風化のためはっきりとは残っていない。内面は指頭圧痕が目立つ。色調は暗褐色を呈し、胎土は砂を含む。
- 大型の深鉢胴部。表面には羽状繩文が施されているが、風化により条線のように残っている。色調は暗褐色だが1よりも明るい。胎土には砂が多く含まれる。そのためか、器壁も厚い。
- 深鉢の口縁部。口縁下には半截竹管による平行沈線が2本巡り、沈線帯には竹管を途中で押しつけたC字・逆C字の刺突が入る。この下には、縦位の羽状繩文が入る。色調は暗乳褐色。
- 深鉢の胴部小破片。ほぼ中央に5と同様な沈線帯が2本巡り、それを境にRL、LRの単斜繩文が上下に施される。色調は暗乳褐色を呈し、胎土に纖維が混じる。
- 深鉢の胴部破片。単斜繩文の上を8条以上の籠搔平行沈線が入る。色調は暗褐色、胎土には砂が含まれる。
- 深鉢胴部小破片。表面は無文だが、纖維の跡がはっきりと残っている。色調は暗乳褐色。

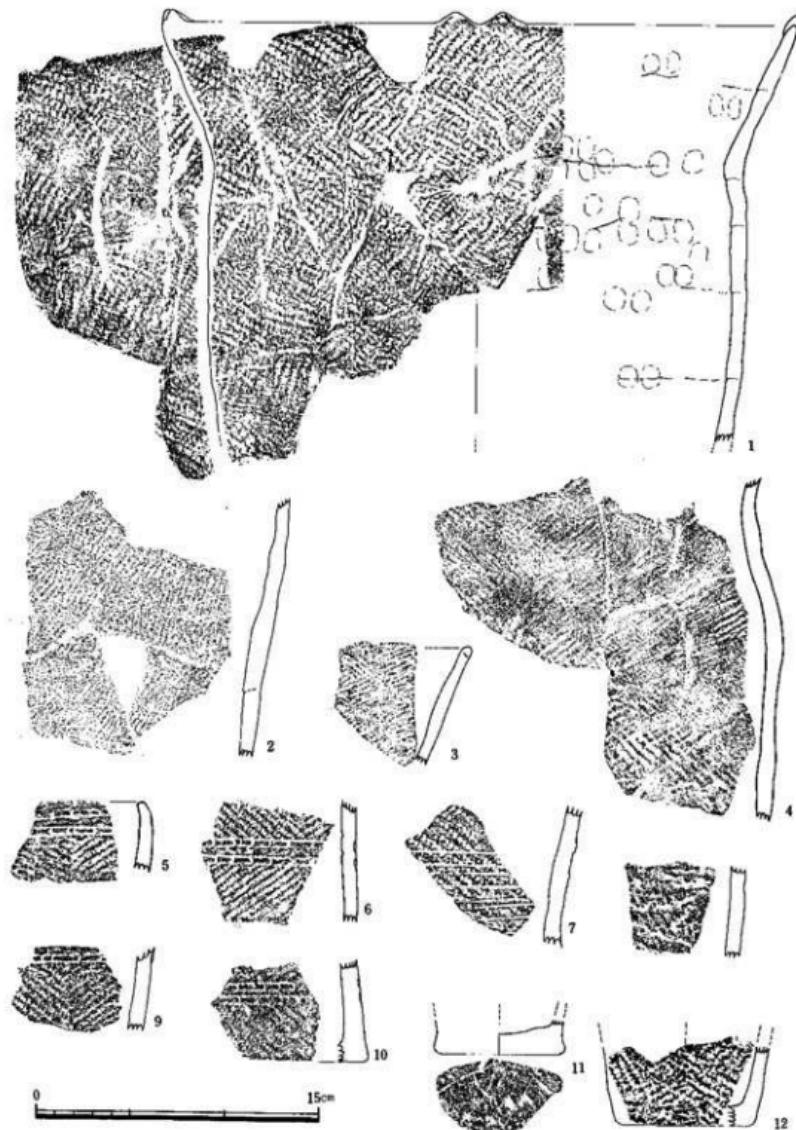
#### 16号住居址 (第9~11図、(岡版10・29))

A-2・3区に位置し、E-4トレチ南端から検出された。北西18mに10号住居址が離れて存在する。

北東部を10溝に切られ、南半部は削平を受けるため遺存状態は極めて悪く、北西部の一部が検出されたにすぎない。そのため平面形態、規模、主軸方位などはまったく不明である。壁高は遺存部では13cmを測り、直線的な立ち上がりを見せる。

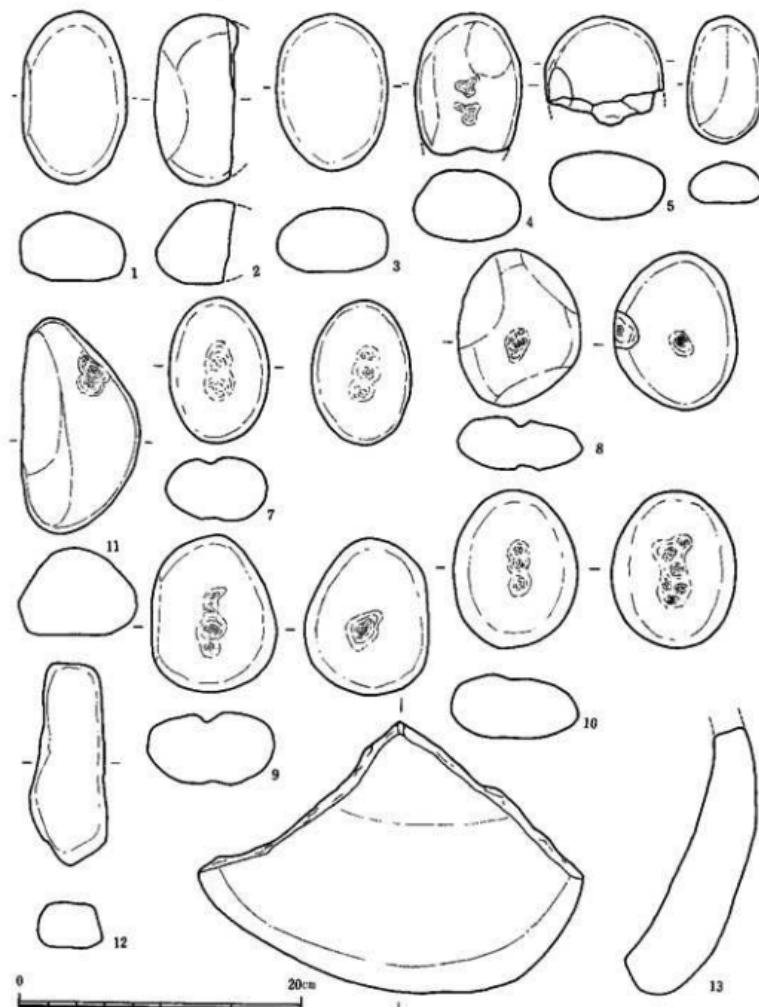
ピットは1ヶ所検出され、深さは34cmを測る。炉・周溝等の施設は検出されなかつた。

住居址の遺存状態の割には出土遺物は比較的豊富で、特に西壁沿いに集中していた。



第10圖 16號住居址出土土器 (1/3)

9. 上記5と同一個体か。共に纖維が混入されている。
10. 深鉢底部。6と同一か。
11. 深鉢底部。色調は暗褐色。胎土には砂が含まれる。木葉痕を残す。
12. 深鉢底部。やや膨らみを持ちながらほぼ直に立ち上がる。器面には単斜繩文が施される。色



第11図 16号住居址出土石器 (1/4)

調は表面暗褐色、内面煮こごりのため黒褐色を呈し、胎土には若干の砂が含まれる。

#### 16号住居址出土石器

石器が比較的多く出土した。1~10が磨石で4・7・8・9・10は叩石としても使用されている。11・12は叩石である。また13は石皿で集石部に伏せた状態で設置してあった。石材は1・3・4・6・7・8・9・10・11・13が輝石安山岩、2が安山岩、5が石英斑岩、12が変質安山岩である。

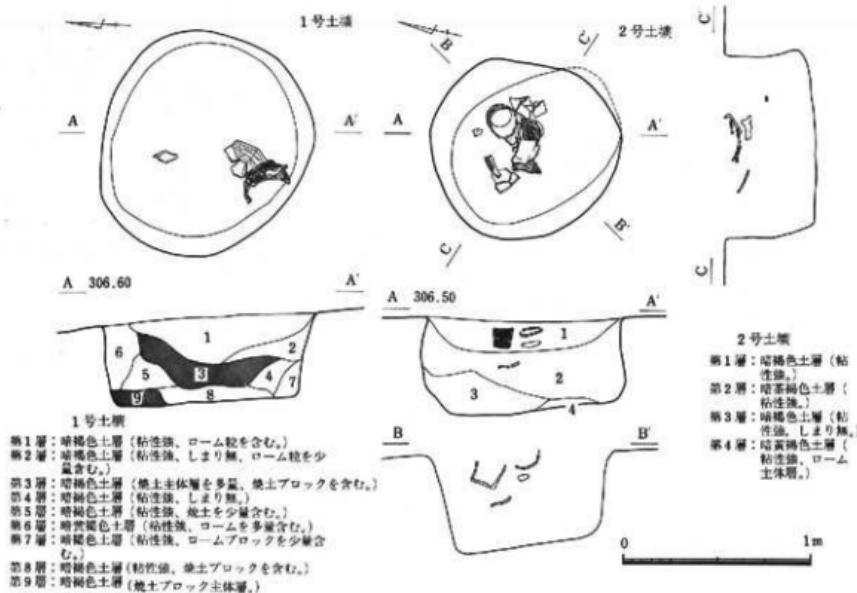
## 2) 土 壤

### 1号土壤 (第12~13図、図版22~23・30)

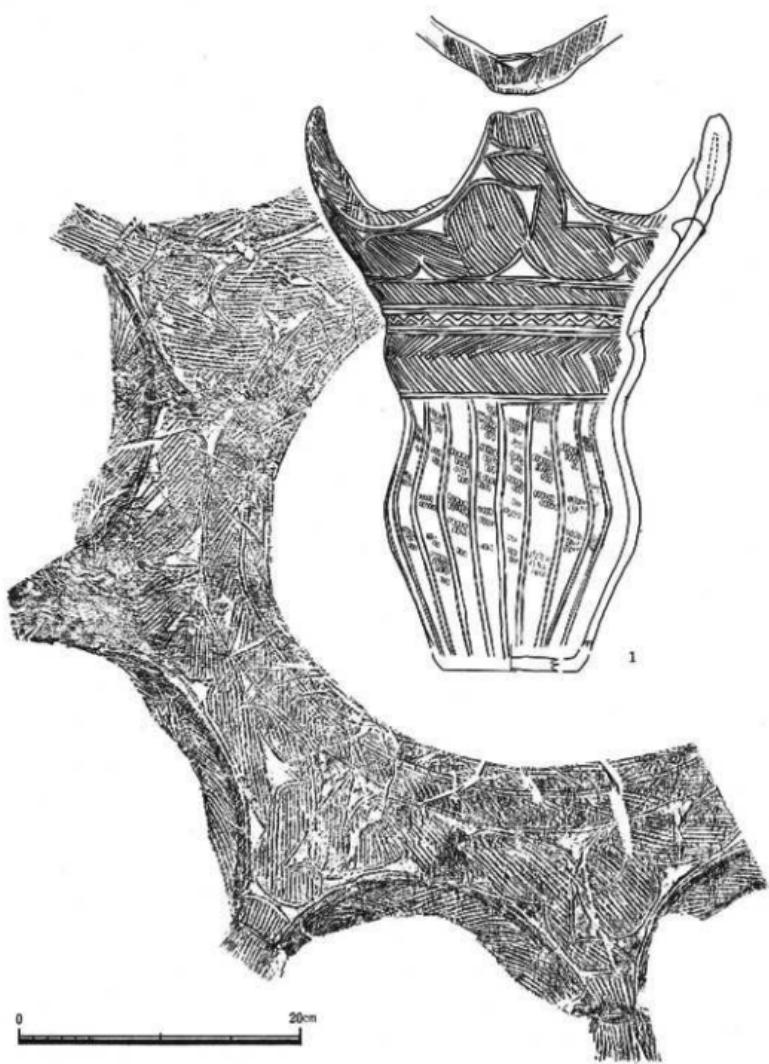
B-6区に位置する。南東6mに2号土壤が、同じく15.5mに10号住居址が存在する。

平面形は不整円形を呈し、規模は径1.1~1.2m程を測る。断面形は鍋底状を示し深さは50cmである。覆土は9層に分けられ、第3・8・9層には多量の焼土及び焼土ブロックが混入する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、堅緻であった。

覆土中位から完形の深鉢型土器が出土した。土器底部が第3層(焼土主体層)に埋まるような状態で斜めの正位で出土した。



第12図 1号・2号土壤 (1/30)



第13図 1号土壤出土土器〔1／4〕

## 1号土壙出土土器

ほぼ完形品の深鉢で、色調は暗褐色、胎土には雲母を多く含む。内面調整は非常に丁寧である。器形はキャリバー形を呈し、胴部中位で膨らんだあとラッパ状に広がり口縁部に至る。

口縁部は4単位の山型突起を持ち、粘土を、板状にして貼り合わせているのが、断面で観察できた。俯瞰の位置からだと方形に見える。文様は胴部上半と下半で異なり、上半は平行の集合沈線が基本で、半截竹管による平行沈線により直弧を組み合わせた区画を作り、その内を集合沈線で埋める。区画外に生じる無文箇所は窓によりえぐられる。下半は縄文が地文で平行沈線が垂下する。また上半部の下位、縫杉文・鋸曲文・斜行沈線が施されている付近にも、わずかに縄文が残っている。全体を縄文で覆うつもりであったのだろうか。底部は被熱のため非常に龜い。五領ヶ台式に比定されよう。

## 2号土壙 (第12・14~15図、図版23・30)

A・B-5区に位置する。北西6mに1号土壙が、南東6.7mに10号住居址が存在する。

平面形は不整円形を呈し、規模は0.9~1mを測る。断面形は鍋底状を示すが南東部はオーバーハング状を呈しており深さは50cm程である。覆土は4層に分けられ、レンズ状の自然堆積を示している。壁は堅緻で内湾して立ち上がる。後述する土器の出土状態などから、本来の堀込面はより上部にあったものと考えられる。

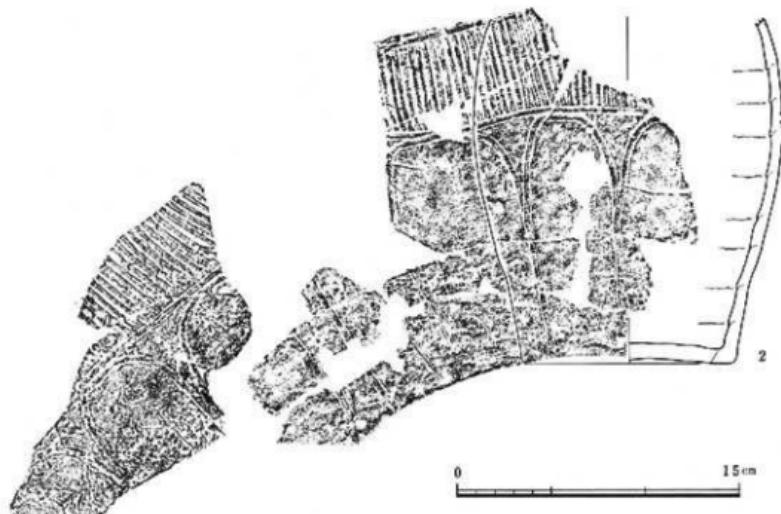
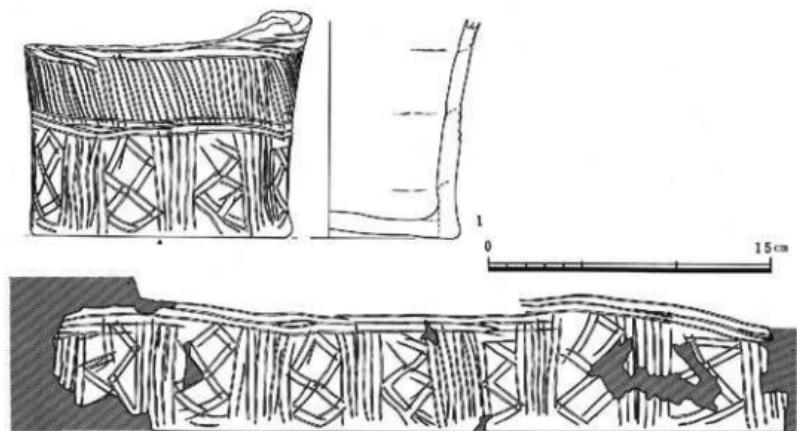
覆土上位から深鉢型土器1・2・3が出土している。ほぼ第1層から第2層上部にかけて認められ、土壙埋没途上にまとめて投げ捨てられた様相を呈している。

## 2号土壙出土土器

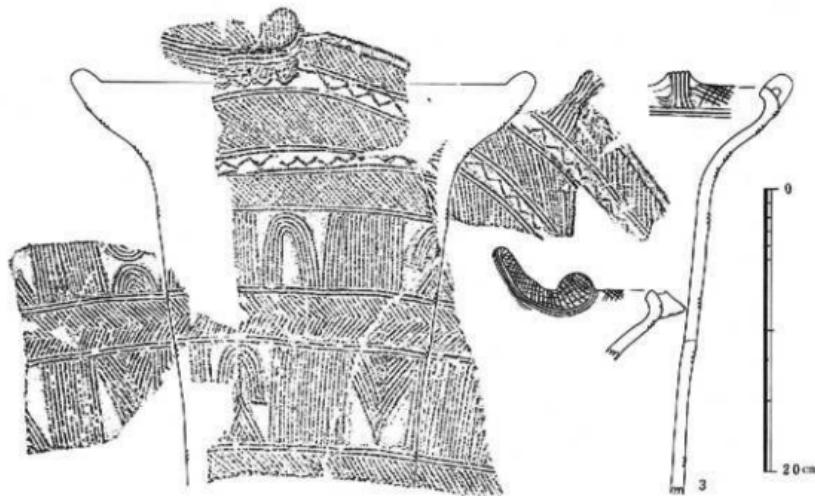
1. 深鉢の底部以上12cmほど現存。色調は暗褐色を呈し、胎土は雲母が多い。やや外反しながら立ち上がる胴部に半截竹管による集合沈線を8ヶ所垂下させ、その間を直線で施文する。多くは方形を主体としているが、意匠がそれぞれ微妙に異なる。その上には半截竹管による3条の平行沈線が巡り、さらに斜位の集合沈線が入る。内面調整は丁寧だが僅かに輪積痕が残る。五領ヶ台式。

2. 平底でたまご型の胴部をもつ深鉢で、図化し得た部分より上は破片すら出土していない。胴部最大径付近上部は直に降ろした集合沈線で埋め、下部は平行沈線で逆U字状に大きく施文する。色調は表面が暗褐色。内面は煮こごり付着のためやや黒褐色を呈する。胎土には砂が若干多めに含まれている。調整はやや粗く、内面には輪積痕が顕著に残る。

3. 深鉢の口縁から胴部までの破片。全面を集合沈線で施文しパターンはあるものの、窓状の空間には逆U字形あるいは三角形などの沈線があり、文様は一定していない。それらの外にできる三角形の無文箇所は窓により深くえぐられており、2本の鋸歯文帯も同様である。口縁は大きく外反し後に内湾し口唇に至る。口縁につく突起は2種類みられるが、各々何個づつあるかは不明である。色調は暗褐色。胎土には雲母が多く含まれる。内面は丁寧なナデである。 (堀ノ内)



第14図 2号土壙出土土器(1)〔1／3〕



第15図 2号土壙出土土器(2) [1/4]

## 第2節 弥生時代の遺構と遺物

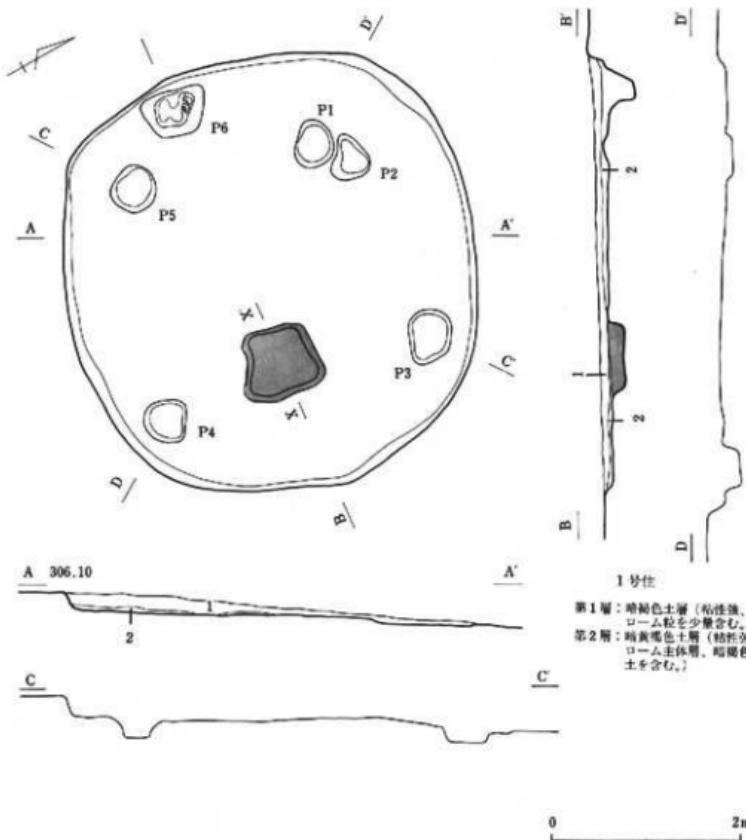
### 1) 堅穴住居址

1号住居址 (第16~18図、第1表、図版4)

A-7、B-6・7区に位置する。西2mに1号方形周溝墓が、北6mには3・4号住居址が重複して存在する。北東2.5mには15号住居址が、南東1mには2号住居址が近接する。

遺存状態は悪く中央部を搅乱され、また上面も削平を受けている。

平面形は隅丸長方形に近い円形で、規模は径4.5m程を測る。主軸方位は、炉～貯蔵穴を結ぶ



第16図 1号住居址 (1 / 60)

線を基準とするとほぼ東西方向を採るものと考えられる。壁高は4~18cmを測り、壁は急角度で直状に立ち上がる。覆土は2層に分けられ、緩やかなレンズ状の自然堆積を示している。

床面は全面堅緻な貼床で、特に炉周囲、出入口付近は著しい。

ピットは6ヶ所検出され、P1~P5までが柱穴、P6が貯藏穴である。柱穴の深さは、それぞれP1-11cm、P2-17cm、P3-27cm、P4-8cm、P5-7cmを測る。貯藏穴は出入口部に付設され、平面形は不整円形を呈する。規模は70cm×50cmで深さ30cm、断面形は逆台形を示す。

周溝は検出されなかった。

出土遺物は少なく、図示したものは1点である。図示したもの以外では、820gの土器が出土している。

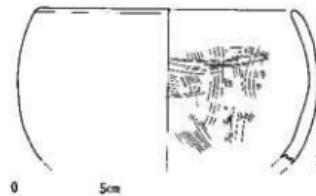
### 《炉》

炉は1基付設され、住居址中央やや奥部の柱穴間線上から検出された。不整方形を呈する地床炉で規模は90cm×85cmを測る大型のものである。断面形は逆台形を示し深さは15cmを測り、覆土は5層に分けられる。炉壁は堅く焼き締められ、炉周囲は盛り固められている。



第17図 1号住居址〔1/30〕

第1層：暗褐色土層—地土層  
第2層：暗褐色土層（軽性強、灰土を少量含む。）  
第3層：暗褐色土層（地土主体層、暗褐色土を含む。）  
第4層：暗褐色土層—地土層  
第5層：明黄褐色土層（軽性強。）



第18図 1号住居址出土土器〔1/3〕

第1表 1号住居址出土土器観察表

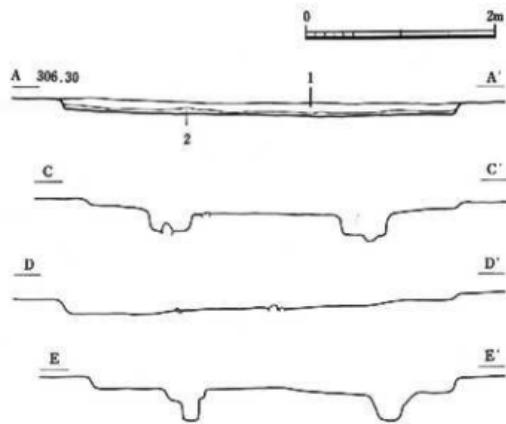
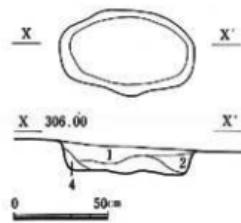
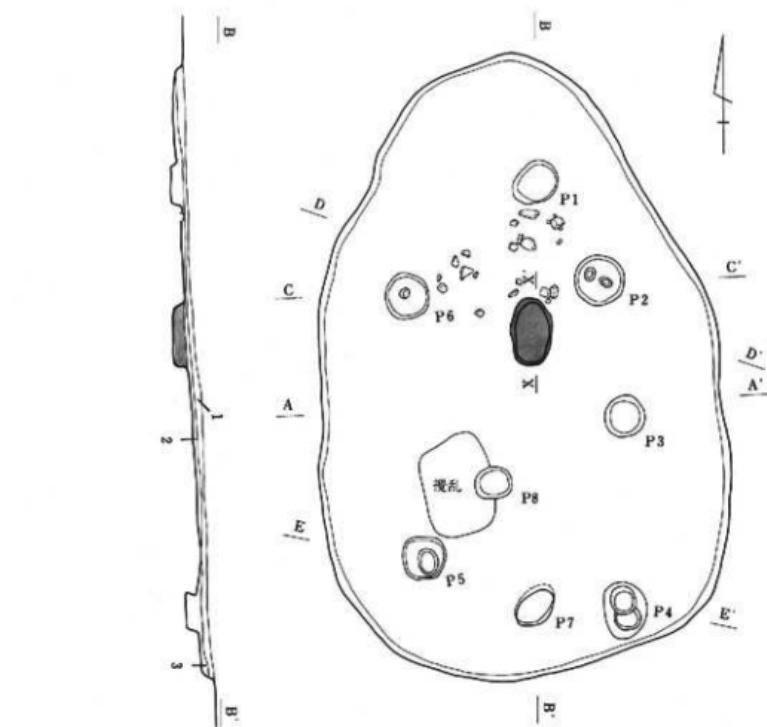
1	鉢	法量：口縁部径(14.4)cm、胴部径(16.0)cm。現存率：口縁部～胴部%。調整：外面一口唇部ヨコナデ。口縁部ハケのちヨコナデ。体部横方向の粗いハケのち横～斜方向のミガキ。内面一口唇部ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。体部縦方向の粗いハケのち横方向のミガキ。胎土：砂粒を多く含み密。焼成：良。色調：淡褐色。
---	---	---

### 2号住居址 (第19~20図、第2表、図版4・28)

A-6・7区に位置する。西6.5mに1号方形周溝墓が、南3.5mに14号住居址、北東2.5mに15号住居址が存在する。北西1mには1号住居址が近接する。

上部に削平を受けるが遺存状態は良好である。

平面形は長卵形を呈し、長軸6.6m、短軸4.4mを測る。主軸方位はN-1°-Wをとる。



- 2号住跡
- 1層：暗褐色土層（粘性強。）
  - 2層：暗黃褐色土層（地面上を含む。）
  - 3層：暗褐色土層（地盤ブロックを含む。）
  - 4層：明黄褐色土層（粘性強。）
- 2号住跡
- 1層：暗褐色土層（粘性強。）
  - 2層：暗褐色土層（粘性強。ロームブロックを多量含む。）
  - 3層：明黄褐色土層（粘性強。ローム粒を多量含む。）

第19図 2号住居跡・同炉址 [1/60, 1/30]

壁高は15cm程で、壁は直線的にやや開いて立ち上がる。覆土は3層に分けられ自然堆積を示している。

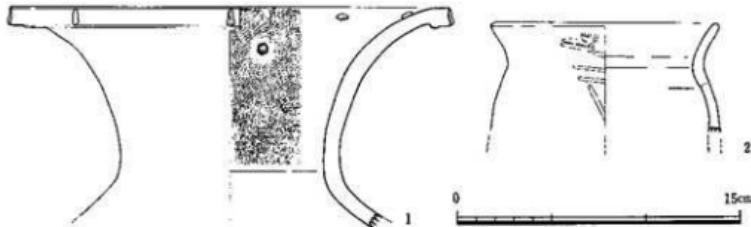
床面は一部貼床が施され、出入口から中央部が特に堅緻である。

ピットは8ヶ所検出され、P1～P6までが柱穴、P7あるいはP4が出入口施設である。ピットの深さはそれぞれP1-11cm、P2-30cm、P3-14cm、P4-26cm、P5-34cm、P6-22cm、P7-50cmを測る。周溝は検出されなかった。

出土遺物は豊富であったが、図示したものは僅かである。炉北側に集中して出土した。図示したもの以外に2kgの土器が出土している。

#### 《炉》

炉は1基付設され、中央やや北から検出された。楕円形平面を呈する地床炉で、規模は長軸75cm、短軸45cmを測る。断面形は鍋底状を示し、深さは18cmで覆土は4層に分けられる。炉壁は軟弱であった。



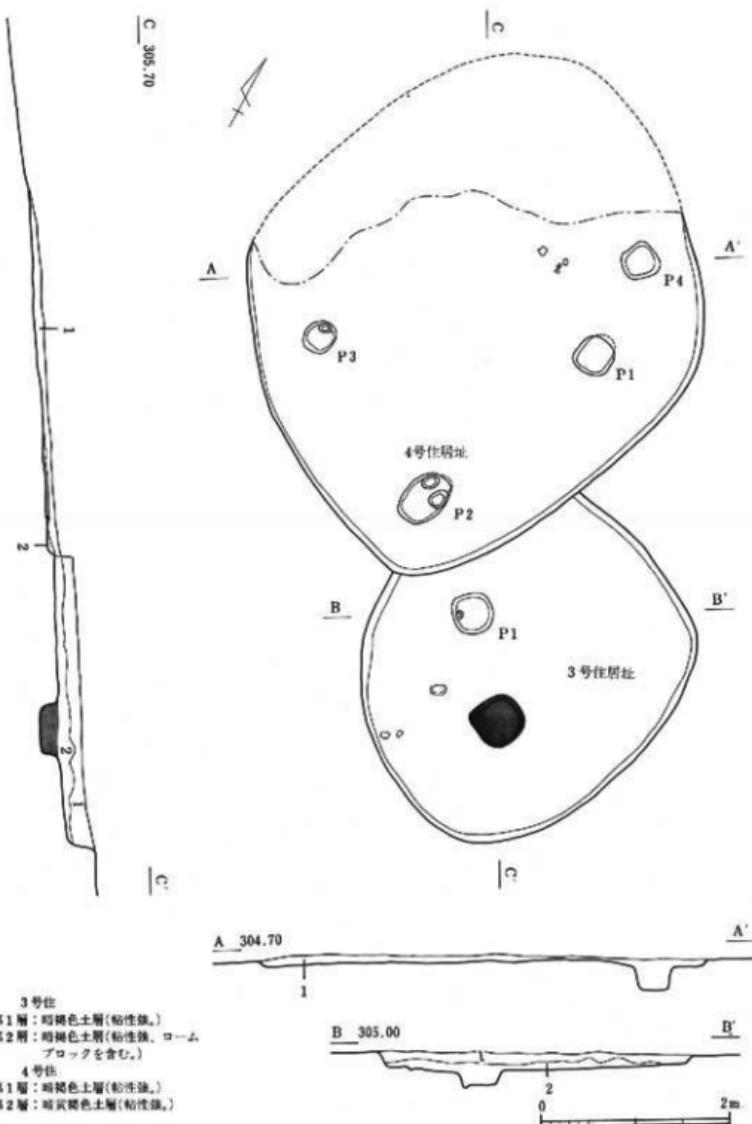
第20図 2号住居址出土土器〔1/3〕

第2表 2号住居址出土土器観察表

1	壺	法量：口縁部径(23.8)cm。頸部径(11.8)cm。現存率：口縁部～肩部上端%。調整：外面一折り返し口縁を呈し2ヶ所に棒状貼り付けを有す(全体で8ヶ所か。)口唇部ヨコナデ。口縁部縱方向のハケのちナデ。頸部ヨコナデのち縱方向のミガキ。肩部細縄文。内面一口縁部2ヶ所に円形浮文を有し(全体で7ヶ所か。)ヨコナデのち押压縄文を施す。頸部ハケのちナデのち横方向のミガキ。胎土：砂粒を含み密。焼成：良。色調：やや暗褐色。
2	壺	法量：口縁部径(11.2)cm。頸部径(10.5)cm。現存率：口縁部%。調整：外面一口唇部ヨコナデ。口縁部縱方向のハケのち横方向のミガキ。頸部横方向のミガキ。胴部上位横および斜方向のミガキ。内面一口縁部横方向のミガキ。頸部粗いハケのちミガキ。胴部上位横方向のミガキ。巻き上げ痕を残す。胎土：白砂粒を含み密。焼成：良。色調：赤褐色。

#### 3号住居址 (第21～22図、第3表、図版5)

A-8、B-7・8区に位置する。南6mに1号住居址が存在し、東2.5mに15号住居址が、



第21図 3号・4号住居址 (1/60)

南西2.5mに1号方形周溝墓が隣接する。本住居址北西部が4号住居址に切られている。

遺存状態は良くない。

平面形は東隅部がひしゃげた隅丸方形を呈し、規模は長辺4m、短辺3.5mを測る。主軸方位はN-26°-Eにとる。壁高は15cmを測り、急角度で直線的に立ち上がる。覆土は2層である。

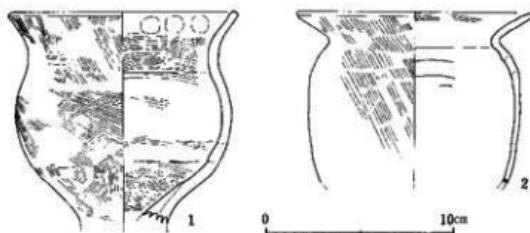
床面は一部貼床が施され、縦級で特に炉周囲が著しい。

ピットは1ヶ所検出され、深さは14cmである。周溝は検出されなかった。

出土遺物は少なく、図示したのも僅かである。図示した以外2kgの土器が出土している。

#### 《炉》

炉は1基、住居址中央やや南側に付設される。平面、隅丸方形を呈する地床炉で規模は1辺約50cmである。断面形は鍋底状を呈し、深さは12cm程度である。



第22図 3号住居址出土土器(1/3)

第3表 3号住居址出土土器観察表

1	台付瓶	法量：口縁部径(12.4)cm。頸部径(10.2)cm。胴部径(11.6)cm。脚接合部径(4.7)cm。現存率：口縁部～胴部中位 $\frac{1}{2}$ 。胴部下位 $\frac{1}{2}$ 以上完存。調整：外面一口縁部ヨコナデ。口縁部斜方向のハケ、胴部上位斜方向のハケ。胴部下位紙～斜方向のハケ。内面一口縁部ヨコナデ。指頭圧痕が残る。頸部横方向のハケ。胴部上位ヘラケズリ。胴部下位斜方向のハケ。胴部中位巻き上げ痕を残す。胴部底脚接合痕を残す。胎土：粗い砂粒、雲母、所々に直径5mm位の小石を含む。焼成：良。色調：淡褐色。
2	甕	法量：口縁部径(12.6)cm。頸部径(9.2)cm。胴部径(11.4)cm。現存率：口縁部 $\frac{1}{2}$ 。胴部上位～中位 $\frac{1}{2}$ 。調整：外面一口縁部斜方向のハケのちヨコナデ。胴部斜方向のハケ内面～口唇部ヨコナデ。口縁部横方向のハケのちヨコナデ。胴部ナデ。胴部上位巻き上げ痕を残す。胎土：白砂粒を含み密。焼成：良。色調：黒褐色。

#### 4号住居址 (第21~23図、第4表、図版5)

B-8区に位置する。西1mに1号方形周溝墓が隣接する。南8mには1号住居址、北西3.4mに7号住居址、南東5.5mには15号住居址が存在する。本住居址南東部が3号住居址を切っている。

遺存状態は不良で、北半部に搅乱を受け北西隅は遺存しない。平面形は隅丸の不整方形で、規

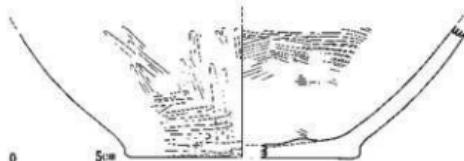
模は長辺5.1m、短辺4.6mを測る。壁高は最大でも8cm程しか遺存していないが、壁は急角度で立ち上がる。覆土は2層に分けられ、レンズ状の自然堆積を示す。

床面は一部貼床が施され、遺存部は堅緻である。

ピットは4ヶ所検出され、P1～P3までが柱穴である。柱穴の深さはそれぞれP1-38cm、P2-27cm、P3-17cmである。P4は出入口施設である可能性が強く、深さは33cmを測る。

炉・周溝は検出されなかった。

出土遺物は少なく、図示したものも僅かである。それ以外1.42kgの土器が出土している。



第23図 4号住居址出土土器(1/3)

第4表 4号住居址出土土器観察表

1	壺	法量：底部径(12.0)cm。現存率：胴部下位3%。底部1%。調整：外面-胴部縦～斜方向の丁寧なミガキ。底部付近縦のち横方向の丁寧なミガキ。赤色塗彩。内面-胴部粗いハケ。底部ナデ。胎土：砂粒を僅かに含み密。焼成：良。色調：赤褐色。
---	---	---

#### 5号住居址 (第24～26図、第5～6表、図版5・28)

C-8区に位置する。東8mに4号住居址、西2.6mに6号住居址が、南4mには9号住居址、北東には7号住居址が存在する。本住居址北半部は1号方形闕溝墓によって切られている。

平面形は隅丸方形に近いと考えられ、規模は東西方向で4.5m程である。主軸方位は、南-北あるいは東-西方向と考えられる。壁高は36cm程を測り、壁はやや開いて直線的に立ち上がる。覆土は2層に分けられ、緩やかなレンズ状の自然堆積を示す。

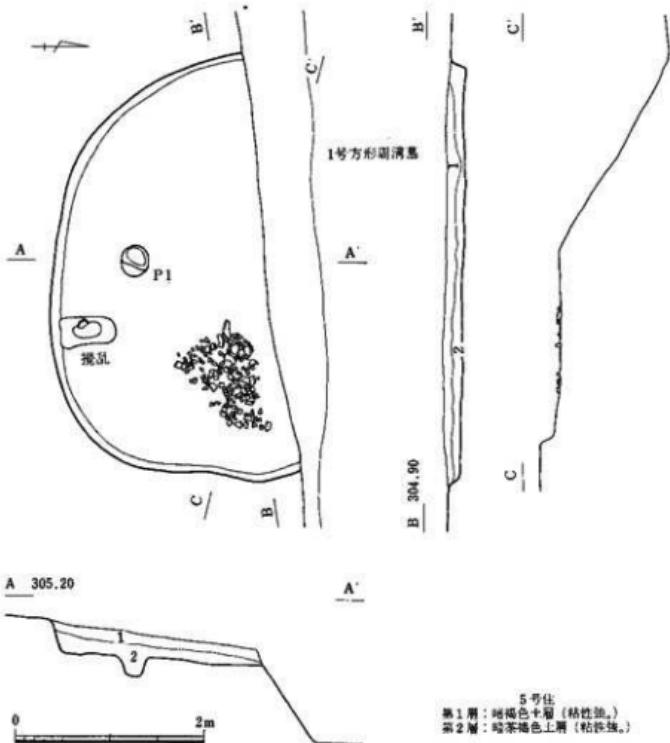
床面は全面貼床で、堅緻である。

ピットは1ヶ所検出され、深さは20cmを測る。

炉、周溝は検出されなかった。

出土遺物は器種、数量とも豊富で、床面上では特に中央東壁寄りに集中して認められた。

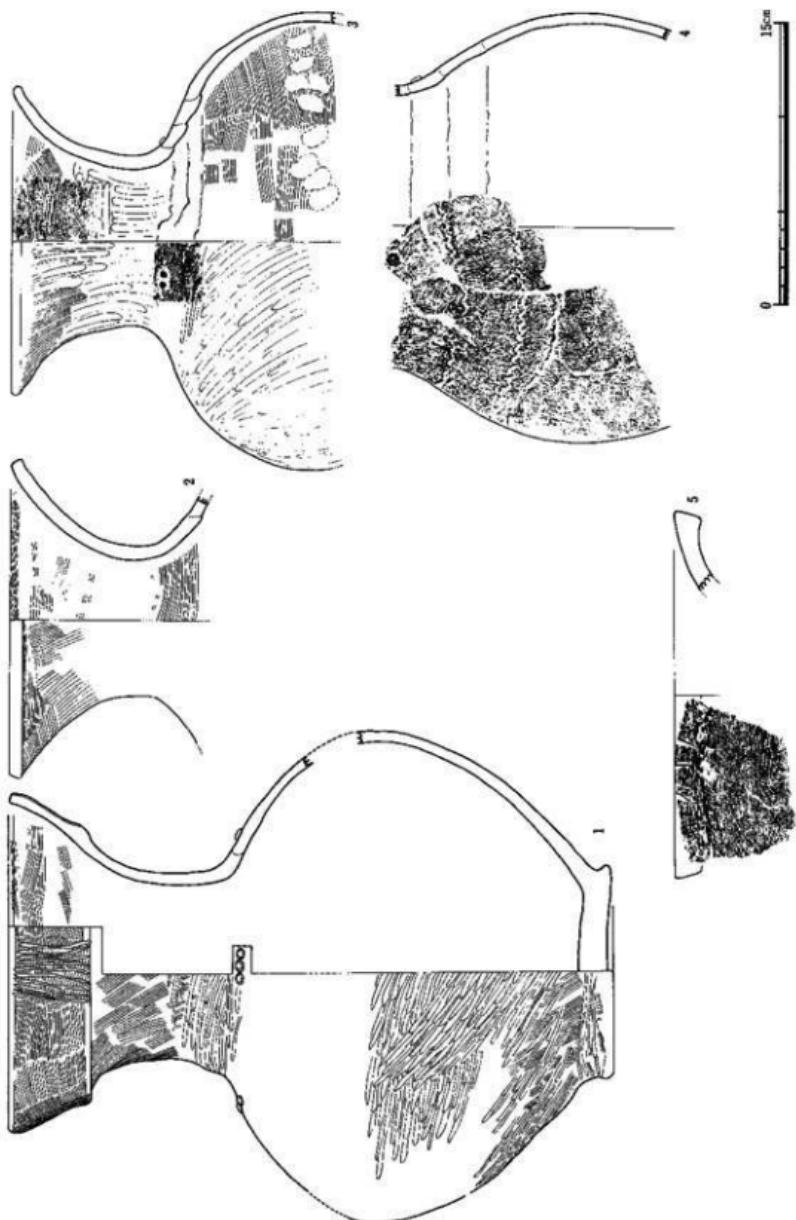
図示したもの以外に2.5kgの土器が出土している。



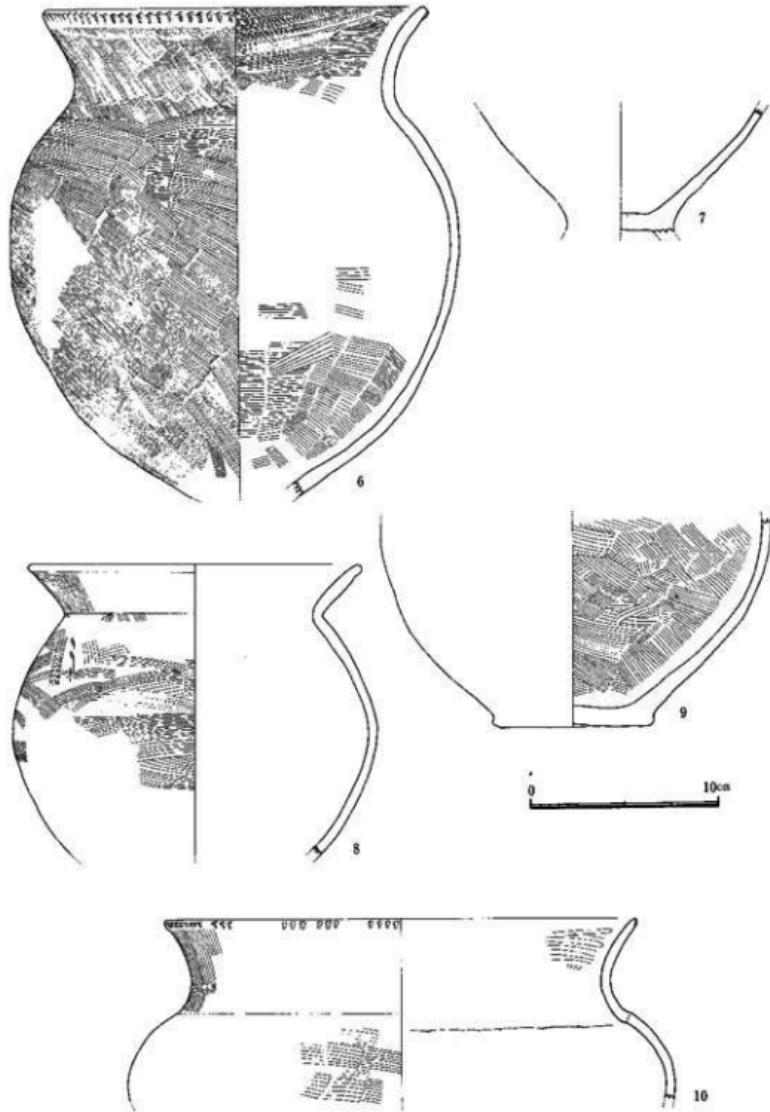
第24図 5号住居址〔1／60〕

第5表 5号住居址出土土器観察表(1)

1	壺	法量：口縁部径18.1cm。頸部径9.9cm。器高(32.0)cm。底部径10.5cm。現存率：胸中位をのぞきほぼ完形。調査：外面一口縁部横方向のハケ。二重口縁。4ヶ所に縱方向の9~10本1単位の沈線文。肩部に円形浮文が3個1単位で3ヶ所（全体で4ヶ所か）貼付されている。頸部縱方向のハケ。頸部下位縱方向のハケのちミガキ。胴部縱方向のハケのちミガキ。内面一口縁部上位ハケのちヨコナデ。口縁部下位～頸部ハケのちナデ。胴部下位縱方向のハケ。底部ハケのちミガキ。胎土：密。焼成：良。色調：暗褐色。
2	壺	法量：口縁部径17.2cm。頸部径8cm。現存率：口縁部～頸部約6cm。調査：外面一口唇部ハケのちヨコナデ。口縁部横方向のハケ。頸部縱～斜方向のハケ。内面一口縁部～頸部ハケのちミガキ。胴部粗い横方向のハケ。胎土：白砂粒を含み密。焼成：良。色調：やや暗褐色。



第25図 5号住居址出土土器(1) [1 / 3]



第26图 5号住居址出土土器(2) (1/3)

第6表 5号住居址出土土器観察表(2)

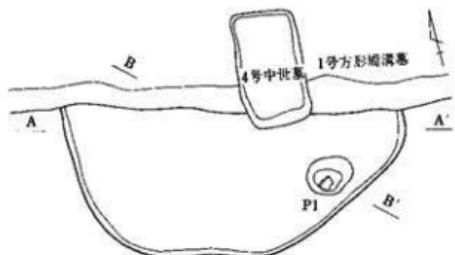
3	壺	法量：口縁部径16.5cm。頸部径9.2cm。胴部最大径24.4cm。現存率：口縁部～胴部中位 $\frac{1}{2}$ 。調整：外面一口唇部ヨコナデ。口縁部～頸部縱方向のハケのち縦方向のミガキ。肩部2cm程の幅で細繩文があり、その上に2対並列で4ヶ所（推定）の円形浮文を貼り付ける。胴部ハケのちミガキ。内面一口縁部細繩文（押圧繩文）。口縁部下位横方向のハケ。頸部横方向のハケ。接合部指頭压痕。巻き上げ痕が見られる。胎土：白砂粒、雲母を含み密。焼成：良。色調：暗褐色。
4	壺	法量：胴部径(23.0)cm。現存率：胴部 $\frac{1}{2}$ 。調整：外面一肩部二段の細繩文(L R)を施し、上端部に2対並列の円形浮文を貼り付ける。胴部ミガキ。内面一風化が激しく不明だが接合部に指頭压痕。胎土：砂粒を含む。焼成：良。色調：やや暗褐色。
5	壺	法量：口縁部径(19.6)cm。現存率：口縁部破片。調整：外面一口唇部ヨコナデ。内面一口縁部上位斜方向のハケ。口縁部中～下位横方向のハケ。胎土：白砂粒、2～3mmの小石含む。焼成：良。色調：暗黄褐色。
6	台付壺	法量：口縁部径(20.6)cm。頸部径(16.8)cm。胴部最大径(23.6)cm。現存率：胴部 $\frac{1}{2}$ 。調整：外面一口唇部ヨコナデのち刻目。口縁部ハケのち刻目。頸部斜方向のハケ。胴部上位横方向のハケ。胴部下位斜方向のハケ。内面一口縁部横方向のハケ。頸部ハケのちヘラナデ。胴部ハケのち「寧なナデ」。胎土：白砂粒含み密。焼成：良。色調：暗褐色～黒褐色。
7	台付壺	法量：脚接合部径(5.7)cm。現存率：胴部下位～接合部完存。調整：外面一縱方向のハケ。胎土：白砂粒含む。焼成：良。色調：やや暗褐色。
8	甕	法量：口縁部径(17.8)cm。頸部径(13.6)cm。胴部最大径(19.4)cm。現存率：口縁部～胴部 $\frac{1}{2}$ 。調整：外面一口唇部ヨコナデ。口縁部～胴部横方向のハケのち縦方向のハケ。内面一口縁部ハケのちヨコナデ。胴部ハケのちナデ。胎土：砂粒含み密。焼成：良。色調：黒褐色。
9	壺	法量：胴部最大径21.0cm。底部径8.5cm。現存率：胴部下位～底部ほぼ完存、他は欠損。調整：外面一胴部中位ハケのちミガキ。内面一胴部斜方向のハケ。胎土：白砂粒、2～4mmの小石含み密。焼成：良。色調：やや暗褐色。
10	甕	法量：口縁部径(25.0)cm。頸部径(22.2)cm。現存率：口縁部～頸部 $\frac{1}{2}$ 。胴部上位 $\frac{1}{2}$ 。調整：外面一口唇部ヨコナデのち刻目。口縁部ハケのち刻目。口縁部～頸部縱方向のハケ。胴部上位横方向のハケ。内面一口縁部～頸部横方向のハケのちミガキ。胴部ナデ。胎土：白砂粒、2～3mmの小石含有。焼成：良。色調：淡褐色。

## 8号住居址 (第27図、図版5)

D-8区に位置する。東2.6mに5号住居址、北6mに8号住居址が南東6.2mに9号住居址が存在する。本住居址北半部は1号方形周溝墓に切られている。

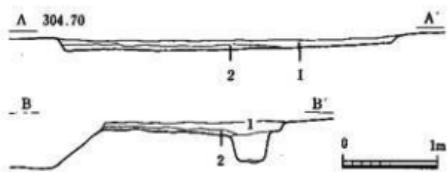
平面形は不整円形と思われ、規模は東西で3.6mを測る。主軸方位は不明である。壁高は10cm程を測り、やや開いて直線的にたちあがる。覆土は2層に分けられ、自然堆積を示す。

床面は軟弱で、ピットは1ヶ所検出された。

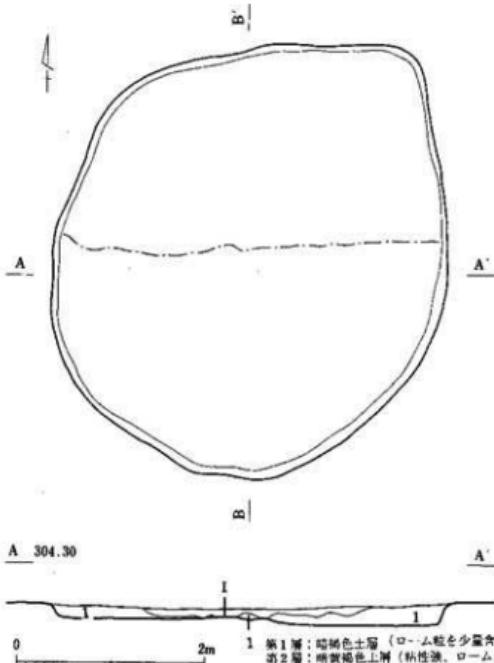


炉・周溝は検出されなかった。  
出土遺物は僅かで(250g)、図示したものもない。

6号住居  
基1層：暗褐色土層(粘性強)  
基2層：暗褐色土層(粘性強、ローム粒を多量含む。)



第27図 6号住居址(1/60)



1 基1層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む。)  
基2層：暗褐色土層(粘性強、ローム土強層で暗褐色土を含む。)

第28図 7号住居址(1/60)

### 7号住居址 (第28~29図、第7表、図版6)

B・C-8・9区に位置する。西4.5mに2号方形周溝墓、南2.5mに1号方形周溝墓が存在する。南東3.4mに4号住居址、南西6mには5号住居址が位置し、北15mには環濠が東西に巡っている。

遺存状態は極めて悪く、北半部は全く削平され據方面で確認したにすぎない。平面形は不整円形で長軸4.5m、短軸4.2mを測る。主軸方位はほぼ南北方向をとるものと思われる。壁高は25~5cmを測り、壁は垂直で直線的に立ち上がる。覆土は2層に分けられレンズ状の自然堆積を示す。床面は軟弱で炉・ピット・周溝は検出されなかった。図示以外

850 gの土器が出土している。



第29図 7号住居址出土土器〔1/3〕

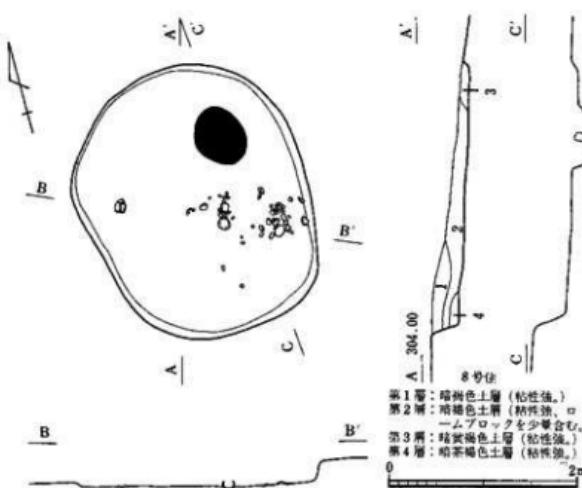
第7表 7号住居址出土土器観察表

1	器	法量：口縁部径(21.0)cm。頸部径(12.4)cm。現存率：口縁部1/4。構造：外面一口唇部ヨコナデ。口縁部横方向の沈線複合口縁(1区10本以上だが途中で欠けているので本数ははっきりしない)。頸部ナデのちミガキ。内面一ヨコナデ。胎土：白砂粒、長石、雲母を含み密。焼成：良。色調：淡褐色。
---	---	---

8号住居址 (第30~31図、第8~9表、図版6・28)

D-8・9区に位置する。東13mに7号住居址、南6mに6号住居址が存在し、北東16mには環濠が東西方向に巡っている。本住居址上部には2号方形周溝墓が築かれている。

遺存状態は不良で、上面にかなり削平がなされている。



第30図 8号住居址〔1/60〕

平面形は楕円形で、規模は長軸2.9m、短軸2.4mの小型の住居址である。主軸方位はN-8°-Wにとる。壁高は30~9cmを測り、壁は急角度で直線的に立ち上がる。覆土は4層に分けられレンズ状の自然堆積を示す。

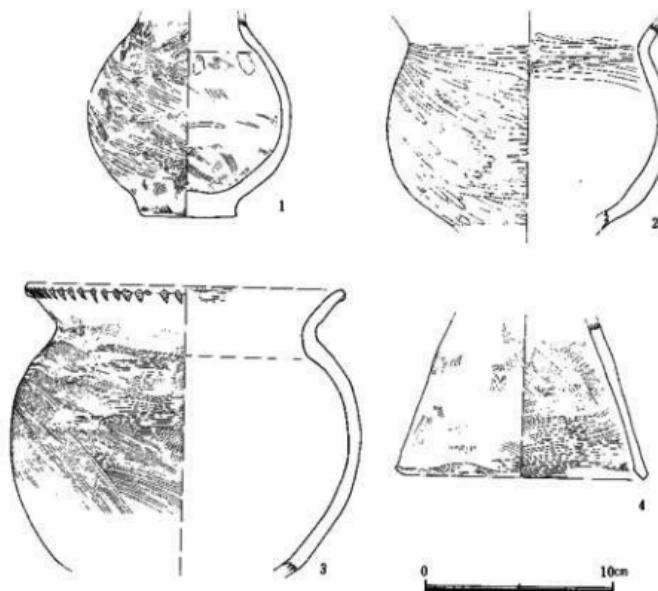
床面は一部貼床が施されるが軟弱である。ピット・柱穴等は検出されなかった。

出土遺物は豊富で、床面上では中央部から

東半部にかけて多量に認められたが図示したものは4点にすぎない。図示したもの以外に700gの土器が出土している。

### 《炉》

炉は1基、中央部北東隅寄りに地床炉が付設されている。平面形は楕円形を呈し、規模は65cm×55cm程である。主軸方位はN-4°-Wによる。断面形は鍋底状を呈し、深さは10cm程を測る。壁は堅く焼き締められ、中央には枕石が据えられている。



第31図 8号住居址出土土器〔1/3〕

第8表 8号住居址出土土器観察表(1)

1	壺	法量：胴部径10.8cm。底部径4.9cm。現存率：胴部上半分。胴部下半～底部完存。 調整：外面～胴部上位横方向のち斜方向のハケのち斜方向のミガキ。胴部下位縦方向のち横方向のハケのち斜方向のミガキ。底部縦方向のハケのちはみ出した粘土を折り返す。内面～胴部上位指頭圧痕。斜方向のハケのちナデ。胴部中位斜方向のハケ。胴部中位片側ヘナデのちナデ。胴部下位～底部時計回りに斜方向のハケのち丁寧なナデ。胎土：砂粒を含み密。焼成：極めて良。色調：乳黄褐色。
2	台付甕	法量：頸部径(12.8)cm。胴部径(15.2)cm。現存率：頸部～胴部約1/2。調整：外面～頸部縦方向のハケのちナデのちミガキ。胴部横～斜方向のミガキ。内面～頸部横方向のハケのちナデのちミガキ。胴部横方向のミガキ。胎土：白砂粒を含み密。焼成：良。色調：やや淡褐色。

第9表 8号住居址出土土器観察表(2)

3	台付壺	法量：口縁部徑(17.2)cm 脚部徑(12.8)cm。胴部徑(18.4)cm。 現存率：口縁部～脚部%。 調整：外面一口縁部上端刻目。口縁部縱方向のハケのちヨコナデ。頭部斜方向のハケ。胴部上位縱方向のち横方向のハケ。胴部中位横～斜方向のハケ。内面一口縁部ハケのちヨコナデ。胴部ヘラケズリのち丁寧なナデ。脚部下位接合部指頭圧のちヘラナデのち丁寧なナデ。 胎土：砂粒を含み密。 焼成：良 色調：黒褐色（スス付着のため。）
4	台付壺	法量：脚裾部徑(13.0)cm。 現存率：脚部のみ%。 調整：外面～脚部上位縱方向のハケ。脚部下位縱方向のハケのち粘土を付け足し横方向のハケのち一部ヘラナデ。裾部ナデのち横方向のハケ。内面～脚部斜方向のハケ。裾部ナデのち横方向のハケ。胎土：砂粒を含み密。 焼成：良。 色調：暗褐色

## 8号住居址 (第32-33図、第10表、図版7)

C-7区に位置する。北6mに5号住居址、北西6mに6号住居址が並んで存在する。上部に1号方形周溝臺が築かれ、西壁の一部が1号中世墓に切られている。また本住居址南東部に掘立柱建物遺構が重複しているがその前後関係は明確でない。

重複関係が数回に亘ることもあって遺存状態は不良である。

平面形は不整円形を呈し、規模は径4.7m程を測る。主軸方位は不明である。壁高は10~15cmを測り、壁は急角度に直線的に立ち上がる。覆土は3層に分けられ、レンズ状の自然堆積を示す。床面は一部貼床が施されている。

ピットは5ヶ所検出され、P1~P4までが柱穴で、P5が貯蔵穴である。柱穴の深さはそれぞれP2-16cm、P3-44cm、P4-27cmを測る。貯蔵穴は南壁際に築かれ、深さは17cmで底部から粘土ブロックが出土している。

炉・周溝等は検出されなかった。

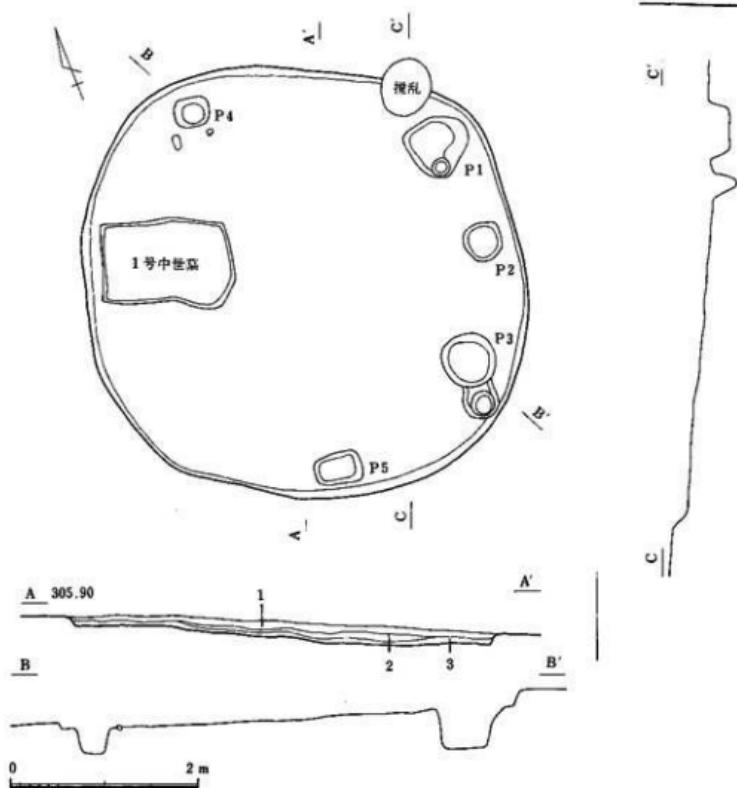
出土遺物は比較的多いが図示したものは1点である。図示した以外では1,440gの土器が出士している。



第32図 9号住居址出土土器 (1/3)

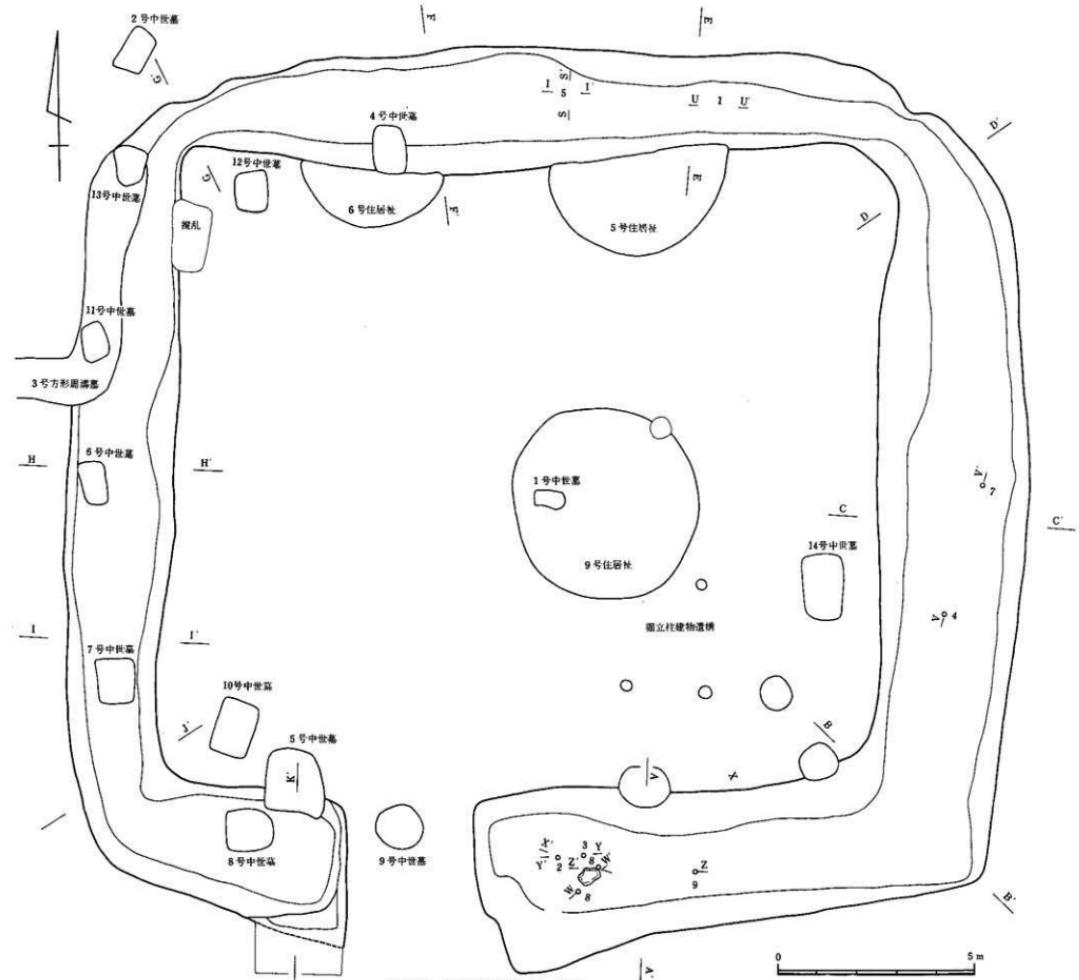
第10表 9号住居址出土土器観察表

1	鉢	法量：口縁部径(12.4)cm。底部径5.4cm。器高15.8cm。現存率：体部 $\frac{1}{4}$ 。底部ほぼ完存。調整：外面一口唇部ヨコナデ。体部横～斜方向のミガキ。内面一口唇部ヨコナデ。体部横～斜方向のミガキ。底部ナデ。胎土：砂粒、長石、金雲母を僅かに含む。所々に直径3～5mm位の小石を含む。焼成：良。色調：淡褐色。
---	---	--

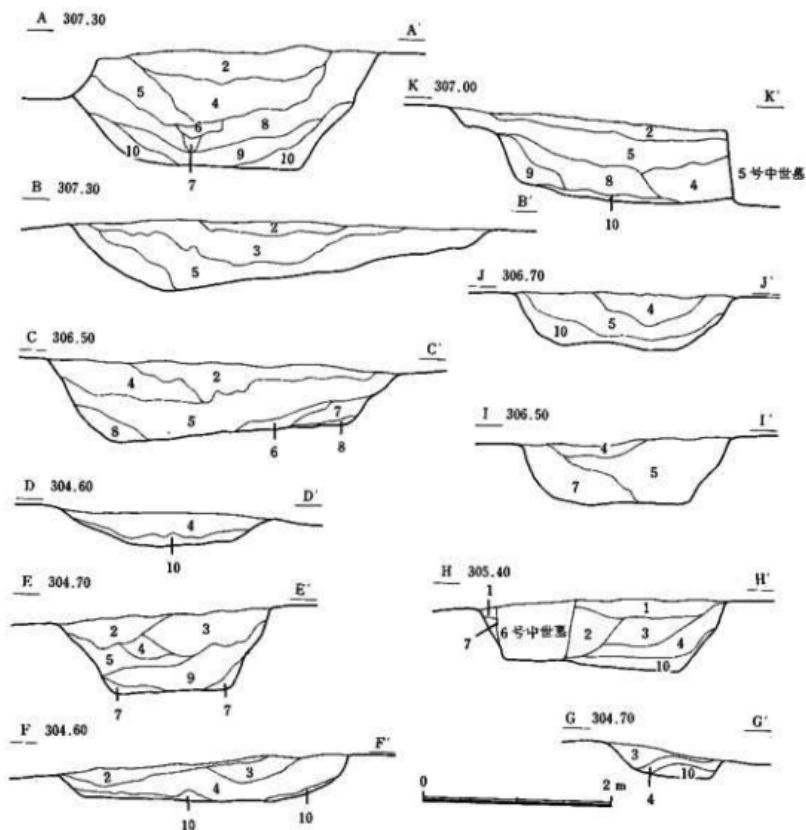


9号住  
第1層：暗褐色土層（粘性強、しまり有。）  
第2層：暗褐色土層（粘性強、免土粒を含む。）  
第3層：暗褐色土層（粘性強、しまり無。）

第33図 9号住居址 [1 / 60]



第34図 1号方形周溝墓 (1/100)



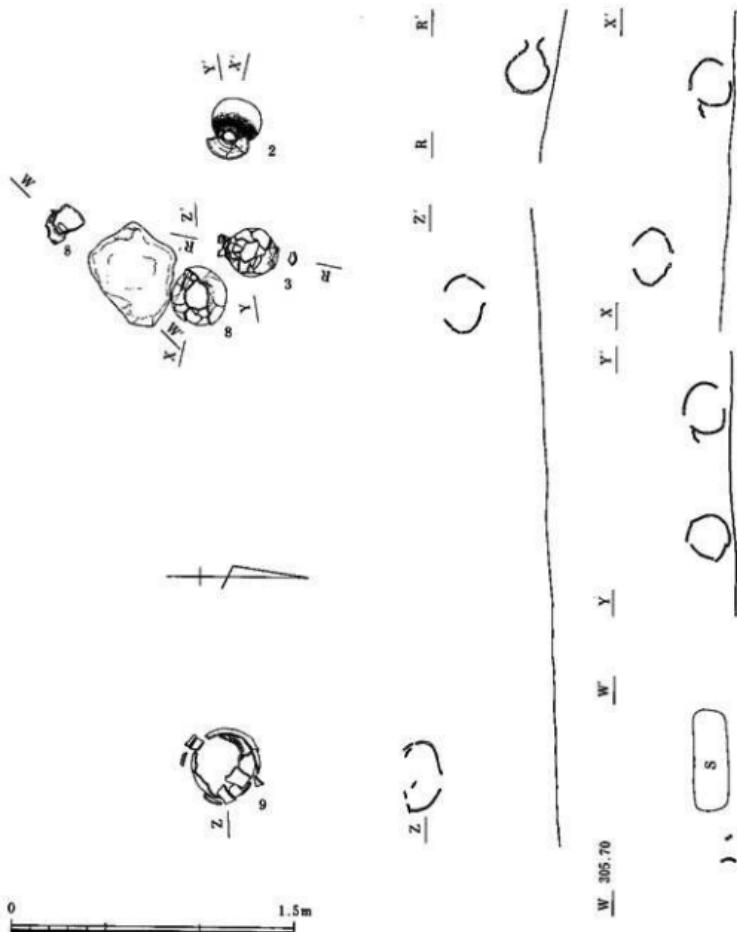
- 第1層：暗褐色土層
- 第2層：黒褐色土層
- 第3層：暗褐色土層(粘性強。)
- 第4層：暗褐色土層(粘性強、しまり無、ローム粒を含む。)
- 第5層：暗褐色土層
- 第6層：暗褐色土層(粘性強、しまり有、ローム粒を含む。)
- 第7層：暗褐色土層(粘性強)
- 第8層：暗褐色土層(ロームブロックを少量含む。)
- 第9層：暗褐色土層(粘性強、しまり有、ロームブロックを含む。)
- 第10層：暗褐色土層(粘性強、しまり有、ロームブロックを多  
数含む。)

第35図 1号方形周溝墓・土層断面図 [1/60]

## 2) 方形周溝墓

1号方形周溝墓 (第34~42図、第11~14表、図版11~14・26~27)

I区中央に位置し、B・C・D-6・7・8区を占める大規模な遺構である。北溝で2号方形周溝墓南溝と接し、西溝を3号方形周溝墓に切られている。また5・6・9号住居址および壠立柱建物遺構の上面にきずかれている。



第36図 1号方形周溝墓・土器出土状況図(1) [1/30]

遺存状態は不良で、マウンド、主体部等は検出しえなかった。本造構北半部の傾斜変換線にあることもあり、特に北溝部の遺存が悪く南側に比べ1/4程度の深さしか残っていない。

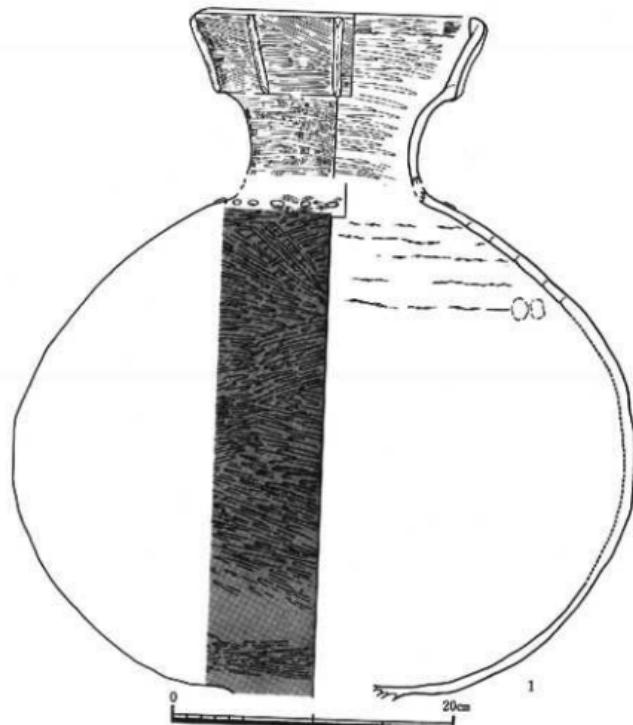
平面形はほぼ方形を呈し、コーナー部内側の角は丁寧に直角にされている。規模は南北22m、東西24mを測る。ブリッジは南溝の中央からやや西に偏って造られ幅は約3mである。ブリッジ両側では周溝が外側へ張り出すように脹らみを持ち、周溝によって「造りだされ」ているような様相を呈している。主軸方位はほぼ南北、あるいは東西に採るものであろう。



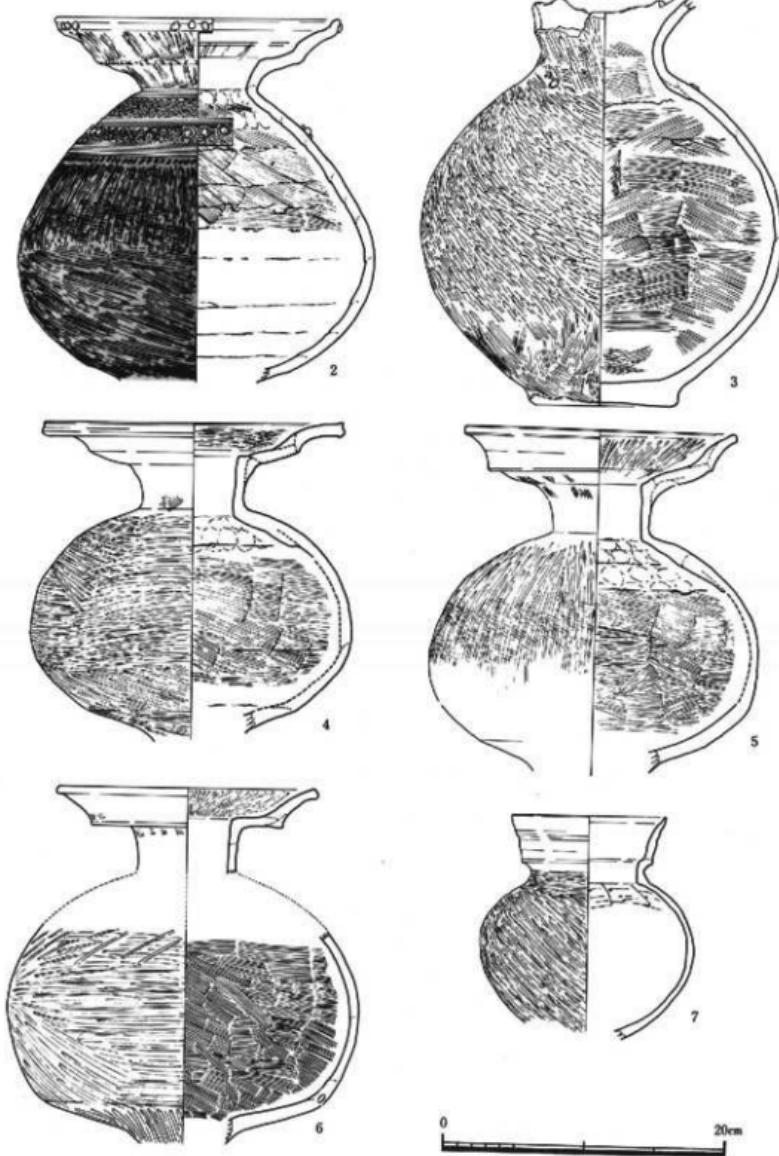
第37図 1号方形周溝墓・土器出土状況図(2) [1/30]

周溝は幅4～3m程で東、南溝で広く、西溝部でせまくなる。掘込みは一部黄白色軽石層（Pm-1）まで達し、深さは1.3m～0.3mを測る。断面形は逆台形から鍋底状、皿状を示す。本周溝墓は上面にかなり削平を受けており、本来はU字形断面を持ち、深さも1.5m程は有したものであろう。

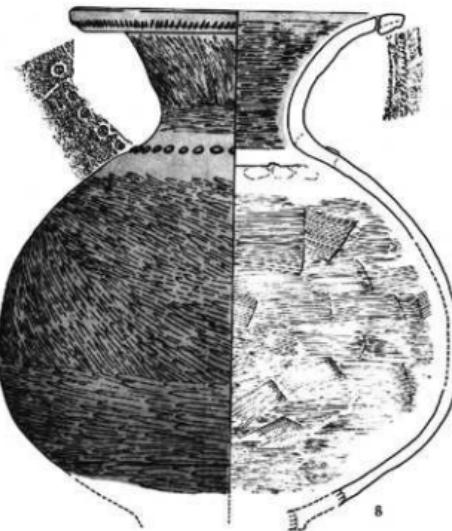
出土遺物は豊富で、溝中位から低位にかけて認められ特にブリッジ周囲に集中していた。出土状態は図示したとおりであるが、壺1・5・6・8・9は覆土中位から、2・3・4・7は覆土下位から共に据えられた状態で出土した。ブリッジ脇から出土した土器は他に比べ丁寧な作りであった。北溝中位から出土した1・5、西溝中位から出土した6はばらばらになった状況であったが、本来据えられていたものが押し潰された状態であった。また覆土下位から出土した土器と溝底部との間層はローム細粒及びロームブロックを多量に含んだ土層である。図示した以外に39.94kgの土器が出土している。



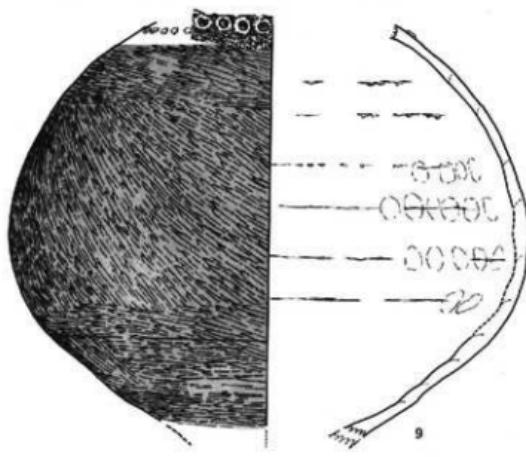
第38図 1号方形周溝墓出土土器(1)〔1/4〕



第39図 1号方形周溝墓出土土器(2) [1/4]



8



9

0 20cm

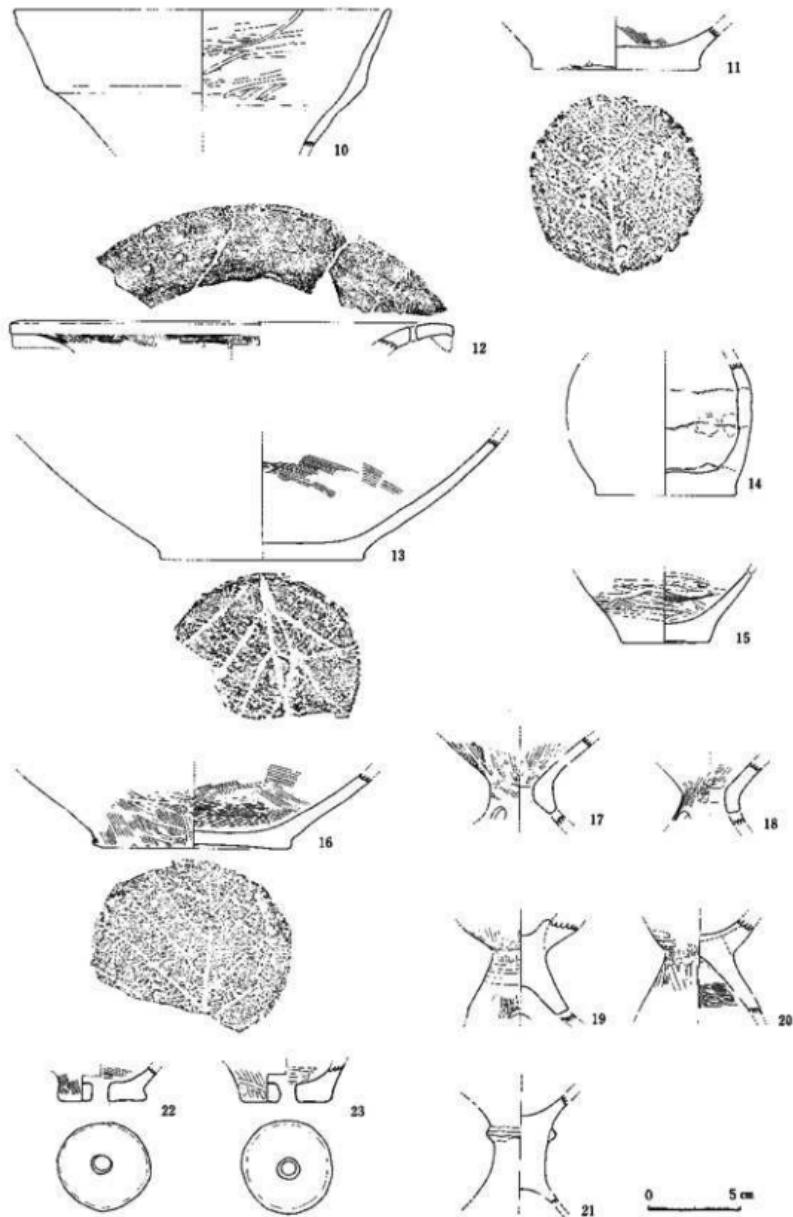
第40図 1号方形周溝墓出土器(3) (1/4)

第11表 1号方形周溝墓出土土器観察表(1)

1	壺	法量：口縁部徑21.0cm。頸部徑(12.0)cm。胴部徑43.8cm。器高(38.6)cm。現存率：頸部を欠くがほぼ完形。調整：外面一口唇部ヨコナデ。口縁部横方向のハケのち全体に8ヶ所(推定)幅5cmの縱帶文。二重口縁。頸部ハケのち細かいミガキ。肩部ハケのちミガキ。10cm程度の円形浮文が連続して一周施される。胴部ミガキ。底部は焼成後、打ち欠く。赤色塗彩。内面一口唇部～口縁部ヨコナデ。口縁部～頸部ハケのち横方向のミガキ。胴部ハケ。胎土：密。焼成：良。色調：淡赤褐色。
2	壺	法量：口縁部徑20.2cm。頸部徑8.0cm。胴部徑25.0cm。器高(25.8)cm。現存率：完形。調整：外面一二重口縁。口縁部6～7mm径の円形浮文が3ヶ6箇所に貼付され。口縁部下位に半截竹管による刺突文が施される。胴部上位に6～7本単位で横位の櫛描直線文、波状文が二段入り下方の波状文帯に円形浮文を竹管で押した貼付文が3ヶ5箇所に貼付され直線文、列点文と施される。胴部施文帯以下には赤色塗彩が見られる。口縁部ヨコナデのちミガキ。頭部ハケのちミガキ。胴部中位ハケのちミガキ。胴部下位横及び斜方向のハケ。内面一口唇部～口縁部ヨコナデ。胴部上位に指頭圧痕、斜方向のハケ。胴部下位ナデ。胎土：密。焼成：良。色調：やや暗褐色。
3	壺	法量：頸部徑8.0cm。底部徑9.5cm。現存率：口縁部をのぞき完形。調整：外面一頸部縱方向のハケのち粗いミガキ。肩部円形浮文(全体で3ヶ所)貼付。胴部上位～中位丁寧なミガキ。胴部下位縱方向のハケ。底部木葉底。胎土：2mm程度の小石混じり密。焼成：良。色調：やや淡褐色。
4	壺	法量：口縁部徑21.6cm。頸部徑7.2cm。胴部徑(23.0)cm。器高(22.5)cm。現存率：口縁部の一部をのぞき完形。調整：外面一口唇部ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。頸部ハケのち丁寧なナデ。胴部ミガキ。底部は焼成後、打ち欠く。内面一二重口縁。口唇部～口縁部ヨコナデ。口縁部横方向のミガキ。頸部ナデ。胴部上位指頭圧痕。胴部中位横及び斜方向のハケ。胎土：細砂粒、金雲母含み密。焼成：良。色調：淡赤褐色。
5	壺	法量：口縁部徑19.2cm。頸部徑(6.7)cm。胴部徑23.0cm。器高(24.6)cm。現存率：口縁部の一部をのぞき完形。調整：外面一口唇部～口縁部上位ヨコナデ。口縁部下位～頸部ハケのち丁寧なナデ。胴部上位ハケのちミガキ。胴部下位斜方向の細かいハケ。内面一口唇部～口縁部ヨコナデ。二重口縁。口縁部ミガキ。頭部丁寧なナデ。胴部上位指頭圧痕者。胴部中位横及び斜方向のハケ。焼成後、底部を打ち欠く。胎土：雲母、細砂粒を含み密。焼成：良。色調：淡赤褐色。
6	壺	法量：口縁部徑18.8cm。頸部徑7.0cm。胴部徑(25.2)cm。器高(25.0)cm。現存率：口縁部～胴部下位ナデ。調整：口唇部～口縁部ヨコナデ。頸部ハケのちヨコナデ。肩部斜方向のミガキ。胴部中位横方向のミガキ。胴部下位横及び斜方向のミガキ。内面一口唇部ヨコナデ。二重口縁。口縁部ミガキ。頸部ナデ。胴部丁寧なハケ。胎土：細砂粒含み密。焼成：良。色調：やや暗褐色。
7	壺	法量：口縁部徑10.8cm。頸部徑7.8cm。胴部徑15.8cm。器高(15.8)cm。現存率：完形。調整：外面一口唇部～口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。胴部ハケのちミガキ。内面一口縁部ヨコナデ。頭部ナデ。胴部上位ケズリ。胎土：密。焼成：良。色調：やや暗褐色。
8	壺	法量：口縁部徑23.4cm。頸部徑10.4cm。胴部徑32.2cm。器高36.7cm。現存率：底部をのぞき完形。調整：外面一口唇部～折り返し口縁部ハケのちヨコナデ。口唇部下端に割目が入る。頭部(ハケ)のちミガキ。肩部5.7cm幅の絞条体縦文、その上に円形浮文が5mm間隔で連続して施される。胴部ミガキ。赤色塗彩。底部は焼成後穿孔。内面一口縁部1.6cm幅の絞条压痕、その下に直徑3mmの孔が2つ2cmの間で並列貫通。口縁部～頸部横方向のミガキ。赤色塗彩。胴部上位わずかに指頭圧痕。胴部ハケ。胎土：雲母を含み密。焼成：良。色調：赤褐色。

第12表 1号方形周溝墓出土土器観察表(2)

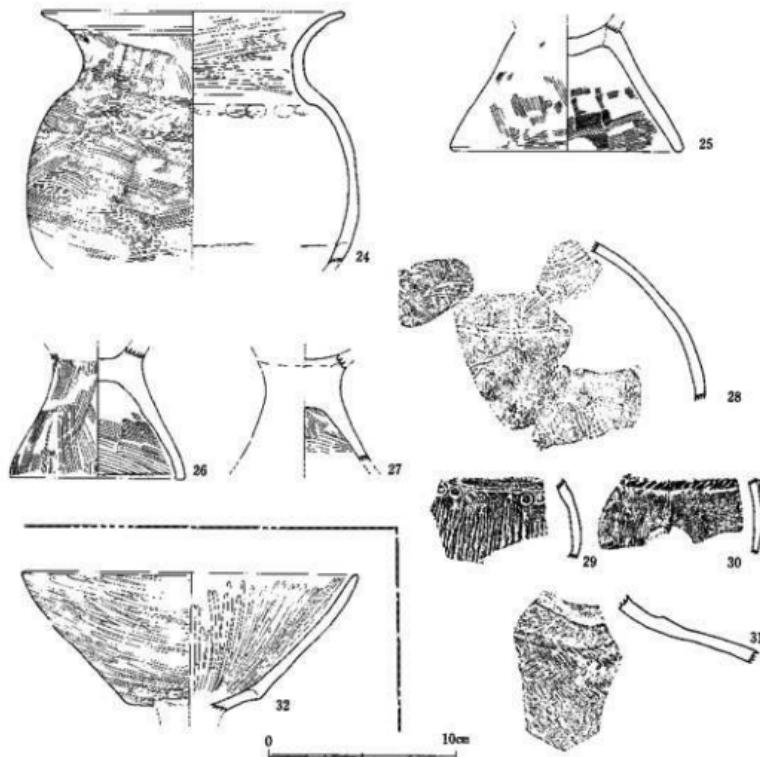
9	壺	法量：胸部最大径36.6cm。 現存率：胸部ほぼ完形。 調整：外面一肩部に(目)Rのよりもどし)又は格条体の縦文を施し、その上に直径7mm程の円形浮文が7mm間隔で一列に連続付。肩部は丁寧なミガキ。赤色塗彩。底部は焼成後打ち欠く。内面一胸部上位非常に細かいハケ。腹部中位粘土紐の接合箇所に残る指頭圧痕が見られる。胸部下位細かいハケ。 胎土：密。 焼成：良。 色調：赤褐色。
10	壺	法量：口縁部径(20.2)cm。 現存率：口縁部%。 調整：外面一複合口縁を呈す。口唇部ヨコナデ。口縁部縦～斜方向のハケのちヨコナデ。内面一口唇部ヨコナデ。口縁部細い横方向のハケのち横～斜方向のミガキ。 胎土：砂粒を含み密。 焼成：良。 色調：暗褐色。
11	壺	法量：底部径8.6cm。 現存率：底部のみ完存。 調整：外面一縱方向のハケのち縱方向のミガキ。底面木葉痕。内面一ハケのちナデ。 胎土：砂粒を多く含む。 焼成：良。 色調：暗褐色。
12	壺	法量：口縁部径(23.7)cm。 現存率：口縁部%。 調整：外面一付加状口縁だが貼り付けた粘土紐は残っていない。口縁部2ヶ所に焼成前に穿孔が行なわれている。口唇部ヨコナデ。口縁部横方向のハケのち縱方向のハケ。下半部はのちミガキ。赤色塗彩。内面一縦縫文を施し下半部はのちミガキ。 胎土：白砂粒を含み密。 焼成：良。 色調：赤褐色。
13	壺	法量：底部径(10.6)cm。 現存率：胸部下半～底部%～%。 調整：外面一ミガキ。底面木葉痕。内面一胸部横方向のハケ。 胎土：砂粒を含み密。 焼成：良。 色調：やや暗褐色。
14	壺	法量：胸部径(9.9)cm。 底部径7.5cm。 現存率：胸部中位%。 腹部下位～底部完存。 調整：外面一縱方向のハケのち縱方向のミガキ。内面一ナデ。腹部中位～下位巻き上げ痕その上に指頭圧痕が残る。 胎土：砂粒を多く含む。 焼成：良。 色調：暗黃褐色。
15	壺	法量：底部径4.6cm。 現存率：底部のみ完存。 調整：外面一接口縁。腹部下位横～斜方向のミガキ。底部立ち上がりナデ。内面一横方向のミガキ。 胎土：砂粒を多く含み密。 焼成：良。 色調：暗褐色。
16	壺	法量：底部径(9.9)cm。 現存率：底部%。 調整：外面一胸部下位縱方向のハケのちミガキ。底面木葉痕。内面一横～斜方向のハケ。 胎土：白砂粒を含み密。 焼成：良。 色調：やや暗褐色。
17	器台	法量：脚接合部径3.4cm。 現存率：脚接合部のみ完存。 調整：脚上部3ヶ所に穿孔が行なわれる。細かい斜方向のハケのちミガキ。内面一体部細かい縱方向のハケのちミガキ。脚部ナデ。 胎土：砂粒を含み緻密。 焼成：良。 色調：赤褐色。
18	器台	法量：脚接合部径3.0cm。 現存率：脚接合部のみ完存。 調整：外面一脚部上位3ヶ所に穿孔が行なわれる。环部斜方向のハケのち斜方向のミガキ。脚接合部横方向のミガキ。脚部細かい縦方向のハケのち縦方向のミガキ。内面一环部ハケのちミガキ。 胎土：密。 焼成：良。 色調：赤褐色。
19	高坏	法量：脚接合部径2.9cm。 現存率：脚接合部ほぼ完存。 調整：外面一胸部上位4ヶ所に穿孔が行なわれる。环部縦方向のミガキ。脚接合部縦のち横方向のミガキ。脚部細かい横方向のハケのち縦方向のミガキ。内面一脚部丁寧なナデ。充填法で接合。 胎土：砂粒を多く含み密。 焼成：良。 色調：暗褐色。
20	器台	法量：脚接合部径3.6cm。 現存率：脚接合部のみ完存。 調整：外面一縱方向のハケのち縦～横方向のミガキ。内面一环部ミガキ。脚部横方向のハケ。 胎土：砂粒を含み密。 焼成：良。 色調：やや暗褐色。



第41図 1号方形周溝墓覆土内出土土器(1) [1/3]

第13表 1号方形周溝壺出土土器観察表(3)

21	高壺	法量：脚接合部径2.8cm。現存率：脚接合部のみ完存。調整：外面一脚接合部に粘土紐を巻き付ける。表面が剥離している部分が多い為調整は不明瞭だが、脚柱部にミガキを施す。内面一环底部ミガキ。脚部ナデ。胎土：砂粒を多く含む。焼成：良。色調：やや暗褐色。
22	壺	法量：底部径4.7cm。現存率：底部完存。調整：外面一ハケ。内面一粗いハケ。焼成前穿孔。胎土：緻密。焼成：良。色調：やや暗褐色。
23	壺	法量：底部径4.5cm。現存率：底部完存。調整：外面一ミガキ。内面一ミガキ。焼成前穿孔。胎土：緻密。焼成：良。色調：やや暗褐色。



第42図 1号方形周溝壺出土土器(2) (1/3)

第14表 1号方形周溝墓出土土器観察表(4)

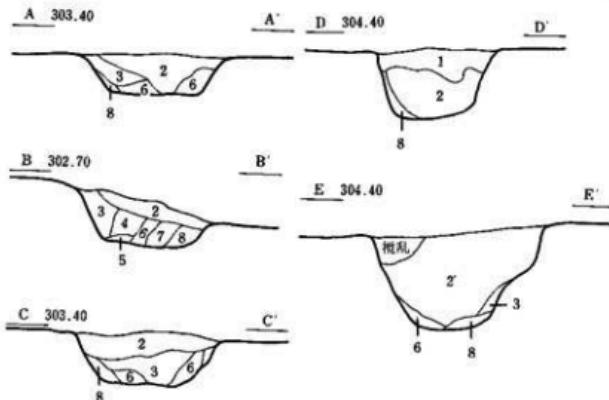
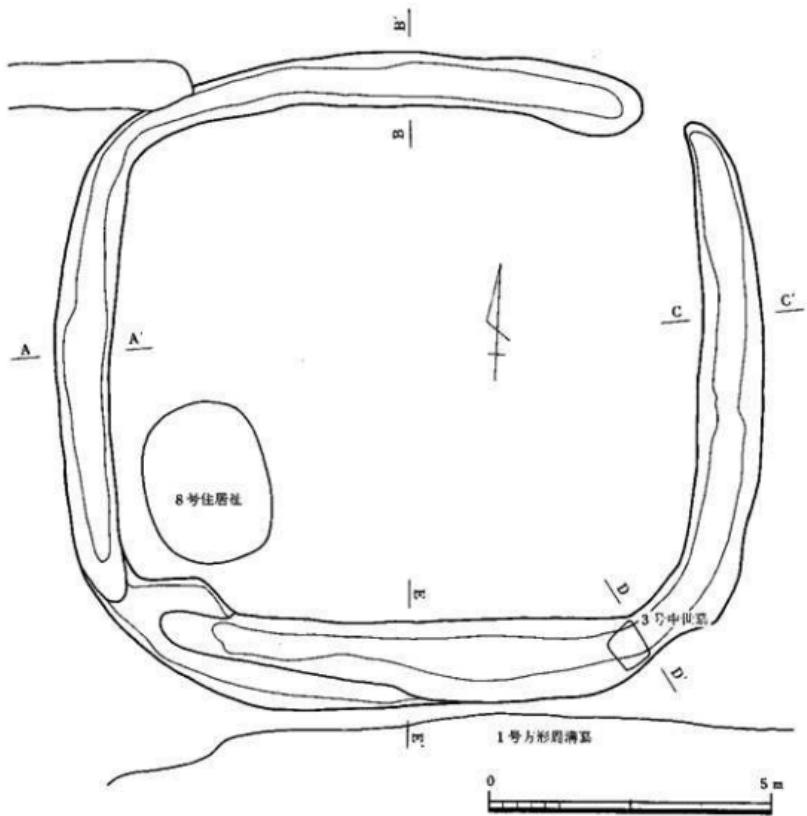
24	縹	法量：口縁部径(16.2)cm。頸部径(11.8)cm。胴部径(17.8)cm。 現存率：口縁部～胴部上半分。 調整：外面～口唇部ヨコナデ。口縁部縱方向のハケのちヨコナデ。胴部横方向のハケ。内面～口唇部ヨコナデ。口縁部～頸部横方向のハケのちミカキ。胴部ハケのちナデのち横方向のミガキ。一部指頭压痕を残す。胴部中位に巻き上げ痕が残る。 脱土：雲母を含み密。 焼成：良。 色調：暗褐色。
25	台付縹	法量：脚部部径(11.4)cm。 現存率：脚部のみりん。 調整：外面～脚接合部～脚部中位ハケのちナデ。脚部下位斜～横方向のハケのちナデ。内面～縹底部ナデ。脚部上位ナデ。脚部中位～脚部下位横方向のハケ。 脱土：砂粒、所々に直径5mm程度の小石を含む。 焼成：良。 色調：やや暗褐色。
26	台付縹	法量：脚接合部径4.8cm。脚部部径9.4cm。 現存率：脚部のみ完存。 調整：外面～縹～斜方向のハケ。内面～縹底部ナデ。脚部上位ナデのち横方向のハケ。脚部中位横方向のハケ。脚部下位粗い斜方向のハケ。 脱土：砂粒を多く含み密。 焼成：良。 色調：暗褐色。
27	台付縹	法量：脚接合部径4.0cm。 現存率：脚接合部～脚部中位のみ完存。 調整：外面～ハケのちミカキ。内面～底部ナデ。脚部上位中心から反時計回りに斜方向のハケ。脚部中位横方向のハケ。 脱土：砂粒を含み密。 焼成：良。 色調：やや暗褐色。
28	壺	現存率：肩部破片。 調整：外面～肩部クシ状工具使用によって反時計方向の波状文。胸部ミカキ。内面～ヘラケズリのちナデ。 脱土：砂粒を含み密。 焼成：良。 色調：やや淡褐色。
29	壺	現存率：胴部破片。 調整：外面～ナデ。
30	不明	現存率：胴部破片。 調整：外面～胴部上位粘土紐を貼り付け刻目を入れる。胴部縱方向のハケのちナデ。内面～丁寧なナデ。 脱土：密。 焼成：良。 色調：暗黄褐色。
31	壺	現存率：肩部破片。 調整：外面～ナデのちヘラによる文様づけ。内面～丁寧なナデ。頸部接合痕がよく残る。 脱土：白砂粒を含み密。 焼成：良。 色調：黒褐色。
32	高坏	法量：口縁部径(18.0)cm。 現存率：坏部のみ%。 調整：外面～縹～斜方向のハケのち斜方向のミガキ。内面～横方向のハケのち縦方向のミガキ。 脱土：白砂粒を含み密。 焼成：良。 色調：外面～やや暗褐色。内面～淡褐色。3号方形周溝墓に伴う可能性強。

## 2号方形周溝墓 (第43～44図、第15表、図版11)

1区北端、C・D-8・9区に位置する。南で1号方形周溝墓と南西で3号中世墓と接し、東4mに7号住居址が存在する。また本周溝墓は8号住居址の上面に築かれている。

遺存状態は不良で、マウンド・主体部等は確認しえなかった。

平面形は方形を呈し、各辺とも僅かに脇らみを持つ。ブリッジは北東隅に存在し、その幅は約60cm程である。規模は東一西で12.5m、南一北で11.5m程を測る。主軸方位は、ほぼ南一北、あるいは東一西に採るものであろう。

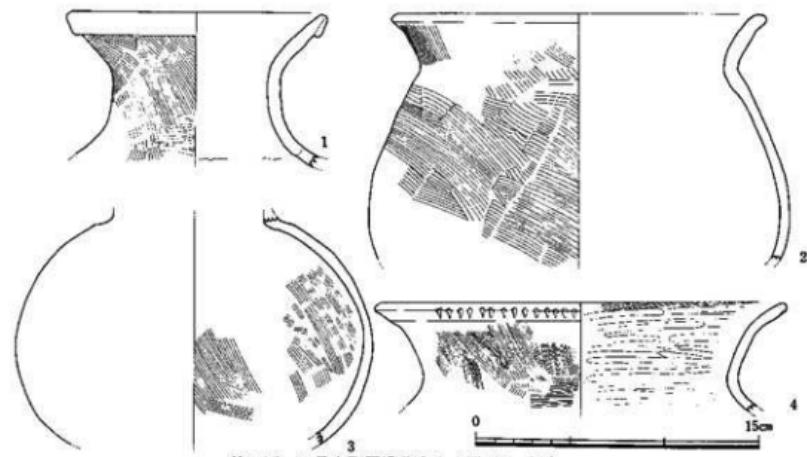


2号方形周溝墓  
 第1層：黒褐色土層  
 第2層：暗褐色土層（粘性強、ローム粒を多量含む）  
 第3層：暗褐色土層（粘性強、しまり有。）  
 第4層：暗褐色土層（粘性強、しまり有。）  
 第5層：暗褐色土層（粘性強、ロームブロックを含む。）  
 第6層：暗褐色土層（粘性強、ローム粒を含む。）  
 第7層：暗褐色土層（粘性強、ローム粒を少量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（粘性強、ローム主体層、ロームブロック、暗褐色土を少量含む。）

第43図 2号方形周溝墓 [1/100・1/40]

周溝は幅1~2.5m程で、上面削平のため特に北溝部が狭い。断面形はやや開いたU字状から鍋底状を呈し、深さは70~20cmを測るが、本来の形状は南溝部で観察されたようにU字状を示すものであろう。壁は外側に比べ、内側が急角度で立ち上がる。覆土は8層に分けられ、ほぼレンズ状の自然堆積を示すが1号方形周溝墓と接する南溝部においては短時間（人為的）に埋められた可能性も残る。

出土遺物は少なく、図示したものも僅かですべて覆土中からの出土である。図示したもの以外2.5kgの七器が出土している。



第44図 2号方形周溝墓出土土器 [1/3]

第15表 2号方形周溝墓出土土器観察表

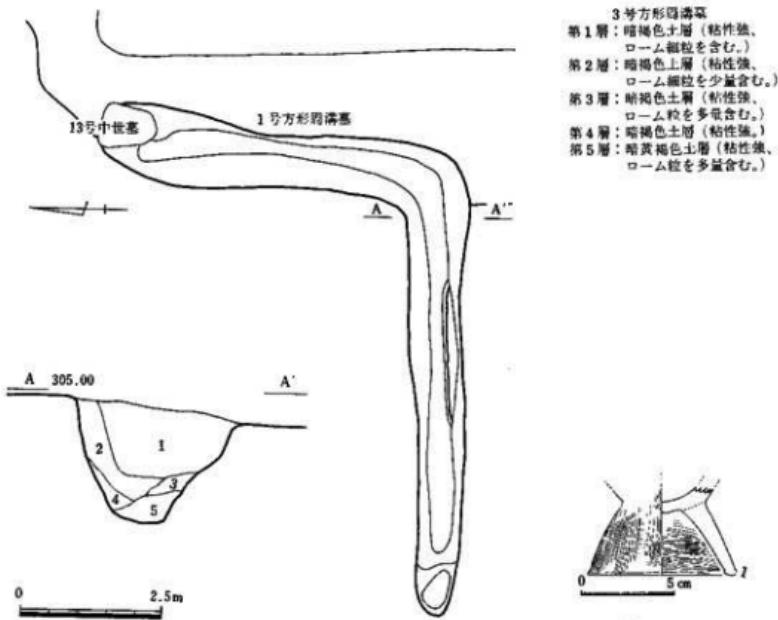
1	壺	法量：口縁部径(14.0)cm。頸部径(8.8)cm。現存率：口縁部～頸部約%。調整：外面一折り返し口縁。口縁部ヨコナデ。口縁部～頸部斜方向のハケのちミガキ。内面…ハケのち丁寧なナデ。胎土：白砂粒含み密。焼成：良。色調：淡褐色。
2	甕	法量：口縁部径(20.0)cm。頸部径(16.8)cm。胴部径(22.4)cm。現存率：口縁部～胴部中位約～%。調整：外面一口唇部ヨコナデ。口縁部～頸部ハケのちナデ。胴部斜方向のハケ。内面一口縁部～頸部ヨコナデのちミガキ。胴部ナデのち（ミガキ）。胎土：2mmの小石含む。焼成：良。色調：暗褐色。
3	壺	法量：胴部径(19.0)cm。現存率：胴部約%。調整：外面風化が激しく不明。内面ハケ。胎土：白砂粒含み密。焼成：良。色調：淡褐色。
4	甕	法量：口縁部径(22.0)cm。頸部径(16.8)cm。現存率：口縁部～頸部破片。調整：外面一口縁部のふちに割目。口唇部ヨコナデ。口縁部ハケのちヨコナデ。頸部ハケ。肩部粗い横方向のハケ。内面一口縁部ハケのち（ミガキ）。頸部ハケのちミガキ。胎土：2mm程の小石含む。焼成：良。色調：淡褐色。

3号方形周溝墓 (第45~46図、第16表、図版11)

D・E-7区に位置する。東部で1号方形周溝墓の西溝を切っている。傾斜面に築かれているため、遺存が悪く南東隅部が検出されたのみである。形状は方形を呈するが、ブリッジ部は確認できなかった。規模も不明だが、溝の規模から2号方形周溝墓と同程度と考えられる。主軸方位は、ほぼ南一北、あるいは東一西に採るものと思われる。

溝の規模は幅1~1.3m程で、深さは1mを測る。断面形はやや開いたU字形を示し、覆土は5層に分けられる。壁は湾曲しながら立ち上がるが溝外側に比べ内側が急角度である。

出土遺物はわずかであった。また1号方形周溝墓覆土内の出土としてあつかった32は出土部位などから本周溝墓に伴うものである可能性が強い。他に890gの土器が出土している。



第45図 3号方形周溝墓 (1/100・1/40)

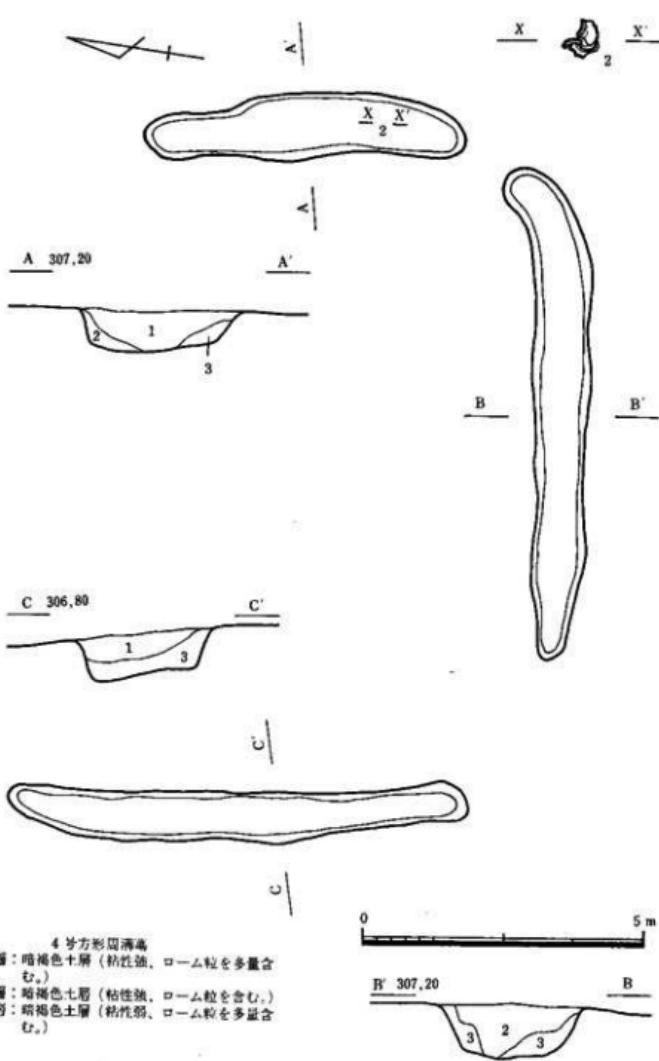
3号方形周溝墓出土土器 (1/3)

第15表 3号方形周溝墓出土土器観察表

1 台付腰	法量：脚接合部径(4.5)cm。脚部部径7.8cm。現存率：脚部のみほぼ完存。調整：外面一巻～斜方向のハケ。内面～底部ナデ。脚部横方向のハケ。胎土：白砂粒を含み密。焼成：良。色調：暗（黄）褐色。
-------	---

4号方形周溝墓 (第47~48図、第17表)

II区、中央平垣面のc・d-2・3区に位置する。南8mに5号方形周溝墓が存在する。遺存状態は悪く周溝の下部が検出されたに止どった。



4号方形周溝墓  
第1層：暗褐色土層（粘性強、ローム粒を多量含む。）  
第2層：暗褐色土層（粘性強、ローム粒を含む。）  
第3層：暗褐色土層（粘性弱、ローム粒を多量含む。）

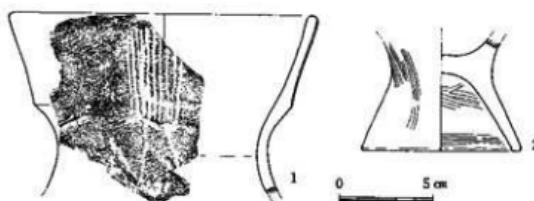
第47図 4号方形周溝墓及び土器出土状況図 [1/100・1/40・1/20]

平面形は北方に向に開いたコの字形を呈するが、本来的な形状であるのか北溝を失っているためかは明らかでない。また南東部・南西部の両隅がブリッジ状をなすが、これも削平のためか否かは明確でない。主軸方位はN-10°-WかN-80°-Eにより、I区の周溝墓と若干趣を異とする。

周溝の幅は1m程を測り、深さは30~40cmである。断面形は鍋底状を呈するが本来U字形を呈したものであろう。また、壁は溝内側が急傾

斜で立ち上がる。

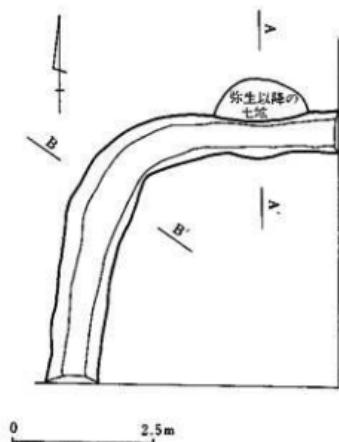
出土遺物は少なく、図示したものもわずかである。2は南東隅で溝底部から僅かに浮いて見  
いだされた。他に100gの土器が出土している。



第48図 4号方形周溝墓出土土器〔1／3〕

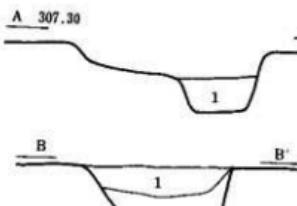
第17表 4号方形周溝墓出土土器観察表

1	壺	法量：口縁部径(16.6)cm。頭部径(11.2)cm。現存率：口縁部～頭部%。調修：外面 - 1区画10本の縱方向の沈線を持つ複合口縁。口縁部ヨコナデ。頭部ハケのちナデ。内 面 - 口唇部ヨコナデ。胎土：雲母、白砂粒を含み密。焼成：良。色調：暗褐色。
2	台付壺	法量：脚接合部径5.4cm。脚部縦(8.2)cm。現存率：脚部のみ%。調修：外面一脚 接合部～脚部縦方向のハケ。内面 - 壺底部ナデ。脚部上位粗い斜方向のハケ。脚部下位 横方向のハケ。胎土：砂粒を多く含み密。焼成：良。色調：やや暗褐色。



第49図 5号方形周溝墓〔1／100・1／40〕

5号方形周溝墓 (第49図)



5号方形周溝墓  
第1層：黒褐色土層（粘性強）  
第2層：暗褐色土層（粘性強）

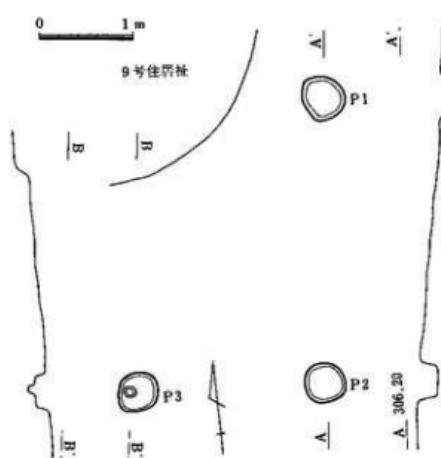
II区南端  
c - 1区に  
位置する。  
北8mに4  
号方形周溝  
墓が存在す  
る。遺存状  
態は悪く溝  
底部を検出  
したにすぎ  
ない。また

発掘区の関係から北西隅部を確認したに止どまり、規模は不明である。

形状は方形を呈し、主軸方位はほぼ東一西あるいは南一北に採る。

溝は幅1.0~1.2mを測り、深さは20cm程である。断面形は鍋底状を呈し、壁は溝内側が急角度で立ち上がる。

出土遺物は少なく、図示したものもない。



第50図 挖立柱建物遺構 (1/60)

### 3) 挖立柱建物遺構

掘立柱建物遺構 (第50図、第18表、図版7)

C-7区に位置する。北西部で9号住居址と重複し、上面に1号方形周溝墓がのっている。北7mに5号住居址が、東10mに1号住居址が存在する。主軸方位をほぼ真北に採る1間(3m)×1間(2m)の坪塹の建物であるが、北西隅の柱穴は9号住居址との重複から不明である。柱穴の平面形は不整円形を呈する。

遺物は出土していない。

第18表 掘立柱建物遺構柱穴規模

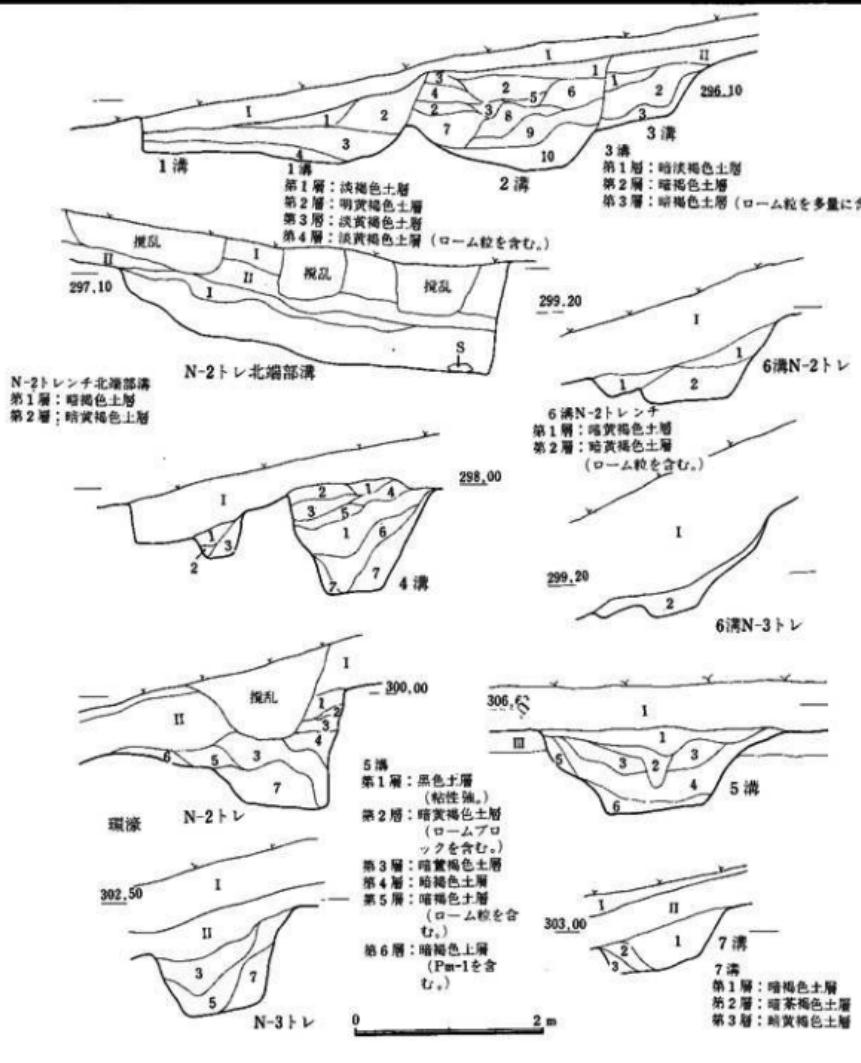
P1	50×45-20	P2	45×40-10
P3	45×40-20		

### 4) 環濠と溝

前述した様に本遺跡では台地平坦面を囲む傾斜面に19本のトレンチを設定した。そのうち7本のトレンチから10本の溝を検出することができた。これらの内、覆土の状態や縄文・弥生期の土器のみが出土することなどから弥生期の所産と断定しうる環濠1本と溝5本が認められた。その内3本は台地先端の北向傾斜面に設定したN-1~N-3トレンチに集中していた。以下、説明を加えたい。

#### 環濠 (第51~53図、第19表、図版25)

N-2及びN-3トレンチ南半部から検出されたもので、傾斜変換線から5m程下位を東西に走っている。幅2~3mを測り、深さは斜面上部で1.8m程である。断面形はほぼU字形を示すが、壁の立ち上がりは上部が急傾斜で同下部がやや緩傾斜を示している。N-1トレンチでは検出されずN-2付近がこの環濠の端部と思われ、またN-4トレンチは削平が著しかったため確認することができなかった。図示した以外に、2.9kgの土器が出土している。



三

第1層：黒色土層（ローム粒混入。）  
 第2層：黄褐色土層  
 第3層：暗褐色土層  
 第4層：黄褐色土層＝ローム主体層  
 第5層：暗褐色土層（ローム粒混入。）  
 第6層：黄褐色土層（ローム粒多量）  
 第7層：暗黃褐色土層（ロームプロ  
     多量に含む。）

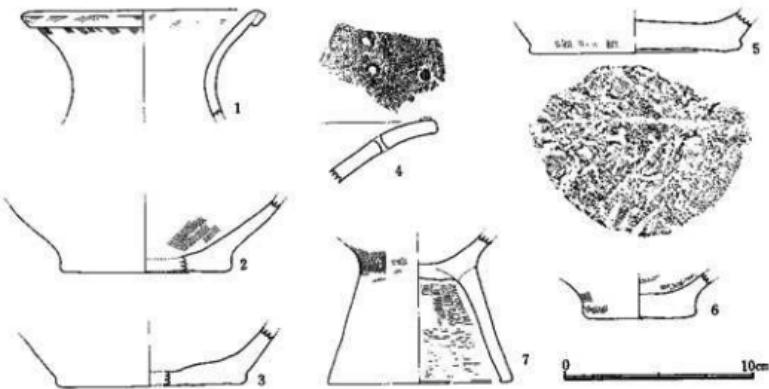
25

第1層：暗褐色土層  
第2層：黒色土層（ローム粒を含む。）  
第3層：明黄褐色土層  
第4層：淡褐色土層  
第5層：黒色土層  
第6層：黒色土層（粘性強）

第7層：黒色土層（ロームブロックを含む）  
 第8層：墨褐色土層  
 第9層：黒褐色土層（ロームブロックを含む）  
 第10層：弱酸性褐色土層

4 潟  
 第1層：黒色土層（褐色土を含む）  
 第2層：暗褐色土層  
 第3層：褐色土層  
 第4層：黒色土層  
 第5層：暗褐色土層  
 第6層：黒色土層（粘性強。）  
 第7層：暗褐色土層（粘性強。）

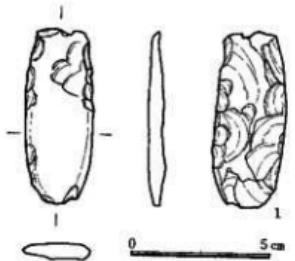
第51図 滅断面図 (1/60)



第52図 環塗内出土土器〔1／3〕

第19表 環塗内出土土器観察表

1	壺	法量：口縁部径(13.0)cm。頸部径(7.6)cm。現存率：口縁部%。調整：外面一折り返し口縁。口縁部ハケ。頸部丁寧なナナ。内面一ハケのち(ヨコナデ)。胎土：密。焼成：良。色調：やや淡褐色。
2	壺	法量：底部径(9.2)cm。現存率：底部%。調整：外面一風化のため不明。木葉痕。内面一ハケ。胎土：白砂粒含み密。焼成：良。色調：やや暗褐色。
3	壺	法量：底部径(10.2)cm。現存率：底部%。調整：外面一ハケのちミガキ。内面一剥離で不明。胎土：白砂粒含み密。焼成：良。色調：やや暗褐色。
4	壺	現存率：口縁部破片。調整：外面一ミガキ。赤色塗彩の可能性が強い。内面一口唇部を含み口縁部2.5cm幅に絆縫文が施され、その上に円形浮文が貼付。縫文帯より8mm程下に直徑3.5mm程の孔が1.2cmの間で2ヶ並列貫通。口縁部下位ミガキ。胎土：1～2mmの小石含み密。焼成：良。色調：暗褐色。
5	壺	法量：底部径11.4cm。現存率：底部%。調整：外面一ハケ。木葉痕。内面一ハケ。胎土：2～3mmの小石含み密。焼成：良。色調：やや暗褐色。
6	壺	法量：底部径6.0cm。現存率：底部%。調整：外面一ハケのち底面まで丁寧なミガキ。内面一ハケ。胎土：白砂粒含み密。焼成：良。色調：やや暗褐色。
7	台付壺	法量：脚接合部径6.2cm。脚縦部径(10.0)cm。現存率：脚部%。調整：外面一接合部ハケ。脚部(ハケ)のちナナ。内面一底面ミガキ。脚接合部ヘラ状工具によるシボリ。脚部ハケ。胎土：2mm程の小石含み密。焼成：良。色調：やや暗褐色。



### 環濠内出土石器

1. 石質は繊粒砂岩。全長6.2×幅3.5cmを測る。はぎとった石打の片面を調整したもので、他面は僅かに調整が施されるのみである。片刃の「ノミ」状の刃先を持ち、基部には緩やかな稜を有する。刃部は使用痕が著しい。

### 1・2・3号溝

N-1トレント北端、N-2トレント北端で検出された。  
N-1トレント北端では3本の溝が平行して切り合い、東

第53図 環濠内出土上石器 (1/2) 西に走っていた。三者とも幅は不明であるが2号溝はほぼ4m程であろう。。深さはそれぞれ1号溝が1.2m、2号溝が2.5m、3号溝が1.5mを有している。これらのうち1本がN-2トレント北端で90度に折れ北へ向かっている溝と連続するものと思われるが、特定することはできなかった。

### 4号溝

N-3トレント北端で検出された。幅3m、深さ2.3mを測る。断面形はやや開いたU字形を示している。

### 5号溝

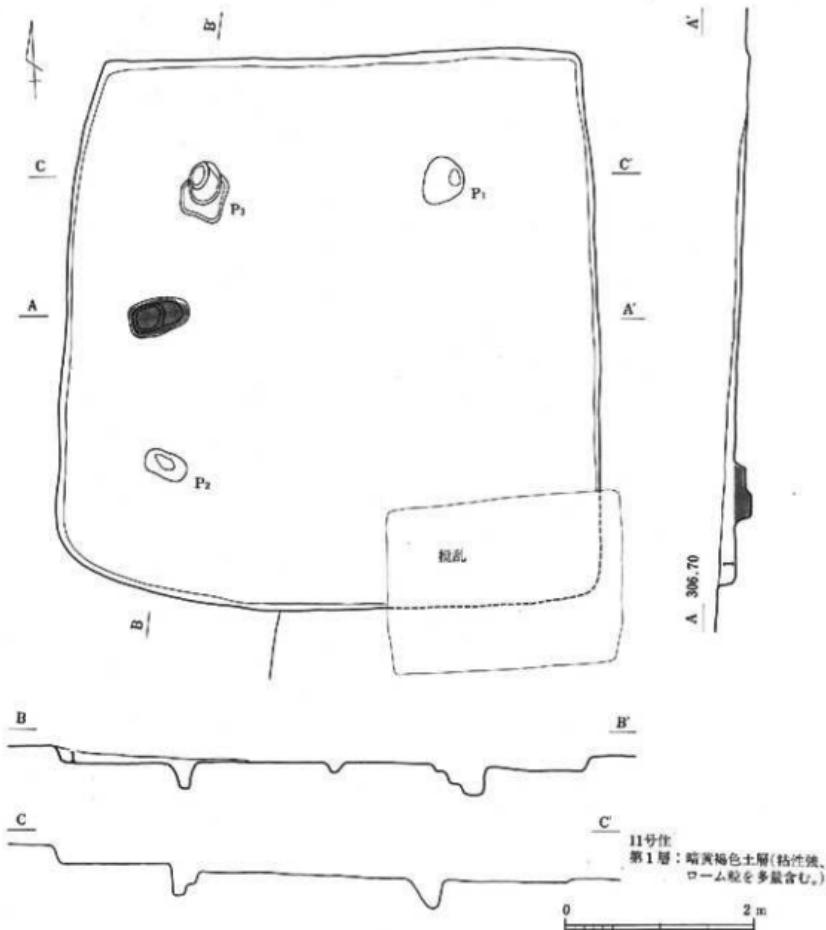
E-2トレント中央部で検出された。幅5m、深さ2mほどであった。

### 第3節 古墳時代の遺構と遺物

#### 1) 穴住居址

11号住居址 (第54図、図版8)

A・B-4区に位置する。西1mに円形周溝墓が、北0.5mに10号住居址が、南西1mに13号



第54図 11号住居址 (1/60)

住居址がそれぞれ近接する。本住居址南東部が12号住居址北西隅を切っている。

遺存状態は悪く、特に東半部はかなり削平されかつ後世の擾乱を受けている。

平面形は方形を呈し、南-北5.90m、東-西5.70mを測る。主軸方位はN-86°-Wに採る。

壁高は西壁では20cm程を測り、壁は急角度でやや脹らみながら立ち上がる。覆土は床面直上の1層しか確認できない。

床面は一部貼床を施され堅緻で、特に南西部は著しい。床面下、掘方内はローム粒を多量に含む土層で埋められている。

ピットは3ヶ所検出されすべて柱穴であるが、南東部の柱穴は擾乱部にあたり確認しえなかつた。柱穴の深さはそれぞれP1-30cm、P2-25cm、P3-28cmを測る。

周溝・貯蔵穴等の施設は検出できなかつた。

出土遺物は少なく、図示したるものもないが830gの土器が出土している。

#### 《炉》

中央部西壁よりに地床炉が付設され、柱穴間線よりも僅かに外側である。平面形は楕円形を呈し、主軸方位はN-70°-Wに採る。規模は長さ50cm、幅40cmで西半が一段深く掘り下げられ深さは20cmである。炉壁は軟弱であった。

#### 12号住居址（第55~56図、第20表、図版8）

A-3・4区に位置する。西2.8mに13号住居址、北5.3mに10号住居址が、北西5mには円形周溝墓が存在する。本住居址北西部が11号住居址に切られている。

遺存状態は不良で、北西部を11号住居址のために、北東部から中央部を擾乱のために失っている。

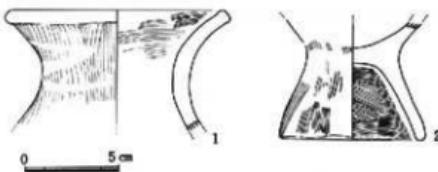
平面形はやや歪んだ方形を呈し、規模は東-西で5.5m程である。主軸方位はほぼ東-西に採る。覆土は床面直上の一層のみが認められた。壁高は遺存部では20cmを測り、壁は急角度で直状に立ち上がる。

床面は擾乱の影響のためか軟弱である。掘方内はローム粒を多量に含んだ土層で埋め戻されている。

ピットは2ヶ所検出され、共に柱穴である。深さはP1-14cm、P2-11cmを測る。

周溝・貯蔵穴等の施設は見い出せなかつた。

出土遺物は少なく、図示したものも僅かでそれ以外に560gの土器が出土している。



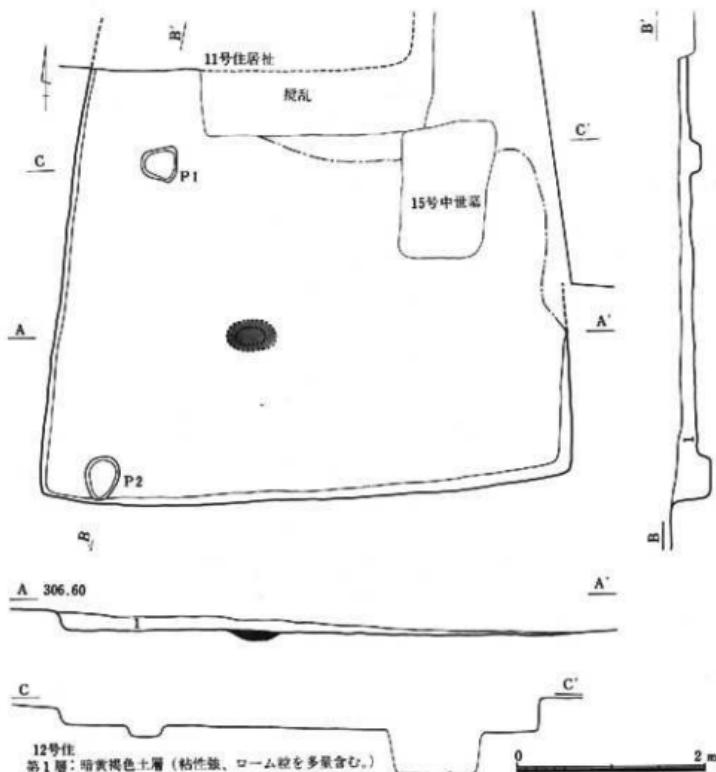
第55図 12号住居址出土土器〔1/3〕

第20表 12号住居址出土土器観察表

1	壺	法量：口縁部径(12.0)cm。頸部径(7.8)cm。現存率：口縁部～頸部ほぼ完存。調整：外面一口唇部ヨコナデ。口縁部縦方向のハケのち粗いヨコナデ。頸部粗い縦方向のハケ。胴部上端粗い縦方向のハケのち細かい横方向のハケ。内面一口縁部横方向のハケのちヨコナデ。頸部ナデ。胎土：白砂粒、金雲母を含み密。焼成：良。色調：やや暗褐色。
2	台付壺	法量：脚接合部径4.9cm。脚裾部径6.8cm。現存率：脚部のみ完存。調整：外面一脚接合部縦方向のハケ。脚裾部縦方向のハケのち斜方向のハケ。脚底部ヨコナデ。内面一脚部横方向のハケ。胎土：砂粒を僅かに含み密。焼成：良。色調：やや暗褐色。

## 《炉》

中央部やや西よりに地床炉が1基付設される。平面形は橢円形を呈し、主軸方位はほぼ東～西に採る。規模は長さ55cm、幅35cmを測り、断面形は皿状で深さは10cm程であった。



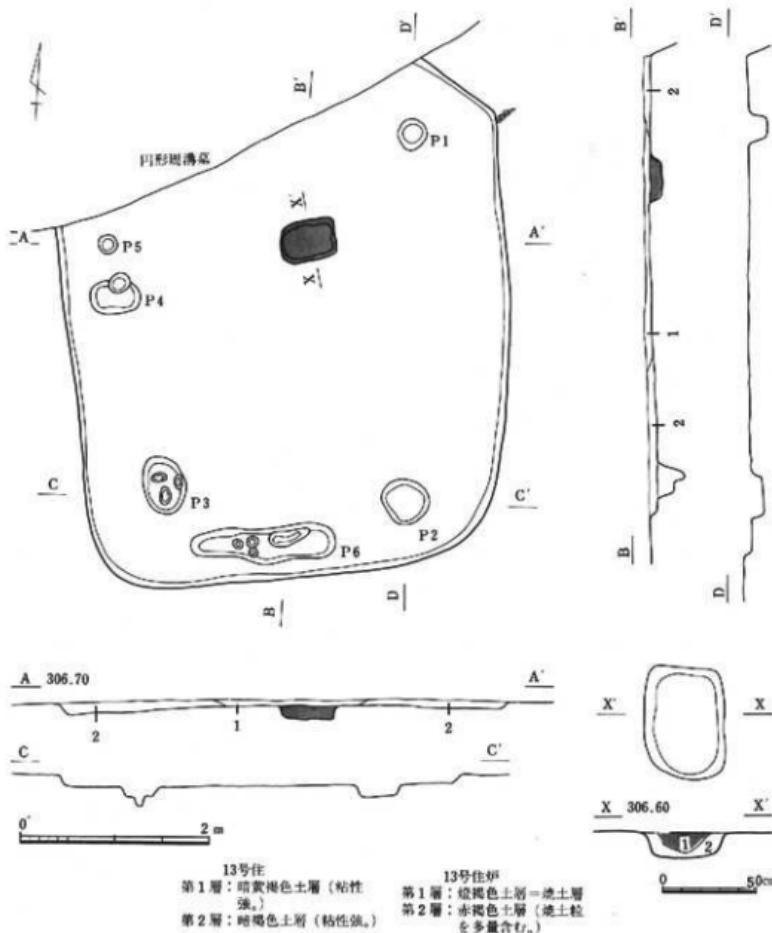
第56図 12号住居址〔1/60〕

13号住居址 (第57図、図版9)

B-3・4区に位置する。東1mに11号住居址が近接し、本住居址北西部が円形周溝墓に切られている。

遺存状態は良くない。

平面形は不整方形で、南-北5.3m、東-西4.7mを測る。主軸方位はN-5°-Wにとる。壁高は7~10cmを有し、壁はやや内湾ぎみに急角度で立ち上がる。覆土は2層にわけられ、レンズ



第57図 13号住居址・同炉址 (1/60・1/30)

状の自然堆積を示す。

床面は貼床され堅緻であった。

ピットは6ヶ所検出され、P1～P4が柱穴で、P6が出口施設である。柱穴の深さはそれぞれP1=18cm、P2=9cm、P3=20cmを測り、一部は一段深く堀り下げられ、他にも小ピットが何ヶ所か穿たれる。深さは16cm程で、最深部は30cmを測る。

周溝は検出されなかった。

出土遺物は少なく、図示しえないが610gの土器が出土している。

#### 《炉》

中央北よりに地床炉が1基付設される。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方位はN-86°-Eに採る。規模は長さ60cm、幅45cmを測る。断面形は逆台形を示し、深さは13cmで覆土は2層に分けられ、焼土が充填している。炉壁は堅く焼き締められている。

#### 14号住居址（第58～59図、第21表 図版9）

A-5・6区に位置し、西1.7mに円形周溝墓が、南1mに10号住居址が、北3.7mに2号住居址が存在する。東壁部が発掘区外となり全体の $\frac{1}{4}$ 程しか検出できなかった。

平面形は角張った楕円形を呈し、規模は長軸8m、短軸4.9mを測る。主軸方位はN-16°-Eに採る。壁高は5～10cmを測り、壁は急角度で外湾して立ち上がる。覆土は3層に分けられ焼土を含み、自然堆積を示す。

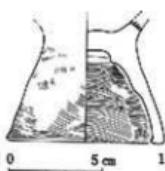
床面は擾乱の影響か軟弱である。

ピットは3ヶ所検出されすべて柱穴であろう。深さはそれぞれP1=35cm、P2=17cm、P3=20cmを測る。

炉・周溝・貯蔵穴などは検出されなかった。

出土遺物は少なく、図示したのも僅かである。

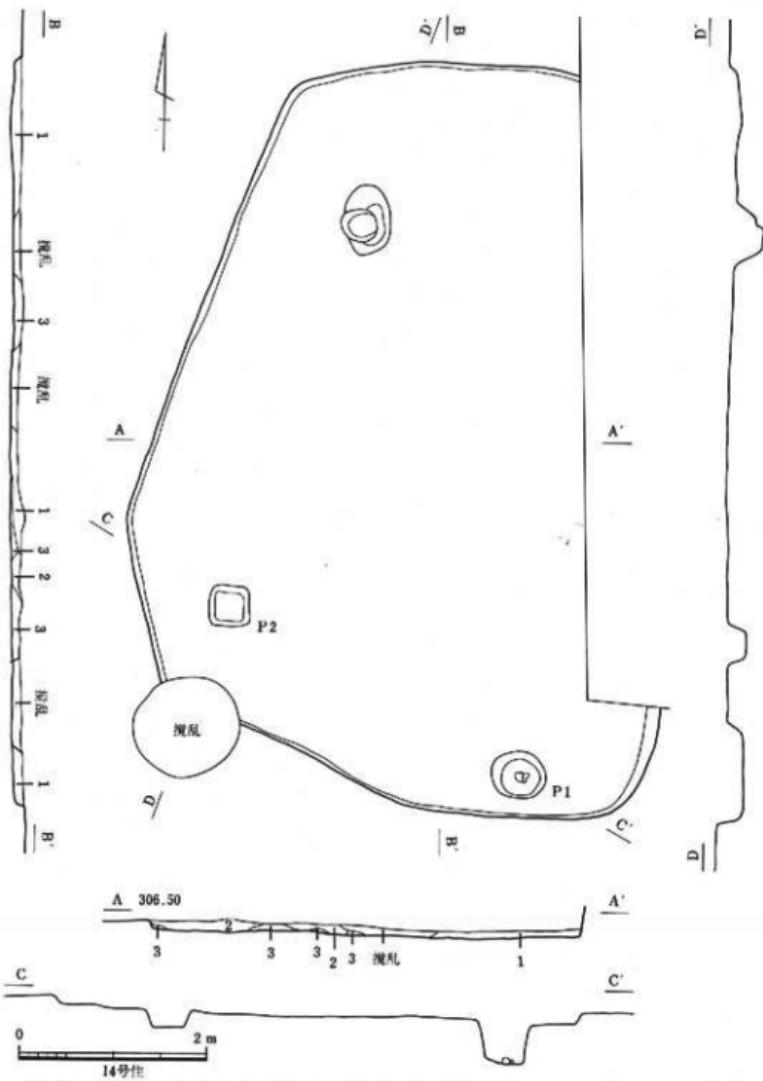
図示した以外に900gの土器が出土した。



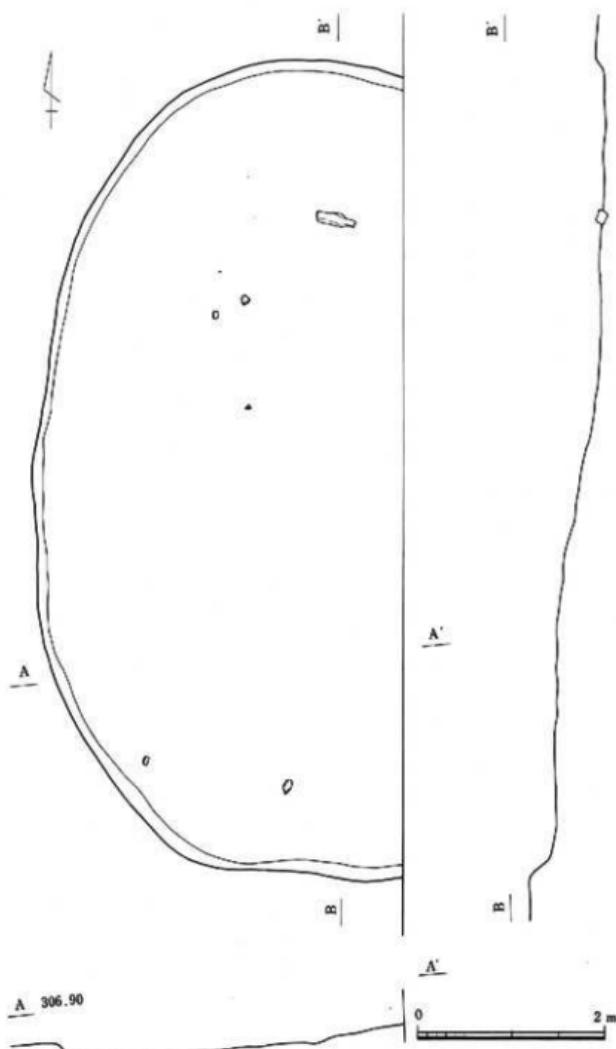
第58図 14号住居址出土土器〔1/3〕

第21表 14号住居址出土土器観察表

1	台付窓	法量：脚接合部径4.9cm。脚底部径7.2cm。現存率：脚部のみ完存。調整：外面一脚接合部縦方向のハケ。脚部上位縦方向のハケ。脚部下位斜方向のハケ。内面一指頭圧によるしづりのち横方向のハケ。胎土：砂粒、雲母を含む。焼成：良。色調：接合部より上位ススが付着。暗褐色。
---	-----	--



第1層：培茶褐色土層（粘性強、しまり有、ローム粒・焼土粒を少量含む。）  
 第2層：培茶褐色土層（粘性弱、しまり有、ローム小ブロック・焼土粒・炭化物粒を含む。）  
 第3層：明茶褐色土層（粘性強、しまり有、ローム粒主体層・焼土粒・暗茶褐色土を含む。）



第60図 15号住居址 (1/60)

### 15号住居址

(第60図、図版10)

A - 7・8区に位置する。西7.5mに1号方形周溝墓、南3mに2号住居址、北東3mに3号住居址、南西2.5mに1号住居址がそれぞれ存在する。

遺存状態は不良で床面は部分的にしか残っておらず、また東半部は発掘区外になるため全体の半分強を検出したにすぎない。

平面形は梢円形を呈し、規模は長軸8.7mを測る。主軸方位はほぼ真北を示している。壁高は20~25cm程、壁は比較的緩やかに立ち上がる。

ピット・炉・周溝等は検出されなかった。

出土遺物は断片化が進み示しえたものはない。全体で1.75kgの土器が出土している。

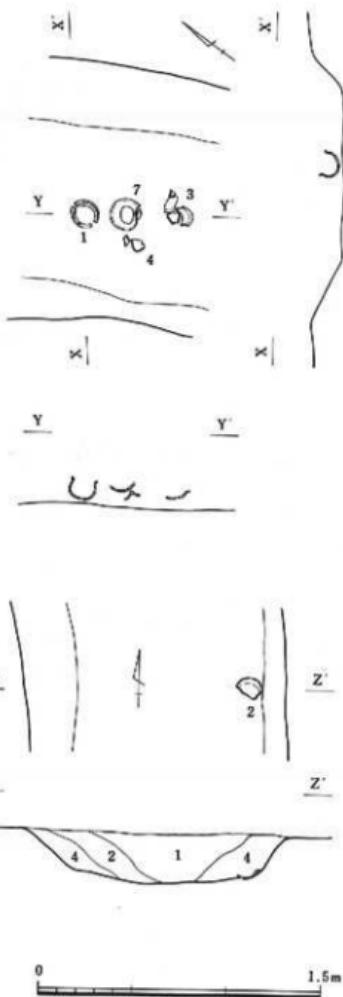
2) 円形周溝墓 (第61~63図、第22表、図版15・27)

I区平坦面南半の、B・C-4・5区に位置する。北4mに1号方形周溝墓が存在し、東1~2m程には14号・10号・11号・12号住居址が並んでいる。本周溝墓南東部で13号住居址を切っている。

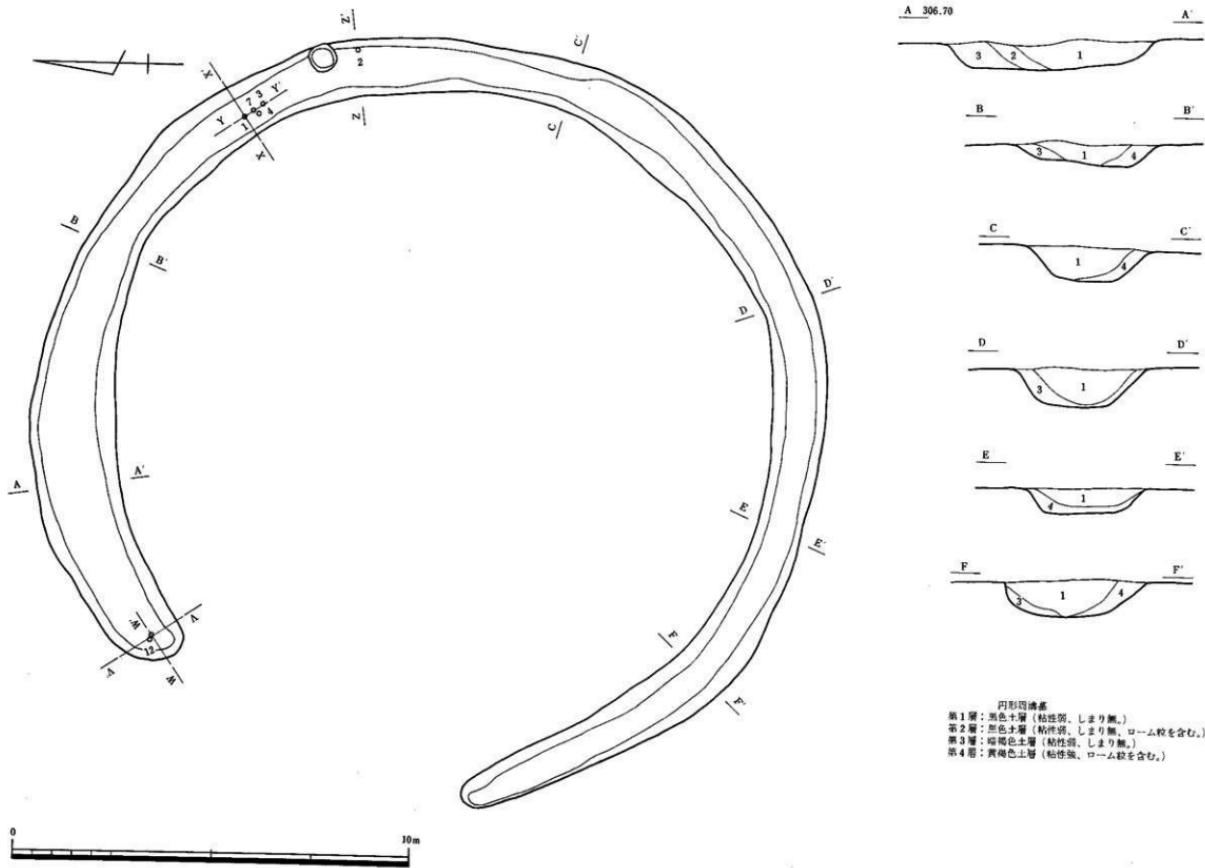
遺存状態は良好でなく、削平のためか主体部、マウンド等は確認できなかった。またブリッジ幅の広いこともその影響とも考えられる。

平面形は円形を呈し、ブリッジは北西部に開く。ブリッジ幅は8m程とかなり広い。規模は径19~20mを測る。周溝は幅1.5~2m程で、深さは20~40mを測る。断面形は皿状から鍋底状を示す。壁はなだらかに立ち上がり、特にブリッジ部は顕著である。覆土は4層に分けられ一部木炭粒が含まれるが、後世の混入である可能性も否定しえない。上面削平のため溝底部のみが残ったものであろう。

出土遺物は少なかったが、壇類を中心に優秀な品を得ることができた。1・2・3・4・7は溝東部

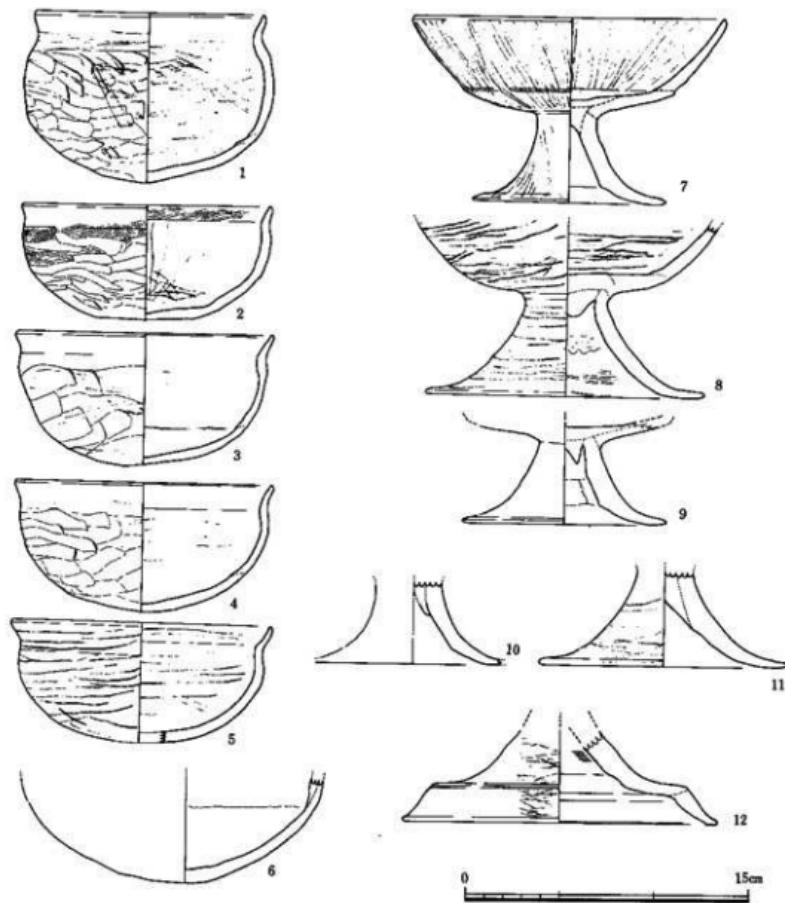


第61図 円形周溝墓遺物出土状況図 (1/30)



第62図 円形周溝基 (1/100・1/40)

に集中し、12はブリッジ北側から検出された。すべて溝底部から僅かに浮いていたものである。  
図示した以外に7.5kgの土器が出土している。



第63図 円形溝溝墓出土土器 (1/3)

第22表 円形周溝墓出土土器観察表

1	塊	法量：口縁部径12.2cm。体部最大径13.4cm。器高9.0cm。現存率：完形。調整：外面一口縁部ヨコナデ。体部ケズリのちミガキ。底部ケズリのちナデ。内面一口縁部ヨコナデ。体部ナデのちミガキ。底部ナデ。輪積痕が見られる。胎土：緻密。焼成：良。色調：やや暗褐色。
2	塊	法量：口縁部径(13.2)cm。体部最大径(13.2)cm。器高6.1cm。現存率： $\frac{3}{4}$ 。調整：外面一口唇部ヨコナデ。口縁部ハケのちケズリのちナデ。体部粗いハケのちケズリ。底部ケズリのちミガキ。内面一口縁部ハケのちヨコナデ。体部細かいハケのち丁寧なナデのちミガキ（暗文）。胎土：緻密。焼成：良。色調：淡赤褐色。
3	塊	法量：口縁部径13.8cm。体部最大径13.2cm。器高7.1cm。現存率：完形。調整：外面一口縁部ヨコナデ。体部ケズリのちミガキ。内面一口縁部ヨコナデ。体部丁寧なナデのちミガキ。輪積痕が見られる。胎土：緻密。焼成：良。色調：淡黄褐色。
4	塊	法量：口縁部径13.8cm。体部最大径13.4cm。器高6.9cm。現存率：ほぼ完形。調整：外面一口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリのちミガキ。底部ヘラケズリのちナデ。内面一口唇部一口縁部ヨコナデ。体部ナデのちミガキ。底部ナデ。胎土：緻密。焼成：良。色調：淡褐色。
5	塊	法量：口縁部径14.0cm。体部最大径(13.2)cm。現存率： $\frac{3}{4}$ 。調整：口縁部ヨコナデ。体部ナデのちミガキ。底部ヘラケズリのち丁寧なナデ。内面一口縁部丁寧なナデ。体部ナデのちミガキ。胎土：緻密。焼成：良。色調：暗赤褐色。
6	塊	法量：体部径(14.6)cm。現存率：体部下半 $\frac{1}{2}$ 。調整：外面一ナデのちミガキ。内面一ナデ。輪積痕が見られる。胎土：緻密。焼成：良。色調：暗褐色。
7	高环	法量：口縁部径16.6cm。器高9.9cm。脚接合部径2.8cm。底部径10.2cm。現存率：ほぼ完形。調整：外面一ナデのちミガキ（暗文）。内面一环部ナデのちミガキ（暗文）。脚台部ナデ。脚裾部丁寧なナデ。胎土：緻密。焼成：良。色調：淡黄褐色。
8	高环	法量：脚接合部径(4.4)cm。脚裾部径(14.8)cm。現存率：环部下半 $\frac{1}{2}$ 、脚部 $\frac{1}{2}$ 。調整：外面一ナデのちミガキ。内面一环部ナデのちミガキ。脚部ナデ。裾部ナデのちミガキ。接合痕著。胎土：緻密。焼成：良。色調：赤褐色。
9	高环	法量：脚接合部径3.2cm。脚裾部径13.0cm。現存率：脚部ほぼ完存。調整：外面一ナデのちミガキ（暗文）。内面一回転ナデ。胎土：緻密。焼成：良。色調：赤褐色。
10	高环	現存率：脚部 $\frac{1}{2}$ 。調整：外面一丁寧なナデ。内面一ナデのち横方向のミガキ。接合痕著。胎土：緻密。焼成：良。色調：赤褐色。
11	高环	法量：脚裾部径(13.2)cm。現存率：脚部 $\frac{1}{2}$ 。調整：外面一ナデのちミガキ。内面一丁寧なナデ。胎土：緻密。焼成：良。色調：赤褐色。
12	高环	法量：裾部径(16.8)cm。現存率：脚部 $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{3}{4}$ 。調整：外面一脚部ナデのちミガキ。内面一脚部上位ナデ。裾部回転ナデ。胎土：緻密。焼成：良。色調：暗赤褐色。

## 第4節 中世の遺構と遺物

### 1) 中世墓

#### 1号中世墓 (第64・67図、図版16)

C-7区に位置する。上面に削平を受ける。平面形は基本的に長方形を呈するが南東部に膨らみを持つ。規模は東-西1.4m、南-北0.8mで、深さ20cmを測る。主軸方位はほぼ東西に採る。主軸線上西半から頭蓋骨、歯が検出され、中央部から釘が2本出土している。副葬品は古銭6枚が重なって出土している。内訳は開元通宝、祥符通宝、元豊通宝、至和元宝、聖宋元宝が各1枚、不明銭1枚である。頭蓋骨が原位置を保つものとすれば、右胸にあたる位置から出土している。

#### 2号中世墓 (第64図、図版16)

D-8区に位置する。上面にかなり削平を受ける。平面形は長方形から台形を呈する。規模は南北1.1m、東西0.7mを測り、深さは10~5cmしか残らない。主軸方位はN-28°-Eに採る。土壌北半部で主軸線上からわずかにずれて、頭蓋骨、歯が検出された。

#### 3号中世墓 (第64・67図、図版16)

C-8区に位置する。2号方形周溝墓の覆土中に掘り込まれていたこともあり、遺構の確認に若干の手違いがあった。そのため全容をつかみえなかつたが、ほぼ方形を呈するものであろう。主軸方位はN-40°-Wに採り、規模は南北で1.2mを測る。北壁沿いに頭蓋骨、歯などが集中し、中央部に他の骨がまとまっていた。足を折り曲げられた状態で埋葬されたものであろう。副葬品は古銭3枚がまとまって出土し、1枚は熙寧元宝だが他の2枚は不明である。

#### 4号中世墓 (第64・67図、図版17)

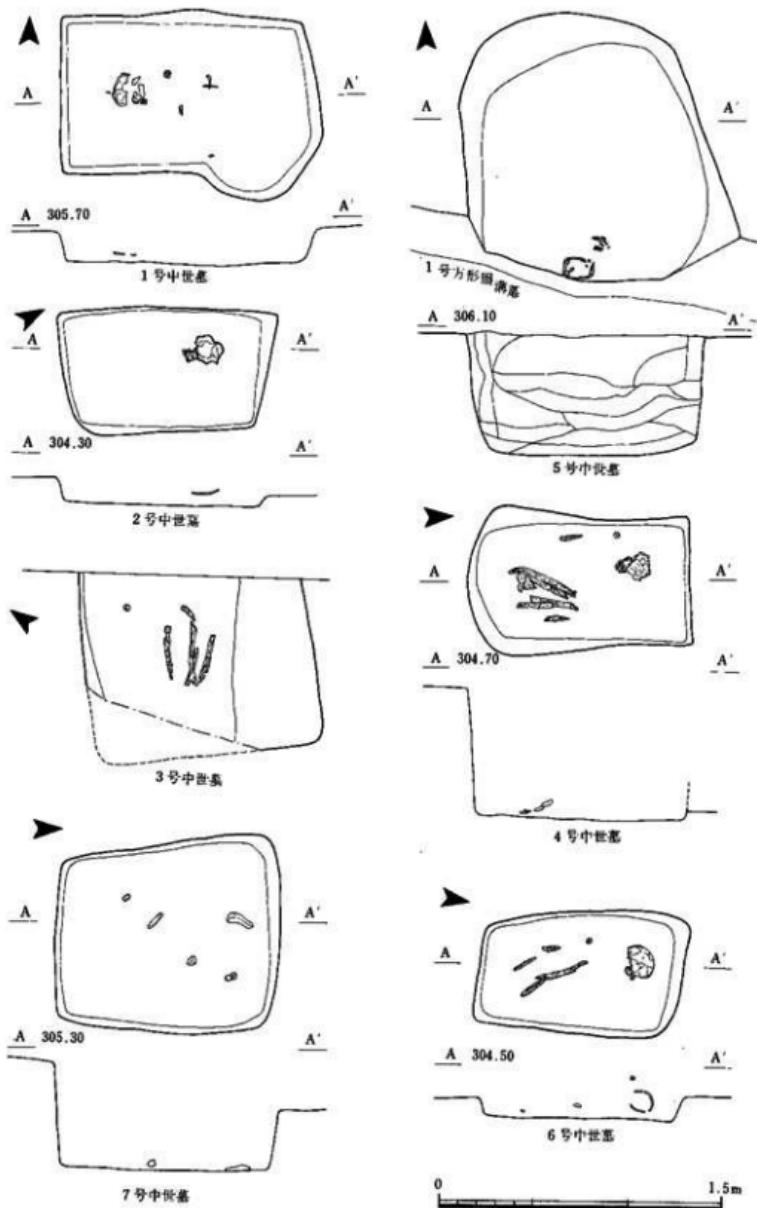
D-8区に位置する。平面形は隅丸の長方形を呈し、主軸方位はほぼ真北に採る。規模は南北1.2m、東西0.8m程で深さは0.7mを有する。主軸線上北半部から頭蓋骨が、中央西壁寄りから背骨、南半部から足の骨が検出され、足を折り曲げ、左腹を下にして横たえられた状態であった。副葬品は古銭1枚(□□元宝)が出土している。

#### 5号中世墓 (第64・67図、図版18)

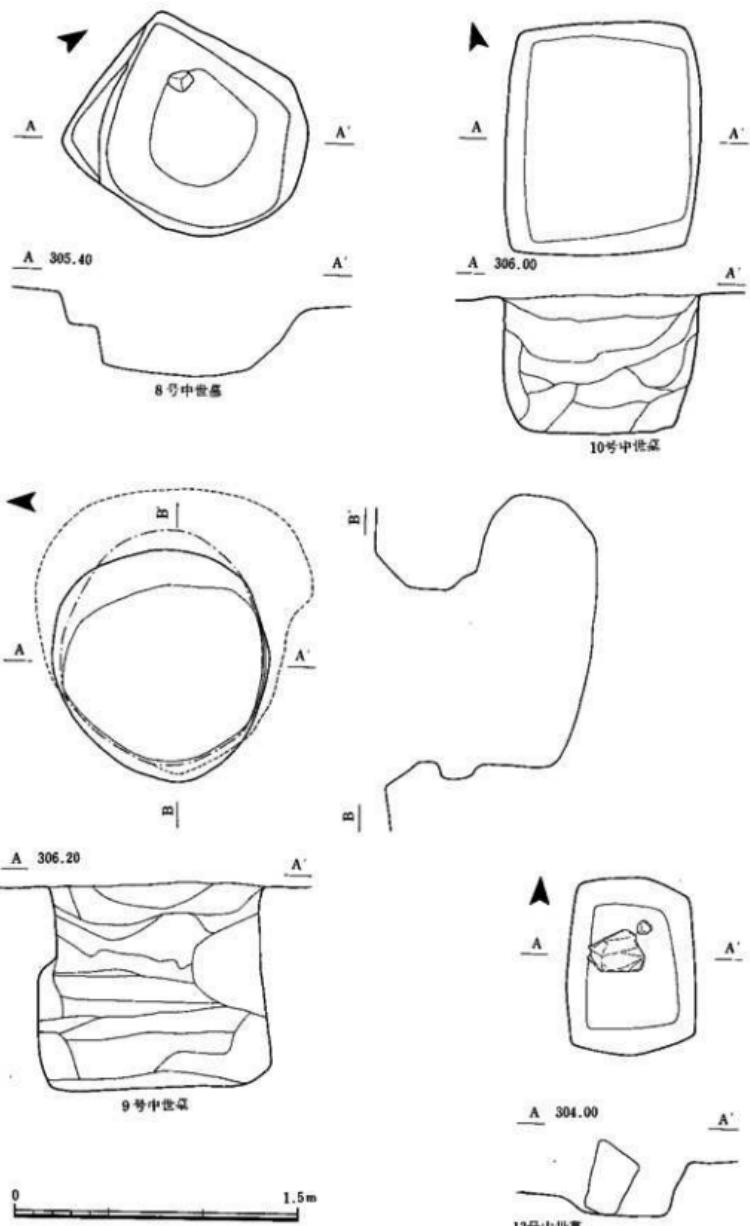
D-6区に位置する。平面形は隅丸の長方形を呈し、主軸方位はN-13°-Wに採る。規模は南北1.6m、東西1.3mで深さは65cmを測る。主軸線上南端部から頭蓋骨が検出された。副葬品は古銭3枚が出土している。内訳は開元通宝、紹聖元宝、元祐通宝である。

#### 6号中世墓 (第64・67図、図版18)

D-7区に位置する。上面をかなり削平されているものであろう。平面形は不整長方形を呈し、主軸方位はN-5°-Wに採る。規模は南北1.1m、東西0.7mを測るが深さは10cm程しか残していない。主軸線上北端部から頭蓋骨が、中央部から南半部にかけて足の骨が検出されている。副葬品は古銭4枚が出土し、内訳は開元通宝、元豐通宝、天禧通宝、熙寧元宝である。



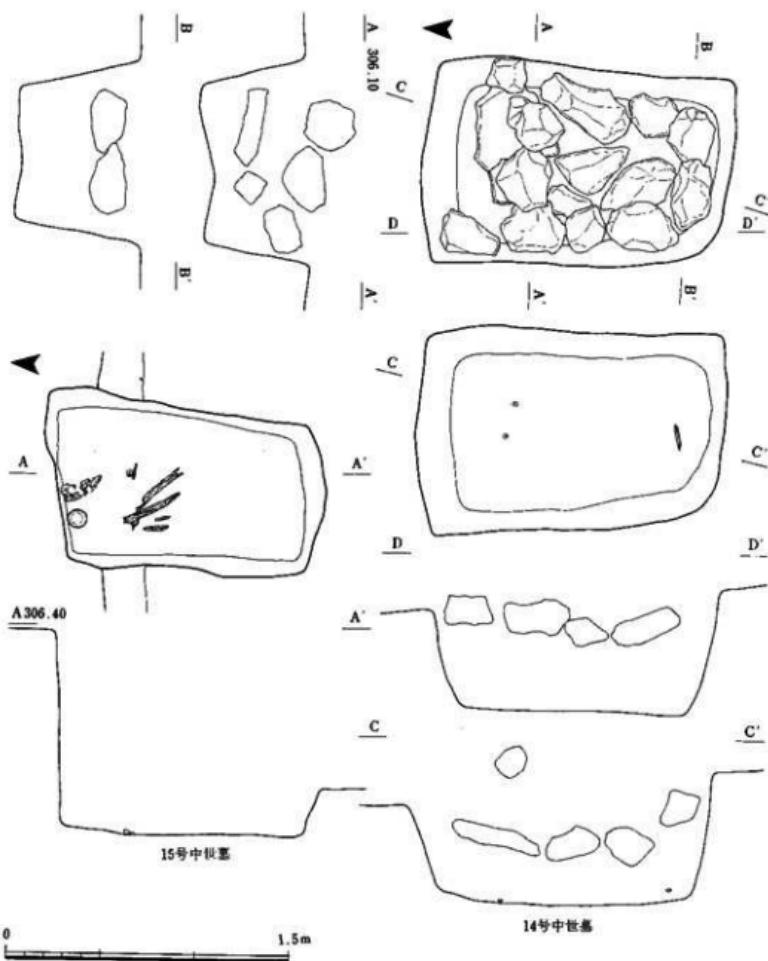
第64图 中世墓(1) [1/30]



第65図 中世墓(2) (1/30)

7号中世墓 (第64・68図、図版19)

D-7区に位置する。平面形は不整長方形を呈し、主軸方位はほぼ真北に採る。規模は南北1.2m、東西1.1mで、深さ55cmを測る。人骨は検出されなかった。副葬品は古銭4枚が出土し内訳は宣徳通宝、天禧通宝、元豐通宝、嘉□通宝である。



第66図 中世墓(3) (1/30)

### 8号中世墓 (第65・68図、図版19)

D-6区に位置する。平面形は1辺が丸みを帯びた不整方形を呈し、主軸方位はほぼ東西に採る。規模は東西1.2m、南北1mで深さは50cm程を有する。南西隅にテラス状の段部を持ち底面は丸みを見せ東壁は内湾しながら緩やかに立ち上がる。人骨は検出されなかった。副葬品は古銭1枚、天禧通宝が出土している。

### 9号中世墓 (第65図、図版19)

D-6区に位置する。平面形は不整円形を呈し、規模は径1.2m程を測る。深さは0.9~1.2mを有し、東半部は50cm程オーバーハングを見せる。人骨、古銭等の出土はないが、覆土中位に炭化物を多量に含む層が存在する。また一見地下式土壙とも思われたが、断定するには覆土の堆積に疑問が残った。

### 10号中世墓 (第65・68図、図版20)

D-6区に位置する。平面形は長方形を呈し、主軸方位はN-13°-Eに採る。規模は南北1.2m、東西1.0mで深さは70cmを有する。主軸線上北端部で土壙底面から僅かに浮いて頭蓋骨が検出されたが細片化が激しく図化しえなかつた。副葬品は古銭4枚が出土した。他の中世墓出土の古銭に比べ、薄く一回り小型のもので、遺存状態も悪かった。

### 11号中世墓

D-7区に位置する。3号方形周溝墓の南東のコーナー部に喰まれていた。この部位は1号方形周溝墓と、3号方形周溝墓とが重複する箇所でもあり、遺構確認が困難で中世墓基底部を検出しえたに止どまった。平面形は長方形、規模は90×70cmで主軸方位はN-13°-Wに採る。

### 12号中世墓

D-8区に位置する。耕作等による攪乱のため、形状・規模を想定しうるにすぎない。平面形は長方形、規模は南北1.0m、東西0.9mで主軸方位は真北に採る。

### 13号中世墓 (第65図、図版20)

D-8区に位置する。上部をかなり削平されている。平面形は不整長方形を呈し、主軸方位はほぼ真北に採る。規模は南北90cm、東西70cmで深さ30cmを有するが、本米は一回り大型のものであろう。土壙中央に大きな角礫が立てた状態で据えられていた。人骨、副葬品等は検出できなかつた。

### 14号中世墓 (第66・68図、図版20・21)

C-7区に位置する。平面形は長方形を呈し、主軸方位は真北に採る。規模は南北1.6m、東西1.1mと大型である。深さは60cm~70cmを有し、覆土中位から上位には角礫が散き詰められている。角礫は最大50cm角程の大きなもので、比較的偏平なものが選ばれている。中央が深く、壁際が浅くレンズ状に配されている。礫下部の、土壙底面より僅かに浮いて人骨の一部と、副葬品が検出された。副葬品は古銭が5枚認められ、内訳は天禧通宝、元豐通宝、熙寧元宝、元祐通宝、不明銭1枚である。



3号墓

1号墓



4号墓



5号墓



6号墓



第67图 中世墓出土古钱(1)(1/1)



8号墓



7号墓

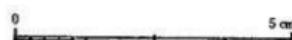


10号墓

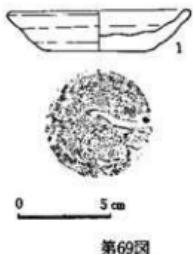
14号墓



15号墓



第68図 中世墓出土古銭(2)〔1/1〕



15号中世墓出土土器 (1/3) らカワラケの完形品が出土している。

第23表 15号中世墓出土土器観察表

1	皿	法量：口縁部径 9.8 cm。底部径 5.3 cm。器高 2.2 cm。現存率：ほぼ完形。調整：外面一体部回転ナデ。底面同軸糸切り。内面一部にスヌ付着。体部回転ナデ。胎土：金雲母を含み密。焼成：良。色調：淡褐色。
---	---	--

## 2) 土壌と溝

### A 土壌

#### 3号土壌 (第70図)

II区、b-3区に位置する。平面形は不整形を呈し、規模は 2 m × 0.7 m で深さ 0.4 m を測る。断面U字形に掘り込まれ、覆土は 5 層に分けられる。遺物は出土していない。

### B 溝

本遺跡からは前述したように10本の溝が検出されたが、そのうち5本が中世、あるいはより後世の所産と考えられる。以下説明を加えたい。

#### 6溝 (第51図、図版24)

N-2、N-3トレンチ中央で確認され東西に走る。幅2 m、深さ1 m程度で斜面下部側にテラス状の段部を持つ。

#### 7溝 (第51図)

W-2トレンチ中央部から検出され、南北に走る。幅1.5 m、深さ50 cmを測る。

#### 8溝

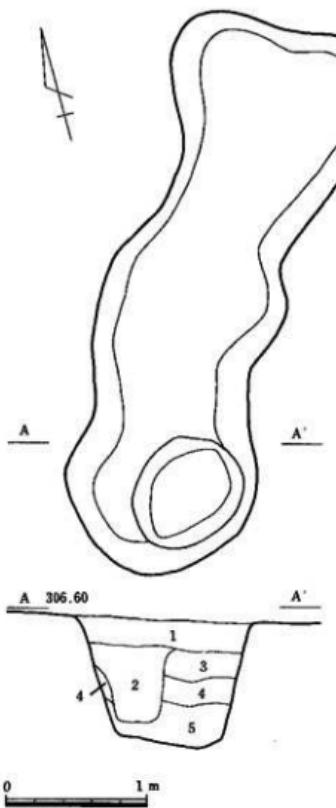
NW-1トレンチで検出された。ほぼ南北に走り、幅80 cm、深さ80 cmを測る。

#### 9溝 (第71図)

II区、b-3区に位置する。長さ3 m、幅0.7 m、深さ20 cmを測る。北西から南東方向に走る。

#### 10溝

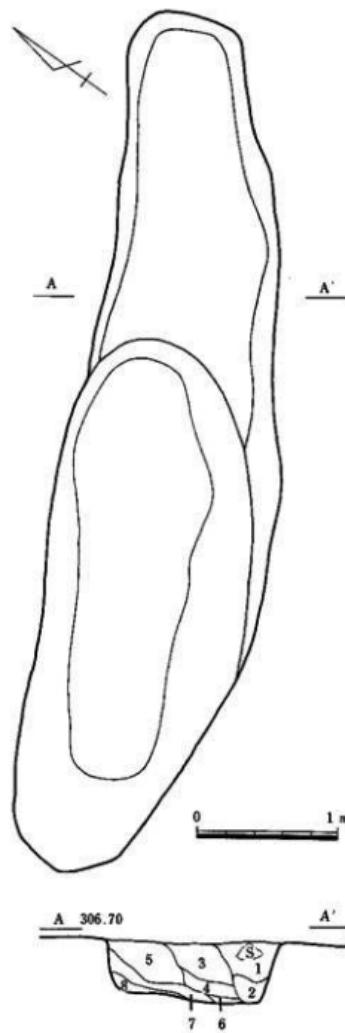
E-4トレンチで検出され、幅1.1 m、深さ15 cmを測る。南北方向に走り、16号住居址北西部を切って、東に折れる。



3号土壠  
第1層：暗褐色土層（粘性強、しまり無、ローム粒を少量含む。）  
第2層：暗褐色土層（粘性強、しまり無、ローム粒を多量含む。）

第3層：暗褐色土層（粘性強、ローム粒を多量含む。）  
第4層：暗褐色土層（粘性強、ローム粒を含む。）  
第5層：暗褐色土層（粘性強、ローム粒・ロームブロックを多量含む。）

第70図 3号土壠 [1/40]



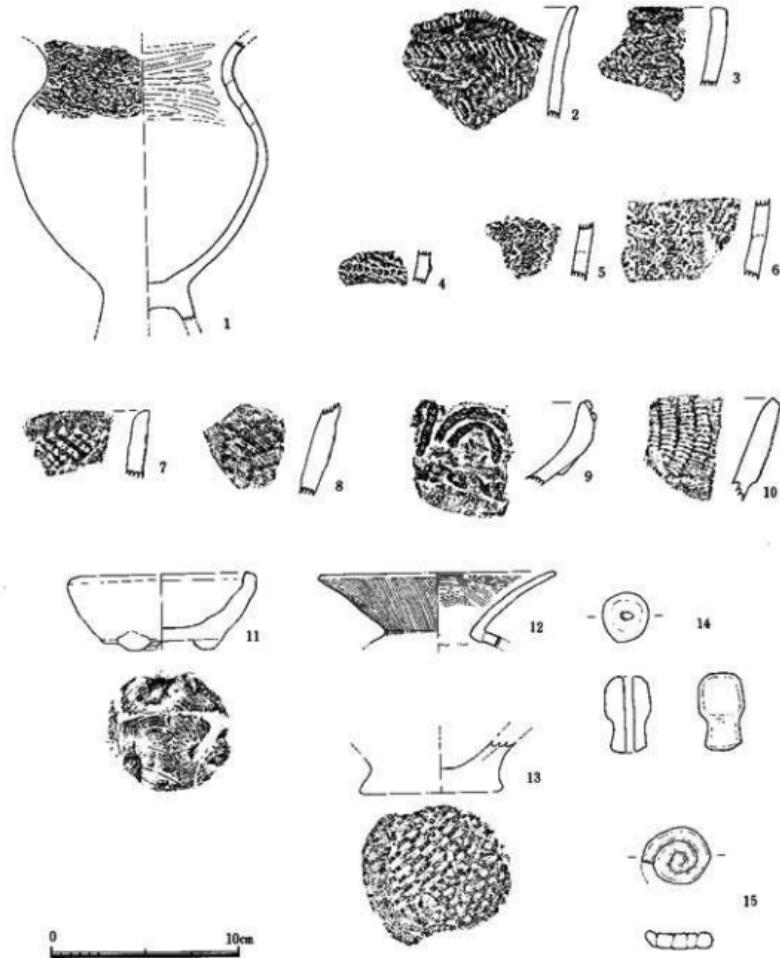
第71図 9溝 [1/40]

9溝  
第1層：暗褐色土層（粘性強。）  
第2層：暗褐色土層（粘性強、ロームブロックを含む。）  
第3層：暗褐色土層（粘性強、ローム粒を含む。）  
第4層：暗褐色土層（粘性強、ローム主体層、暗褐色土を含む。）  
第5層：暗褐色土層（粘性強、ローム粒を多量含む。）  
第6層：暗褐色土層（粘性強、ローム主体層。）  
第7層：暗褐色土層（粘性強、ロームブロックを多量含む。）  
第8層：暗褐色土層（粘性強、ローム主体層、暗褐色土を微量含む。）

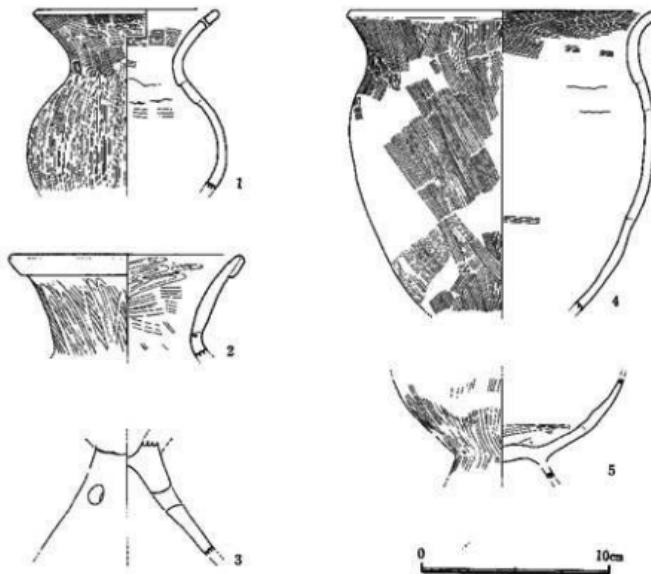
## 第5節 遺構外出土の遺物

### 遺構外出土土器 (第72~73図、第24表、図版30)

1. 台付壺。色調は黒褐色を呈し、胎土には若干の砂が含まれる。口唇および脚がそれぞれ欠落している。調整は外面は風化が激しく不明、内面には大きなミガキが見られる。また頸部には5本1単位で幅6m/mの櫛状波状文が4段巡っている。B-6区遺構確認面からの出土。
2. 深鉢口縁部破片。色調は明褐色、胎土は密である。波状口縁を呈し、口唇、胴部には範状工具による刻みが施される。B-6区1号方形周溝墓覆土より出土。
3. 深鉢口縁部破片。褐色を呈し、胎土は密である。表面には縦位のS字結節縄文が入る。C-6区1号方形周溝墓覆土より出土。
4. 胴部破片。色調は褐色。胎土は密である。縄文の上に、半截竹管で連続刺突が加えられた細い貼付突帯がつく。B-6区出土。
- 5・6. 3と同一か。
7. 深鉢口縁部破片。褐色を呈し、胎土には砂が含まれる。表面には竹管による右下がりの押引きが見られる。A-6区出土。
8. 胴部破片。暗褐色を呈し、胎土には砂が目立つ。半截竹管による押引き施文を、指頭のナデにより区画している。A-6区出土。
9. 深鉢口縁部。色調は暗褐色、胎土には砂が目立つ。口縁には細い粘土紐が半同心円に貼られており、その下には指腹で大きく刻まれた突帯が巡る。A-3区出土。
10. 深鉢口縁部。色調は暗褐色、胎土には砂が少量含まれる。丸棒のような原体でつけられた連続刺突の帯が大きな同心円を作っている。B-7区出土。
11. 脚付き鉢。色調は暗褐色を呈する。底部には糸切り痕を残し、3ヶ所の支脚が付く。内面中心部は円形に磨耗しており、すり鉢として使用されていることが分かる。C-4区円形周溝墓覆土より出土。
12. 大きく外反する口縁に対し、頸部は非常にしまっている。色調はやや明褐色、胎土は砂を微量に含む。調査区外表採。
13. 深鉢底部。暗褐色を呈し、胎土には砂が多量に含まれる。底部には網代模を残す。II区表採。
14. 不明土製品。暗褐色を呈し、胎土は密である。中心には穴が一筋通っており、一端は完結しているが他の端部は未調整に近いことから、何か別の個体につながっていたとも考えられる。I区表採。
15. 不明土製品。暗灰褐色を呈し、胎土は極めて密である。粘土紐を渦巻き形に丸めているが指頭圧痕が数ヶ所見られるほかは特に調整されていない。子供が作った玩具であろうか。I区表採。



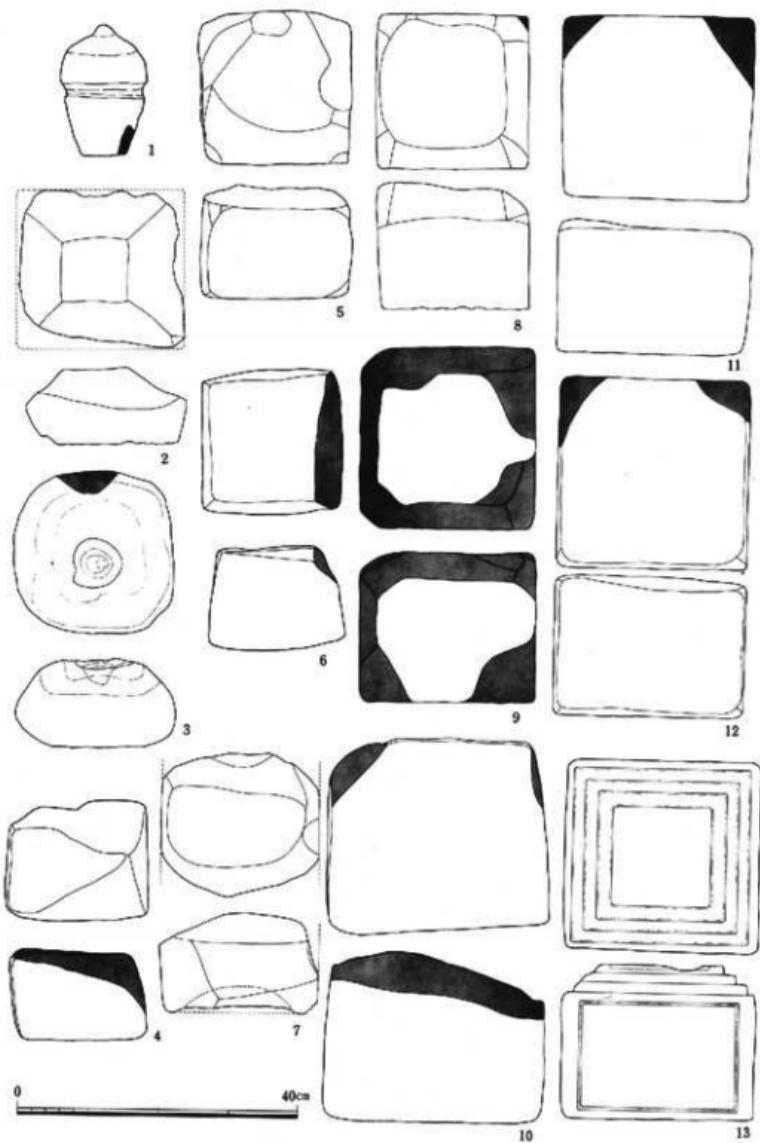
第72図 遺構外出土器(1) (1/3)



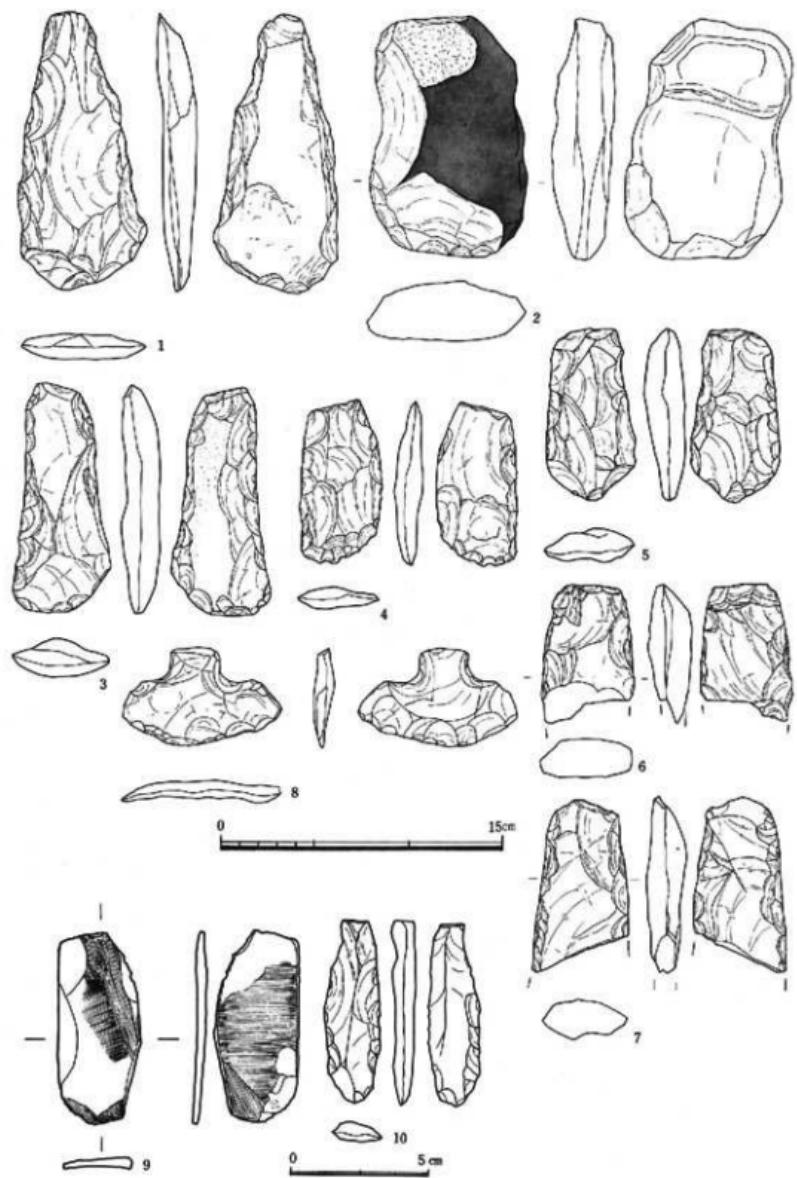
第73図 遺構外出土土器(2) (1 / 3)

第24表 遺構外出土土器観察表

1	小壺	法量：口縁部径(10.0)cm。頸部径(6.0)cm。胴部径(10.3)cm。現存率： $\frac{1}{2}$ 。調整：外面一口唇部より8mm程下に直径2mm程の孔が7mmの間で2ヶ並列貫通。口唇部ヨコナデ。口縁部横方向のハケ。頸部縱方向のハケ。胴部ハケのちミガキ。内面一口縁部ハケのちヨコナデ。頸部ハケ。胴部ヘラ状工具によるナデ。胎土：白砂粒含み密。焼成：良。色調：暗乳灰褐色。E 2トレンチ出土。
2	壺	法量：口縁部径12.6cm。頸部径7.8cm。現存率：口縁部～頸部完存。調整：外面一折り返し口縁。口縁部ヨコナデ。頸部縱方向のハケのちミガキ。内面一横方向のハケのちミガキ。胎土：白砂粒含み密。焼成：良。色調：やや淡褐色。5溝覆土出土。
3	器台	法量：脚接合部径(3.5)cm。現存率：脚部 $\frac{1}{2}$ 。調整：外面一脚部上位3ヶ所に穿孔が行なわれる。縱方向のハケのち丁寧なミガキ。内面一脚部上位ナデ。脚部中位横方向のハケのちナデ。胎土：白砂粒を含み密。焼成：良。色調：暗褐色。10溝覆土内。
4	甕	法量：口縁部径(16.6)cm。頸部径(14.6)cm。胴部径(16.2)cm。現存率：口縁部～頸部 $\frac{1}{2}$ 。調整：外面一口唇部ヨコナデ。口縁部～胴部ハケ。内部一口縁部～頸部ハケ。胴部ハケのちナデ。部分的に粗いミガキが施される。胎土：白砂粒含み密。焼成：良。色調：暗褐色。E 2トレンチ出土。
5	台付甕	法量：脚接合部径4.9cm。現存率：甕胴部下位～脚接合部 $\frac{1}{2}$ 。調整：外面一粗い縦～斜方向のハケ。内面一甕胴部横方向のハケのちナデ。脚部ヘラによるシボリ。胎土：密。焼成：良。色調：暗褐色。10溝覆土出土。



第74図 遺構外出土・五輪塔及び宝蓋印塔〔1／8〕



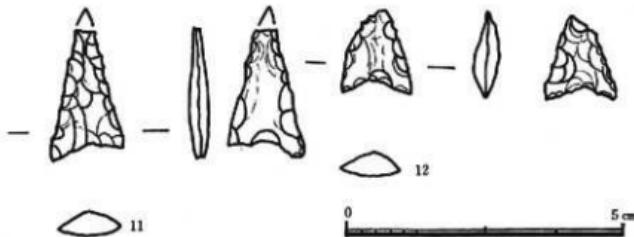
第75圖 遺構外出土石器(1) (1／2・1／3)

**五輪塔、宝鏡印塔** (第74図、図版32)

1～12は五輪塔、13は宝鏡印塔である。遺構に伴うものではなく、調査区、特にI区とI区西側の谷の傾斜面に置かれていた、あるいは並べられていたものがほとんどである。耕作の障害となるためであろうが、中には穴に落とした状態で検出された石もあった。石材は1・5輝石安山岩、2安山岩質凝灰岩、3・7・9デイサイト質凝灰岩、4凝灰岩質礫岩、6・12角閃石アイサイト、8・10・13安山岩、11デイサイト。

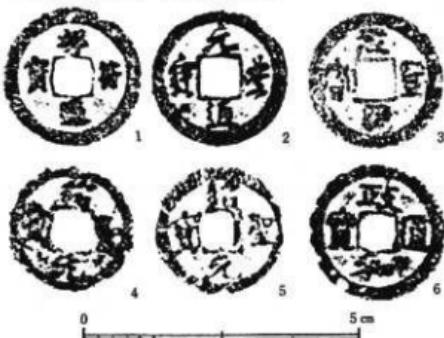
**遺構外出土土器** (第75～76図、図版31)

1～7は打製石斧、8は大型の石匙、9・10は特定できない。9には両面に擦った跡があるため、砥石のようなものかと考えられる。10は縦長の石匙を思わせ、刀部には加工痕を残す。ナイフの一種か。出土地は1・3・5～7がB-7区、2がD-7区、4がD-4区、9・10がE-2トレンチ。石材は、1砂岩、2・8・10泥岩、3・7粗粒砂岩、4～6泥質ホルンフェルス、9粘板岩。



第76図 遺構外出土土器(2) [1/1]

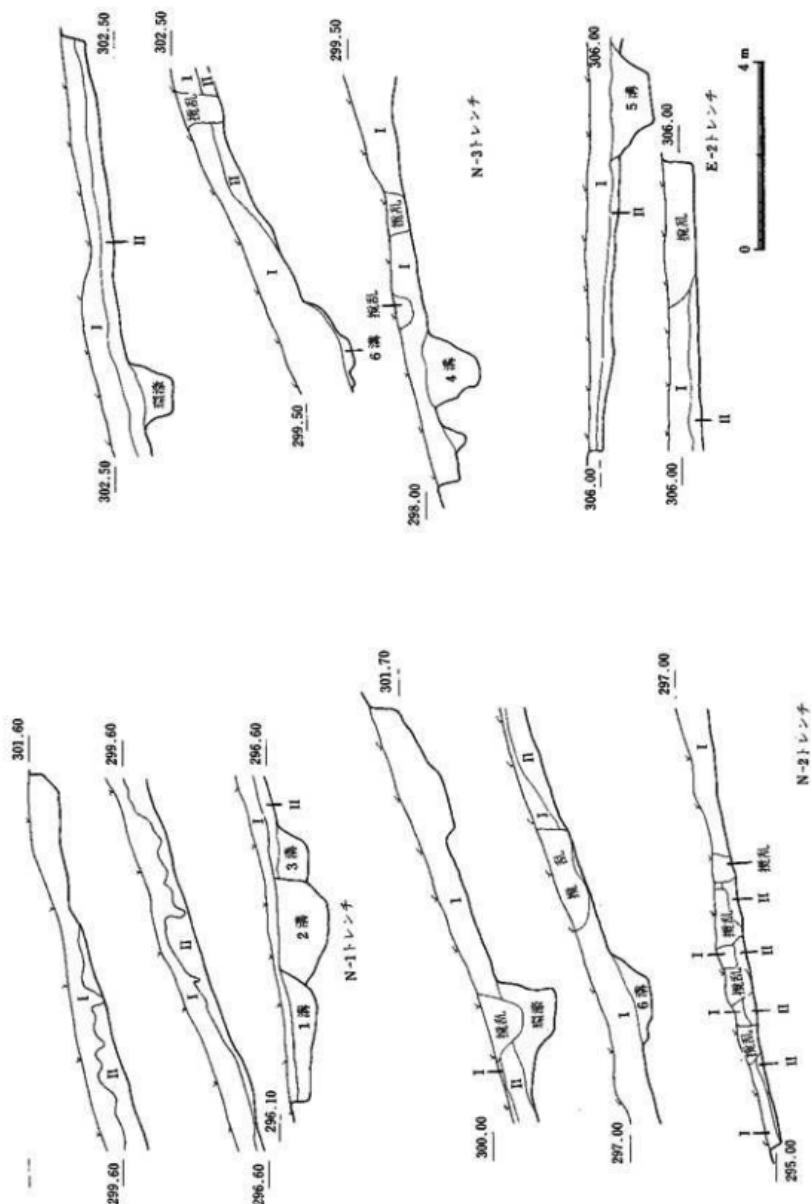
11は細長い石鎌で、先端部は欠損している。E-2トレンチ5溝覆土から出土した。12も石鎌、A-4区確認面出土。黒曜石である。



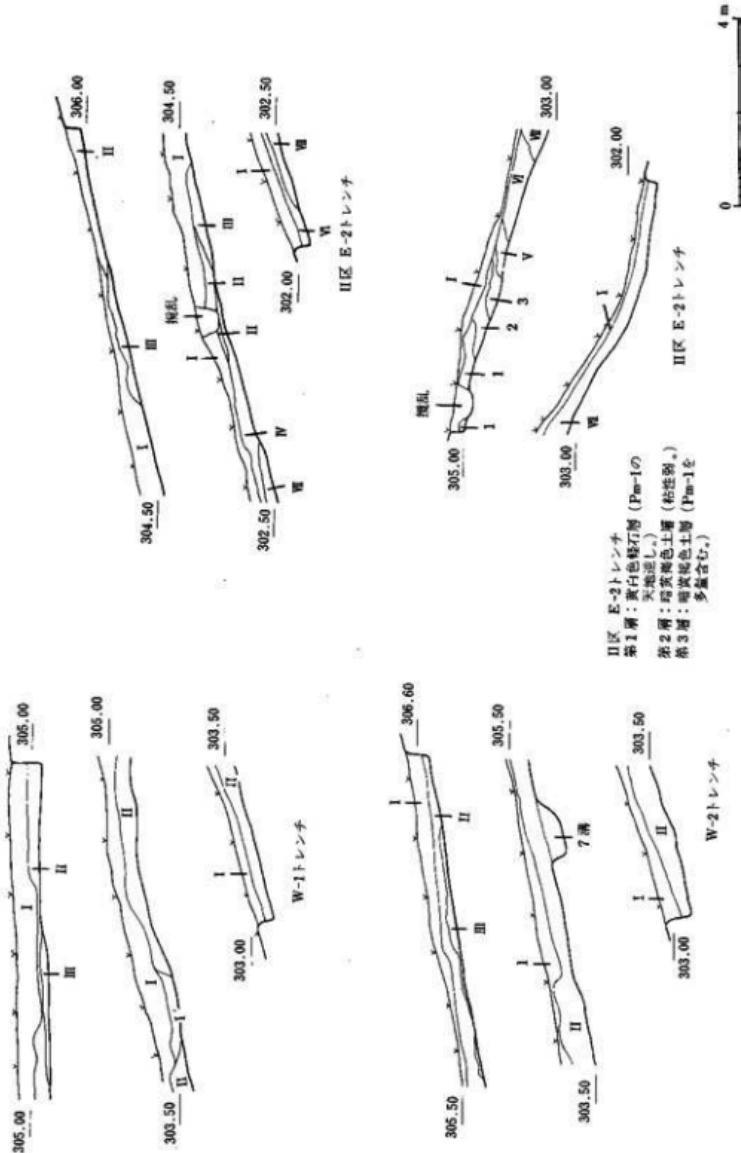
第77図 遺構外出土古銭 [1/1]

**遺構外出土古銭** (第77図)

遺構外出土の古銭は6枚ある。1・5はC-4区円形周溝墓より出土、2・3・4・6はA-3区確認面出土である。1は祥符通宝、2・3は元豐通宝、4・5は紹聖元宝、6は政和通宝である。



第78図 トレンチ土層断面図(1) [1/120]



第79図 レンチ土層断面図(2) [1/120]

## 第V章 成果と課題

### 第1節 弥生時代の遺構と遺物について

弥生時代の遺構として、住居址9軒、掘立柱建物1軒、方形周溝墓5基、環濠、溝などが検出された。まず集落から見て行きたい。

集落を構成する住居址9軒のうち、1号と2号は近接しているため同時性が問われる。また3号と4号は重複している。そうすると、1時期につき多くて8軒の住居が當まれていたことになる。だがこれは少なく、この軒数をもって集落構成数と考えるのは疑問である。住居址の配列を見ると、さらに東西に伸びて行くようにも思えるが、西側の谷に面しているところは、かなりの擾乱を受け地形が変えられている。それは谷側に入れたトレンチにより分かっており、範囲としてはII区のはば全体にわたっていることから、I区とII区は本来は現在よりも接近していたのではないかと考えられる。つまりは、もう一回り大きな集落を想定できよう。

住居址についての様相を述べる。柱穴は1・2・3・4・6・9号住居址から検出された。この遺構のうち、全容を窺い得たものは1号・2号住居址のみで、4本あるいは5本の柱で構えられている。各住居址の形態は概ね円形であるため、検出されなかった住居址についてもこの本数を当てはめることができよう。住居に付随する施設として、1号は堤防状の高まりに囲まれたピットが、2号は入り口の梯子用と考えられる傾斜したピットが確認できた。また、9号の南端に当たるピットからは、水成層のような暗青灰色の粘土塊が出土しており、土器製作用の粘土を貯蔵していたとも考えられる。

住居址から出土した土器は、全体的に見ると少ない。しかしながら、5号と8号からは比較的豊富な量と種類の土器が出土した。いずれも住居内の1ヶ所に集中しており、潰されたような形で検出された。そのため小破片が多く、接合および圓化し得なかった個体もある。

住居址出土の土器で、完形品はない。大半は擾乱による遺構の保存状態の悪さに起因するのであろうが、先述の5号・8号住居址のような出土状況、つまり圧し潰されているとも言える状況は、集落の中の急な変化を示しているとも思える。

集落の特徴として、環濠が伴うことが挙げられる。環濠はトレンチで検出されているため不明な点が多いが、次にこの環濠について考察を加える。県内の遺跡で環濠が検出されたことはないので、関東地方での例と比較してみたい。

代表的な環濠集落と言える神奈川県の大塚遺跡の場合、環濠は台地の縁を巡る。部分的に二重に設置されているが、大体は一重で集落を囲んでいる。堆積土層中にロームを含む層があることから、掘り出した土を内側に積み上げて、土壁を造っていたと考えられている。掘り方はV字又は逆台形を呈し、幅は最大で5m、深さ2mを越える。ただここで注意したいのは、大塚遺跡と

比較するのは、時期的に見た場合必ずしも妥当ではないということである。

本遺跡とはば時期を同じくすると考えられる遺跡として、神奈川県西部209地点遺跡・三ツ俣遺跡・海老名本郷遺跡・そとごう遺跡・殿屋敷遺跡群C地点・東京都山王遺跡・鎌ヶ谷遺跡・下山<sup>1)</sup>遺跡・堂ヶ谷戸遺跡・赤羽台遺跡等が挙げられよう。いずれも完全に調査されているものではないが、これらのうち、集落を巡る、あるいは巡ると考えられるもの5遺跡、直線をなすいわゆる「条濠」と言われる、あるいは条濠と考えられるもの1遺跡、残りは不明である。位置的に見ると、集落を巡る場合は集落が占有する台地の縁に、地形に沿って造られている。全体で見ると掘り方はV字を呈し、規模的には幅2~3m、深さ1~1.5m程度で、前段階（中期後半頃）に比べて小規模と言えるであろう。

上野遺跡の場合、集落が占有する台地の斜面に存在し、集落を囲むかは不明である。その点では条濠と言るべきかもしれない。規模は幅3m、深さ1.5mで、上記の遺跡と一致する。掘り出した土で造った土堤は、少なくとも濠の内側には見られない。掘り方は概してU字形であるがV字を呈する箇所もあり、垂直に近い形で立ち上がってている。

本遺跡の環濠が上記の遺跡の環濠と大きく異なるのは、完全な斜面に設けられている点である。斜面に造られた理由としては、台地の面積にかかる制約、集落の範囲にかかる制約が挙げられるよう。だが、ここで住居址の配置を見ると、弥生時代後期の住居址は台地の縁に近いところに並び、南端は2号住居址となる。この配置からは、少なくとも台地の面積による制約は考えられない。集落が先行してそれに合わせて環濠が造られた、すなわち、集落の範囲を考えての処置である可能性が大きい。しかし、7号・8号住居址のように平地と斜面の境、むしろ斜面側に構築されているにもかかわらず、台地の中心部には極めて少ないので気になる。

環濠内の土層の堆積は、自然な状態を呈している。覆土からは縄文と弥生の土器片が出土しているが、古墳時代以降の土器は出土していない。調査区全体からすると古墳時代の遺物そのもののが少ないのであるが、この時期には環濠は、少なくとも機能していないと考えたい。

環濠の目的であるが、一般に環濠には1・外敵が侵入するのを防げる、2・獣の侵入を防ぐという目的があると言われている。いずれも防衛上の機能であることに変わりはない。だが、前段階（=中期後半）では比較的顕著と考えられるこの目的も、はたして後期末の環濠にも通用するかは問題がある。上野遺跡の場合、山との境ではなく盆地に面する傾斜に掘られていること、小規模ながら人間にも通用することから、防衛的な目的も充てられよう。しかし、この時期に相当する鎌、剣などの武器が出土していない。これは上野遺跡に限らず、関東地域の環濠集落にも当てはまる大きな問題である。すなわち、環濠は当時の緊張した状況を感じさせるが、それが具体的な遺物としては検出されていないという事実で、同時に前段階と比較して環濠が小規模化する傾向、集落を構成する住居数も減少する傾向も指摘されている。<sup>2)</sup>これらはそもそも中期大集落の解体に起因するのであろうが、その原因が後期末の環濠の目的を不明瞭にしているように思える。

環濠ではなく、条濠と言われる遺構について考えてみたい。前段階の環濠集落を経て、環濠と

同様な掘り方を呈する条濠が出現する。これは決して環濠が条濠にとってかわられたことを意味するものではない。後期末の環濠集落は確実に存在している。条濠は環濠と比較して、防衛的な機能が退化し区画する目的が大きく現れているように思える。条濠と言えるかは不明だが、県内の該期の集落には、敷島町金の尾遺跡のように溝を伴う例が知られている。この場合の溝は、主に集落を区画する、あるいは区分するという目的があると言われており、事実金の尾遺跡では調査区を斜めに走り、それにより集落は北と南に二分されている。本遺跡では、台地の縁を巡るため区画するという意図は非常に薄いと言えるだろう。だが、厳密な時期の検証を無視し、上野遺跡の集落と一条氏館跡遺跡の方形周溝墓を同時期と考えると、生活域と墓域とを区画するための濠とも考えられなくはない。しかし、ただ区画するためにこれだけの労力を使うかというのは疑問である。<sup>3)</sup>

方形周溝墓は集落の後に造成されている。5基あるうち1・2号がほぼ同時期、3・4・5号はそれより新しい。方形周溝墓に伴う土器の個数が限られているためはっきりとは言えないが、集落との時期はさほど感じられない。特徴的なのは1号方形周溝墓で、ブリッジを辺にもっており、やや末広がりに突出している。掘り方は、方台部は方形を意識しており、溝も同様に方台部コーナーが若干せりだしているかのように掘られている。ただ、北辺の両コーナーについては「面取り」されているため、極端に幅が狭くなり、非常に浅い掘り方となる。

県内の例と比較すると、規模的には上の平遺跡の1号方形周溝墓には劣るもの、方台部の面積は約480m<sup>2</sup>あり、最大級に属する。他例では、完掘された例は少ないが、ブリッジの本数と位置及び掘り方はほぼ共通している。

供獻土器の個体数は各遺跡により若干異なるものの、上の平遺跡では「1基につき1～3個」<sup>4)</sup>と言われており、他の遺跡も同様と考えて良いだろう。本遺跡の場合、先述の特徴のほかに、供獻土器の多さが挙げられる。9個体出土しており、出土場所は南辺ブリッジの東側が4個体、東辺・北辺が2個体、西辺が1個体で、出土位置は溝底から浮いている状態で出土しているのが南辺で2点、北辺で2点、西辺で1点、溝底直上から出土したのが南辺で2点、東辺で2点である。土器はブリッジ東側の溝底直下から出土した1点を除き、すべて底部を焼成後に抜いており、底部があるものについても口縁部を意図的に欠いている。第39図2の土器は二重口縁で胴部には横描直線文と横描波状文を施し赤く塗装されており、東海地方のバレススタイル式土器を思わせる。また4・5・6の土器は、球体の胴に二重口縁をもち、製作方法、胎土が共通している。ただ調整に若干の違いが見られ、1つの土器のイメージで複数の人間が造ったと分かる。この土器が、南辺を除くすべての辺から出土しているのがおもしろい。特別な意味をもった土器であろうか。

弥生時代の主な遺構については以上である。環濠についても方形周溝墓についても、県内では例のない、あるいは知られていない特徴を持つものであったため、一部県外の例を引き合いに出してもみたが、かえって混乱を招きそうであるため、やはり県内での位置付けを行ってから再度検討していきたい。

(堀ノ内)

## 第2節 中世墓について

上野遺跡からは15基の中世墓が検出された。9号中世墓をのぞくといわゆる土壙墓の範疇に含まれるものであり、概略は別表に示した通りであるが若干の「まとめ」を試みたい。また9号中世墓はその性格に疑問の残るものであるが、ここでは中世墓に含めて検討した。

第25表 中世墓一覧表

中世墓No.	形 状	規 模	主軸方位	頭位方向	古銭	備 考
1	長方形	1.4×0.8	W	西	6	釘2本(木棺使用か)
2	長方形	1.1×0.7	N-28°-E	北	-	
3	方 形	1.2	N-40°-W	北	3	
4	長方形	1.2×0.8	N	北	1	
5	長方形	1.5×1.3	N-13°-W	南	3	
6	長方形	1.1×0.7	N-5°-W	北	4	
7	方 形	1.2×1.1	N	-	4	木棺破片?
8	不整方形	1.2×1.0	E-W	-	1	段部有、壁湾曲
9	不整円形	1.2(1.4)			-	オーバーハング
10	長方形	1.2×1.0	N-13°-E	北	4	
11	長方形	(0.9×0.7)	N-13°-W	-	-	
12	長方形	1.0×0.9	N	-	-	
13	長方形	0.9×0.7	N	-	--	角礫を立てる
14	長方形	1.7×1.1	N	-	5	礫を使用
15	長方形	1.4×0.9	N	北	6	カワラケ

### 1) 位置関係について

15基発見された中世墓のうち、14・15号中世墓をのぞく13基はI区平坦面の西半部分の13×23mの範囲に集中している。また墓壙内に礫を使用している14号中世墓がそれらと対峙するようにI区平坦面のほぼ中央に単独で営まれている。

### 2) 形状(形態)について

8・9号中世墓をのぞくと方形或いは長方形を基調にしている。2・3・7・12号中世墓が方形にちかく、他は長方形を呈する。また1・4・5号中世墓が1辺、一部に膨らみを持っており8号中世墓も基本的には長方形を基調とするものといえる。8・9号中世墓をのぞくと壁はほぼ直状に掘り込まれ、墓壙はすなわち立方体を示している。

13・14号中世墓には角礫が使用されている。13号中世墓のものは墓壙底部に直立した状態で検出された。意識的に為されたものであるか否かは明確ではないが本造構に伴うものであることは明らかである。14号中世墓のものは覆土中位から検出され、墓壙全体に確認された。中央部が低く壁際が高く配され、北壁沿いの列は上下2段に認められた。人骨、副葬品は礫下部から検出され、礫は遺骸の上部を覆っていたものである。またその状況から墓壙周囲から落ち込んだものとも考えがたい。

9号中世墓は上面不整円形を呈し、特に東側に強くオーバーハングを示している。他の中世墓

とは全く様相を異にしており、同時期、同性格の遺構と判定するには疑問が残るものである。

### 3) 規模について

最大のものは長軸1.7mを測る14号中世墓、ついで同1.5mの5号中世墓で最小のものは同0.9mを測る11・13号中世墓である。15基検出された中世墓のうち1／3強の6基が長軸1.2mを測り、また15基の平均値も1.213mと極めて規格性が強い。深さは、上面がかなり削平されているため明確ではないが、4・5・15号中世墓が0.7~1.0mを有しており他の墓も同程度である可能性が強い。

### 4) 方位について

15基中6基(4・7・12・13・14・16)が主軸方位を南北に採り、2基(1・8)が東西に採っている。また2・5・6・10・11号中世墓もN-28°-E or Wの範囲に入り、ほぼ南北方向に主軸を探っているものといえる。15基中、11基が南北方向に主軸方位を採り、強い規格性を示している。

### 5) 埋葬体位(頭蓋の方位)について

15基の中世墓中10基から人骨が検出された。さらにそれらの内8基からは、頭蓋骨、背骨、大腿骨が確認されている。3・4・6・15号中世墓では側臥屈葬であることが明確で特に3・4号中世墓は左半身を下にして埋葬されており、6・15号中世墓もその可能性が強い。他の墓もその規模から推して同体位を探ったものと考えられる。

頭蓋の方位については、8基の墓で確認できた。西に採る1号中世墓、南に採る5号中世墓をのぞくと6基(2・3・4・6・10・15)が北に頭蓋をおき、全体の75%が「北枕」を採用している。ところで前述したように、4・6・15号中世墓は左半身を下にした側臥の姿勢で埋葬された可能性が強く、埋葬体位を復元しうるものはすべて東向北枕となる。造墓集団の何等かの葬送観念の現れであろうか、興味あるところである。

### 6) 棺について

7号中世墓から木棺の破片と思われる木片が出土している。また1号中世墓からは2本の釘が出土しており棺の使用を推察させる。他の墓もほぼ同規模・同形態を示しており、棺の使用を想定するのが自然であろう。

### 7) 創葬品について(古銭を中心として)

創葬品としてはカワラケ1個体と37枚の古銭が出土している。古銭はそれ以外に6枚が遺構外から出土しており、ここではそれも含めて検討したい。

10基の墓から出土しており、それぞれの数量は1~6枚である。置かれた位置については、1・15号中世墓では胸に、4・5・6号中世墓では頭蓋のそばであった。また複数枚が出土したものについては、まとまって揃えられた状態で出土しており、紐状のもので束ねられていたか、あるいは特に1・15号中世墓などでは遺体が錢を握った状態で埋葬されたと考えることも不可能ではない。

古銭の数量・種類等は別表の通りであるが、14種にのぼっており、古いものは開元通宝（621）でもっとも新しいものは宣徳通宝（1433）であった。同一墓から同一古銭が出土したものは15号中世墓から開元通宝・永樂通宝がそれぞれ2枚出土しているのみで他は非常にバラエティに富んでいるといえる。10号中世墓からは4枚の無文銭が出土している。これは大きさも一回り小さく重量も軽いもので、いわゆる「うちひらめ」であろう。無文銭の全体に占める割合は9.3%であるが、それが特定の1基に集中出土している事は興味深い存り方である。またこの9.3%という数字が当該期の一般流通銭における「悪銭」の割合とどのような関係があるか、あるいは武田氏の撰銭令との関係も今後の課題といえよう。

第26表 古銭出七一覧表

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	遺構外	
開元通宝	621	唐	1				1	1								2	5	
桙符通宝	1009	北宋	1														1	2
天禧通宝	1017	北宋					1	1	1							1	4	
至和通宝	1054	北宋	1														1	
熙寧通宝	1068	北宋					1									1	3	
元豐通宝	1078	北宋	1		1			1	1							1	6	
元祐通宝	1086	北宋				1										1	2	
紹聖通宝	1094	北宋				1										2	3	
聖宋元宝	1101	北宋	1														1	
政和通宝	1111	北宋														1	1	2
大定通宝	1178	金														1	1	
永樂通宝	1408	明														2	2	
宣徳通宝	1433	明						1									1	
嘉慶通宝								1									1	
無文銭											4						4	
不明銭			1	2	1										1		5	
		6	0	3	1	3	4	4	1	0	4	0	0	0	5	6	6	
																	43	

#### 8) 五輪塔について

上野遺跡では発掘前に12基の五輪塔（部分）と1基の宝篋印塔（部分）が発見されている。五輪塔は空風輪-1、火輪-2、地輪-9である。空風輪は乳頭状の宝珠を持って、頭が張り、裾ですばまっている。室町末期に比定しえよう。火輪は軒が厚く、また軒上辺と頂部との間隔が短く、かつ屋根の流れが浅いものである。空風輪と同様ほぼ室町末期のものといえよう。これらの塔（部分）と中世墓との直接的な関係を示す何等かの証拠を得ることはできなかったが、その蓋然性は高いといえよう。

#### 9) 県内他遺跡で確認された中世墓

県内で該期の墓が発見された例としては、塚田遺跡（須玉町）・小和田館跡遺跡（長坂町）・東9) 10) 姉神遺跡（人見村）・桜井姫遺跡（石和町）などがあげられる。

塚田遺跡では70基程の土壙が検出され、円形・方形・長方形・不整形などが認められている。規模は1辺は1m~1.6m、径0.8m程で各プラン毎に規模、方位等に規格性が窺える。狭い区域

内に切り合って営まれ、13世紀から江戸期までの年代が与えられている。

小和田館跡遺跡では多くの土壙・地下式土壙が密集して営まれている。土壙のタイプは長方形をなすもの、長方形で石組を伴うもの、円形のものに分けられる。長方形を示すものは古銭の出土が多いようである。E-2Gの石組土壙からは東向北枕の側臥屈葬の人骨が認められた。

東姥神遺跡でも数基の土壙・地下式土壙が検出されている。SK-63は長方形プランを有し、遺体上部に礫が置かれている。遺体は西向北枕の側臥屈葬で葬られ、3枚の古銭（中国銭）が出土している。本遺跡14号中世墓とほぼ同じ様相を持つもので、塚田遺跡No.17土壙も遺体上部に礫が覆うものである。

桜井畠遺跡からは6基の中世墓が検出され、ほぼ梢円形平面を持つ。内1基から人骨が出土している。

#### 10) 小 結

上野遺跡から検出された15基の中世墓の概略は以上の通りであるが、僅かに触れた他遺跡の例に比べてもその特徴にまず第一に形状・規模・内容において非常に同質性が強いことが上げられる。副葬品も貧弱で、14号中世墓が多量の礫を使用し、わずかに他墓との相異を示しているに過ぎない。これはこの造墓集団の社会的身分、その内的均質性を現すものと考えられよう。

また墓の造営時期については、この時期に於ける県内外の古銭の出土状況（流通状況）から副葬されている古銭がそれぞれの墓の上限を示すものとは考えにくい。最も新しい古銭である宣徳通宝（1433）及び五輪等類からは15世紀中葉から同後半の年代が与えられ、該期の極めて短期間に営まれたと考えるのが妥当であろう。この時期は武田氏がその領土支配を完成していく時期であり、また上野遺跡の乗る台地先端には武田信玄の弟である一条信龍が城を構えた位置もある。当然、上野遺跡の中世墓もそれらとの関係なしには當み得ないものであろうが、ここではこれらの墓の被葬者像をも含めて検討課題としたい。

この土地は古来「ホトケヤマ」（=仏山）と呼称されてきた。また今回の発掘で明らかにされたようにこの遺跡では弥生時代終末から古墳時代前半にかけて墳墓が営まれた地でもある。<sup>11)</sup>ところで、藤沢氏は、ある土地に中世墓を点定するときその土地が何らかの意味で靈地である必要を指摘され、中世墓地の核として古い墓地あるいは古墳の存在に注目されている。上野遺跡においてもそうした「地域（共同意識）の記憶」を想定することは危険なことであろうか。

(清水)

### 第3節 その他の時代の遺構について

今回の調査の成果で、弥生時代と中世については前節で述べた。最後に、他の時代についての成果を挙げたい。

縄文時代の遺構として、住居址2件（10号・16号）と土壙2基が検出された。16号住居址は縄文時代前期黒浜期のもので、残りの3遺構は中期五領ヶ台式期に属する。五領ヶ台式の土器につ

いては一条氏館跡遺跡からある程度まとまって出土したものの、遺構に伴って出土したのは町内でこれが初めてである。種類として集合弦線を地文に持つものと縄文を地文に持つものがあり、10号住居址からは両者が出土している。土壙出土の土器は合わせて4個体あり、完形品は1号土壙の1点のみである。1号土壙は堆積土の中に焼土層があり、この層に土器の底部がかかっていた。土器の底部は非常に脆かったが、これは被熱のためであろうか。このように、堆積土層中に焼土層が含まれる土壙は非常に珍しいと言える。

古墳時代では、円形周溝墓1基と住居址5軒が検出された。円形周溝墓は溝幅が1m、深さ30cmと、非常に簡素な検出状況であり、ブリッジも広く開いていたが、これは削平によるもので、直径20mという規模から溝にしても倍程度はあったと推測できよう。供獻されていたものに、土器では施・高坏が出土しているが、鉄器または鉄製品の出土はなかった。時期的には5世紀の前半に収まると考えられる。町内では、赤鳥元年銘神獸鏡が出土した鳥居原古墳が造営された時期と前後し、この2つの墓は同じ勢力か違う勢力かが問題となる。

住居址はI区の南東にかたまって検出された。13号住居址が円形周溝墓に切られているため住居が先行しているのだが、11号・12号は重複しており、極めて小さな集落であったようである。もっとも、調査区外に該期の住居址が存在する可能性もあるが、出土した土器に占める古墳時代の土器の量を考えると、短期間しか営まれなかつとも言える。

(堀ノ内)

## 第VI章　まとめ

以上のように3ヶ月間に亘って行われた上野遺跡の調査は大きな成果を得ることができた。縄文時代から中世にまで及ぶ長期間に亘って断続的に営まれた遺跡で、発見された遺構も方形周溝墓5基、円形周溝墓1基、竪穴住居址16軒（縄文時代2軒、弥生時代9軒、古墳時代5軒）、溝10本（弥生時代5本、中世5本）、掘立柱建物遺構1棟、土壙3基、中世墓15基にのぼった。

なかでも5基確認された方形周溝墓は、昨年度調査された一条氏館跡遺跡に連続するものである。時期的には上野遺跡がやや後出するが、同じ台地上に営まれており大きな意味では同一の墳墓域として把握しえよう。なかでも一号方形周溝墓は県内でも1、2を争う規模を誇り、パレススタイルを模倣した優秀な土器を持つことでも特に注目されるものである。弥生時代から古墳時代へと移行する変動期の甲府盆地の政治的、社会的動向を探る上で見のがしえない遺跡となつた。今後更に当該期の集落遺跡、上の平遺跡・金の尾遺跡等の方形周溝墓などとの比較、検討が必要となろう。ところで一条氏館跡遺跡の2号方形周溝墓には東海東部の系譜をひく高坏型土器が供獻されており、同一墓域に於ける異系統の土器の問題として一つの課題を出したものといえる。

この台地上には弥生時代末の集落も営まれている。方形周溝墓にやや先行するもので一条氏館

跡遺跡の方形周溝墓とはほぼ同時期と考えられ、前述したように環濠とも考えられる清が台地縁辺を走っている。環濠とする見方の方が射たものとすれば、県内では初めて確認されたものとなる。更に類例との比較が求められよう。

ついで1号方形周溝墓に接するように円形周溝墓が営まれている。供獻された土器群は5世紀の前半代に比定しうるものであった。5世紀前半といえば、町内でも鳥居原古墳が築造された時期にあたり、同地域に異なる葬送儀礼を持つ集團が並立していた事を暗示させる。西田遺跡の周溝墓群とともに、この時期の盆地内の政治過程が決して一様ではなかったことを示すものであり、これも今後の重要な課題といえる。

計15基検出された中世墓も新たな知見であった。これまで比較的明らかでなかった中世の民衆像に迫るものであり、現在の三珠町が形成された当時の町の姿をしのばせるものである。

以上のように今回の上野遺跡の発掘は、多くの成果を得ると同時に多くの課題を残すものでもあった。今後、町内、県内などの類例との検討を深め三珠町ばかりではなく甲府盆地の歴史像を明らかにしていきたい。

(堀ノ内、清水)

## 引用・参考文献

### 註

- 1) 文献13参照
- 2) 文献13 P716～『南関東地方における中期環濠集落の終焉前後』 松本 実
- 3) 集落と集落を区画するのと集落と墓域を区画するのとは、おのずとその意味するものが変わつてこよう。だがここでは、単純に区画するという事実だけをとらえている。従つて、今後例が増加し問題が複雑化することにより根本から考え直すことになろう。
- 4) 文献11 P525 『上の平遺跡』 小林広和他
- 5) 西辺および南辺ブリッジ西側は、中世墓による搅乱と抜根時の搅乱のため、土器が消失している可能性がある。
- 6) 洞部外面および口縁部内面に施されるミガキの方向が全くの対象となる。
- 7) 『塚田遺跡』 —須玉町埋蔵文化財調査報告— 須玉町教育委員会 1984
- 8) 『小和田館跡』 長坂町教育委員会 1985
- 9) 『東姥神B遺跡』 大泉村教育委員会 1985
- 10) 中山誠二氏（県埋蔵文化財センター）に御教示いただいた。
- 11) 『中世墓地ノート』「仏教芸術」182号 藤澤典彦 毎日新聞社 1989

### 参考文献

- 1) 『三珠町誌』 三珠町教育委員会
- 2) 『一城林遺跡』 山梨県教育委員会 1981
- 3) 『一条氏館跡遺跡』 三珠町教育委員会 1988
- 4) 『六科丘遺跡』 桜形町教育委員会 1985
- 5) 『上の平遺跡』 第4次・第5次発掘調査報告書 山梨県教育委員会 1987
- 6) 『金の尾遺跡・無名墳（きつね塚）』 山梨県教育委員会 1987
- 7) 『住吉遺跡』 甲西町教育委員会 1981
- 8) 『堂ヶ谷戸遺跡』 第2分冊（弥生時代以降） 世田谷区教育委員会他 1988
- 9) 『駅迎堂I』 山梨県教育委員会他 1986
- 10) 『駅迎堂II』 山梨県教育委員会他 1987
- 11) 『東日本の弥生墓制』 第9回三県シンポジウム 群馬県考古学研究所他 1988
- 12) 『古墳出現期における地域性』 第5回三県シンポジウム 北武藏古代文化研究会他 1984
- 13) 『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題』 第23回埋蔵文化財研究集会 埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会 1988

- 14 「定型化する古墳以前の墓制」第24回埋蔵文化財研究集会 埋蔵文化財研究会 1988
- 15 「研究紀要4」 山梨県埋蔵文化財センター 1987
- 16 「出土銭からみた撰銭令」季刊「考古学」26号 是光吉基 1989
- 17 「大和の考古学50年」 橿原考古学研究所 学生社 1988
- 18 「中世の墳墓」「日本歴史考古学を学ぶ」 木下密運 有斐閣 1986

---

---

## 上野遺跡

発 行 1989年3月31日

印 刷 1989年3月20日

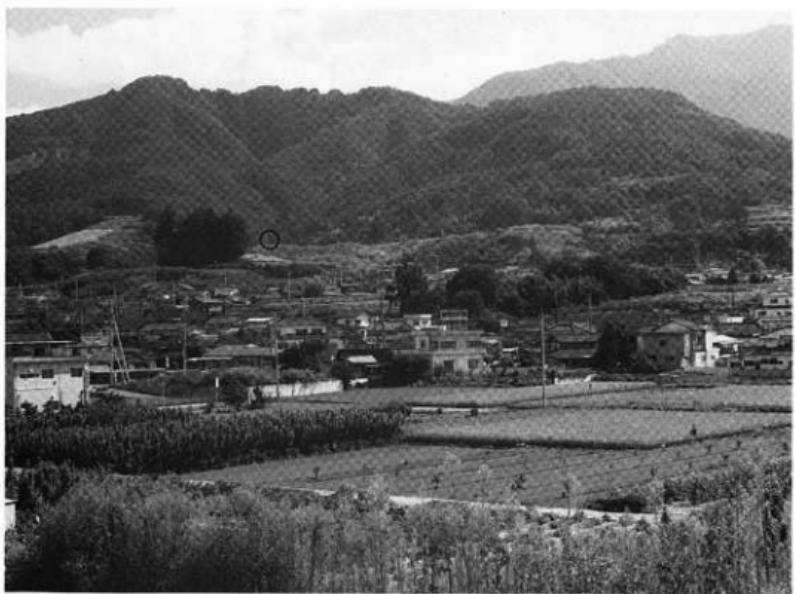
編 集 山梨県西八代郡三珠町上野

発 行 三珠町教育委員会

印 刷 森 出 版

---

図版 I



上野遺跡遠景（北方より）



同上（東方より）

図版 2



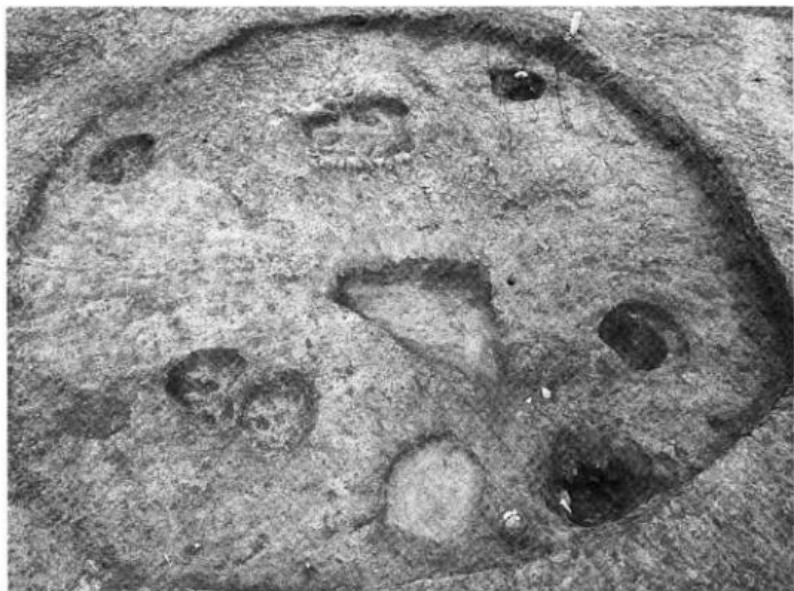
上野遺跡 I 区全景

図版 3



上野遺跡II区全景

図版 4

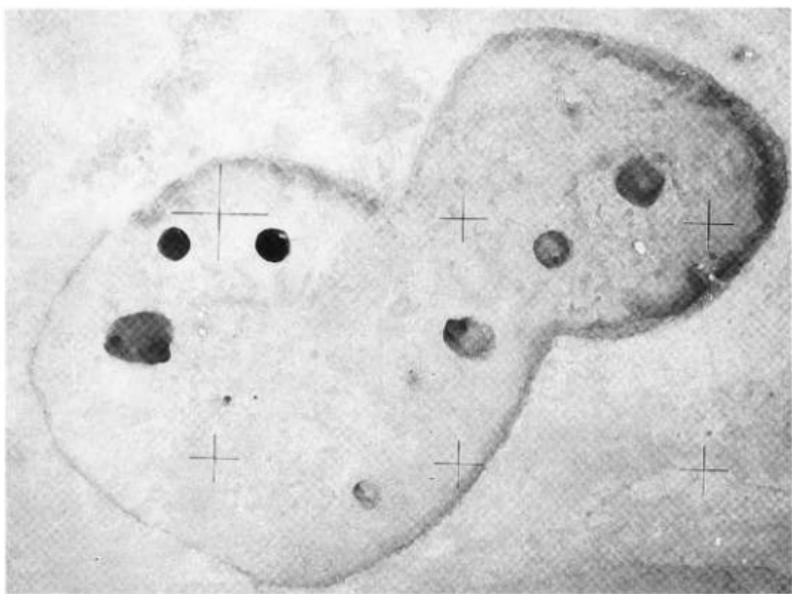


1号住居址

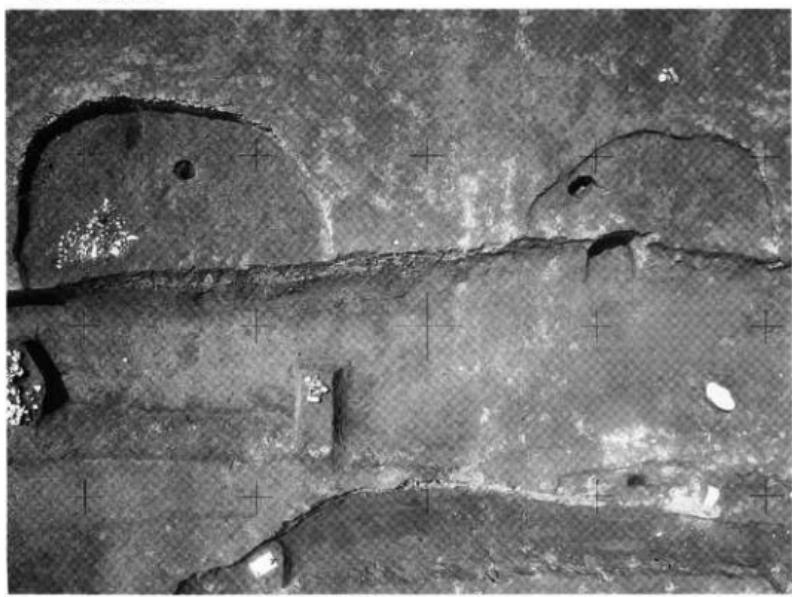


2号住居址

図版 5

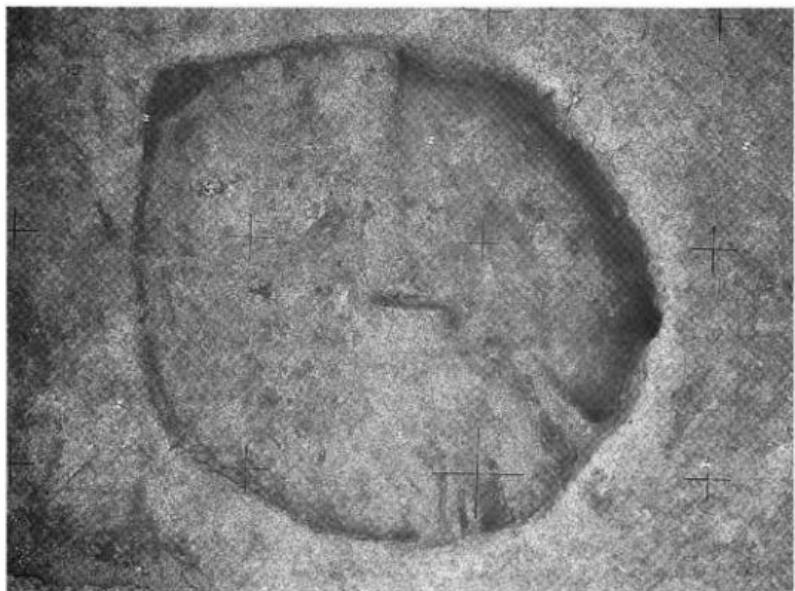


3号・4号住居址

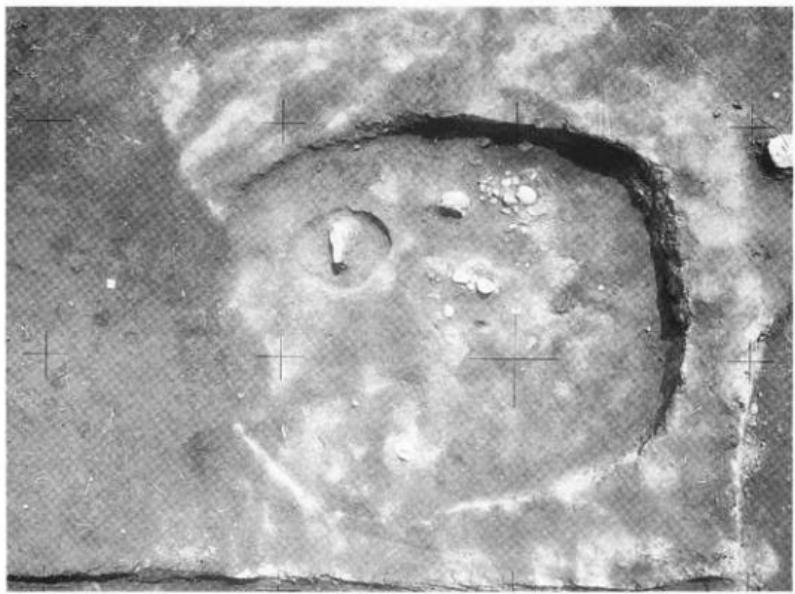


5号・6号住居址

図版 6

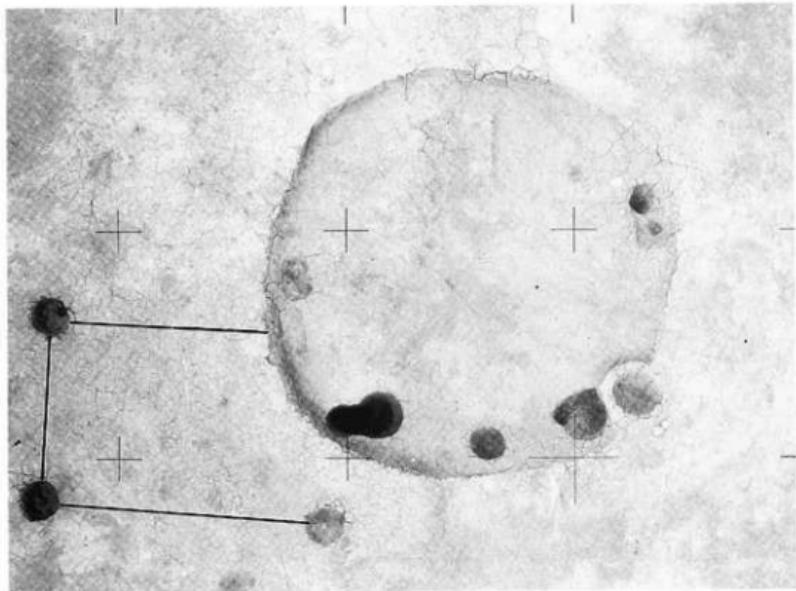


7号住居址



8号住居址

図版 7



9号住居址・据立柱建物遺構



10号住居址

図版 8



11号住居址

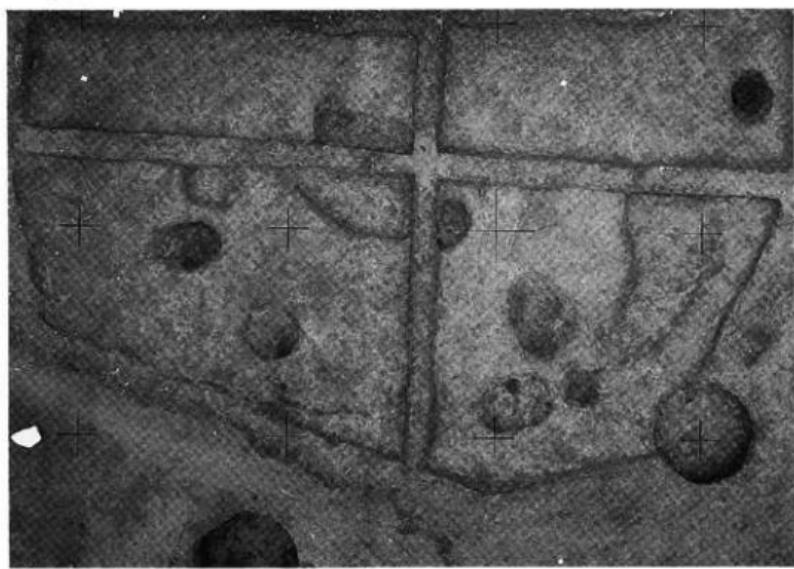


12号住居址

図版 9

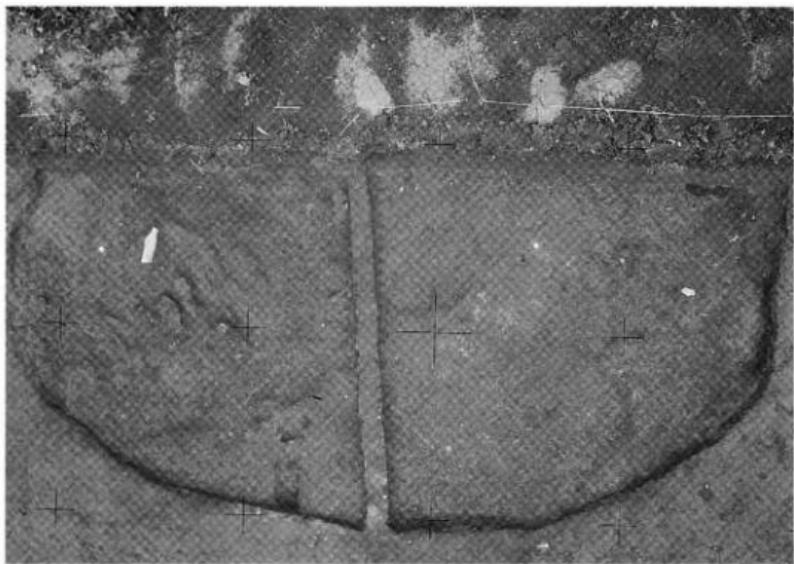


13号住居址



14号住居址

图版10



15号住居址

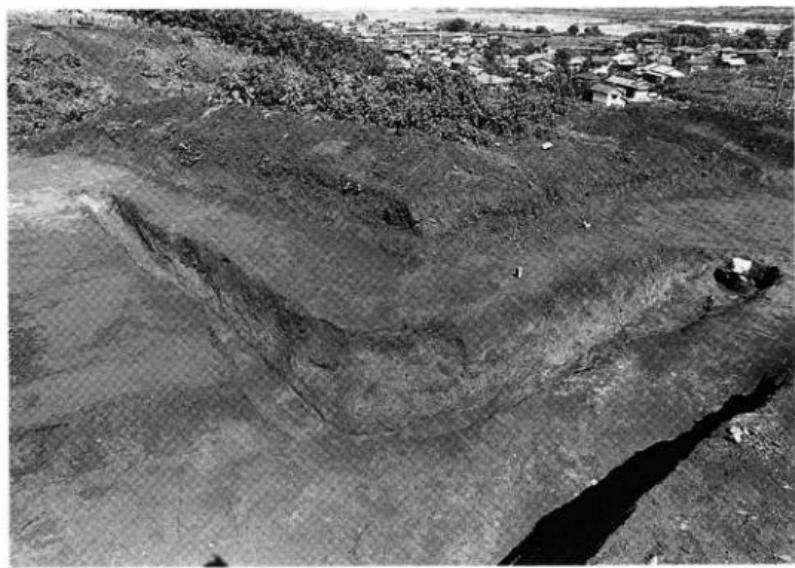


16号住居址

図版II

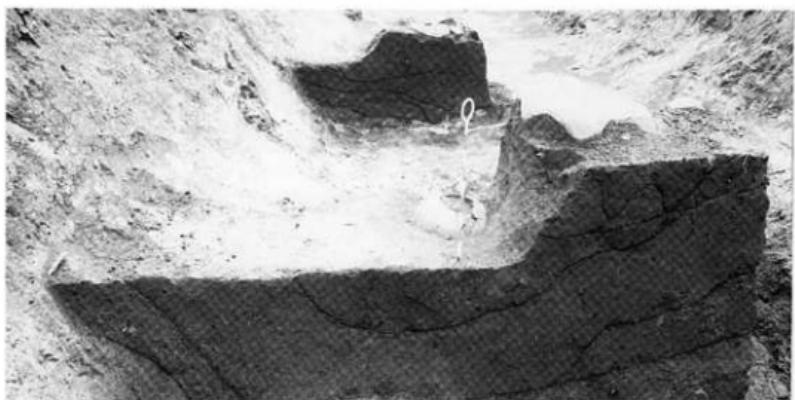


1号・2号方形周溝墓



3号方形周溝墓

図版12

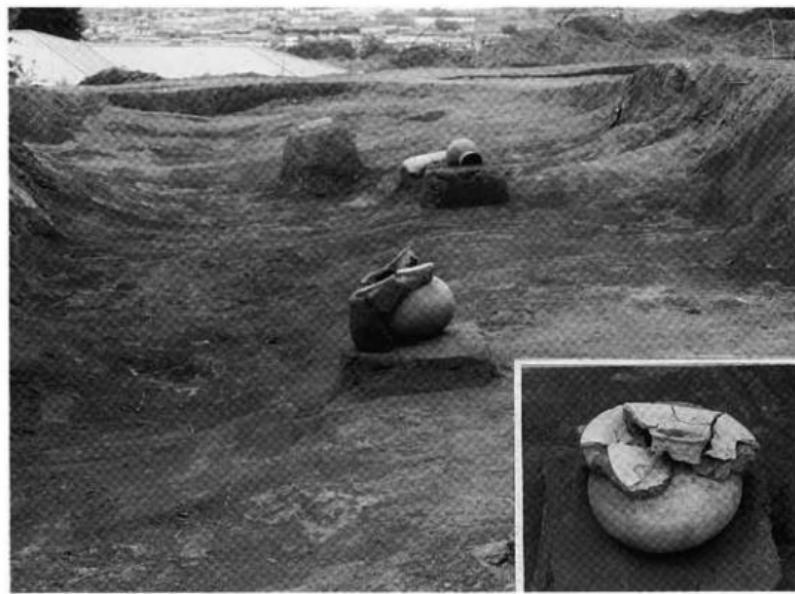


1号方形周溝墓南辺土器出土状況

図版13

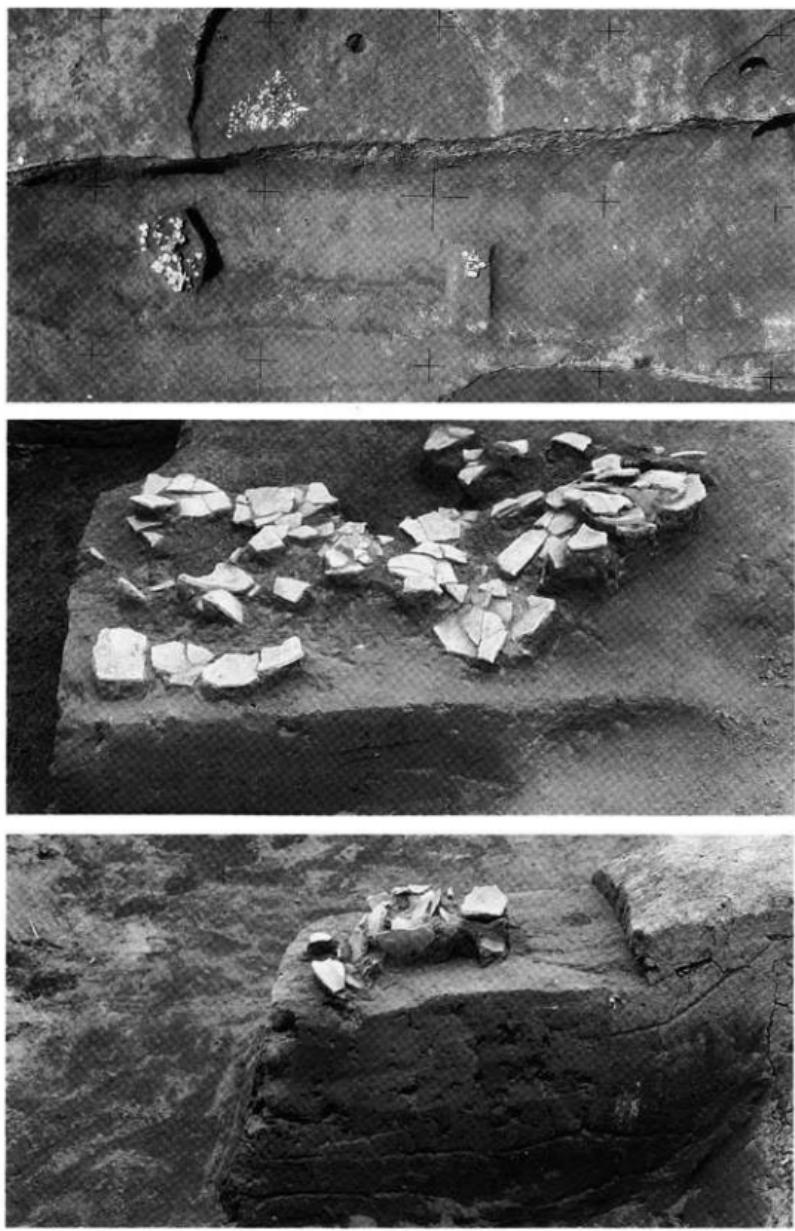


1号方形周溝墓東辺土器出土状況（北方から）



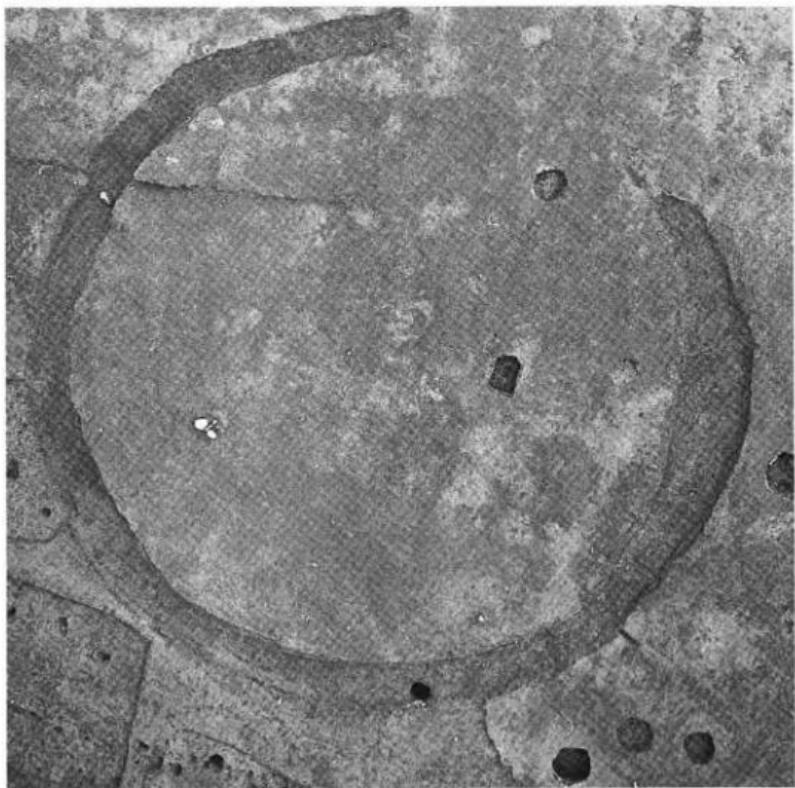
同上（南方から）

図版14



1号方形周溝墓北辺土器出土状況

図版15



円形周溝墓、円形周溝墓土器出土状況

图版16



2号中世墓（上）、3号中世墓（下）



1号中世墓（上、下）

図版17



4号中世墓（上・下）



4号中世墓（上・下）

图版18

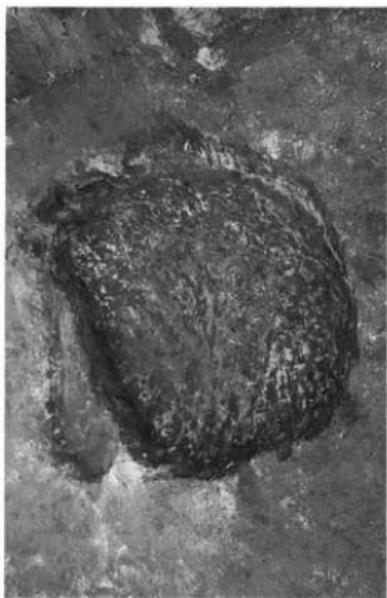


6号中世墓（上・下）



5号中世墓（上・下）

图版19



8号中世墓（上）、9号中世墓断面（下）



7号中世墓（上、下）

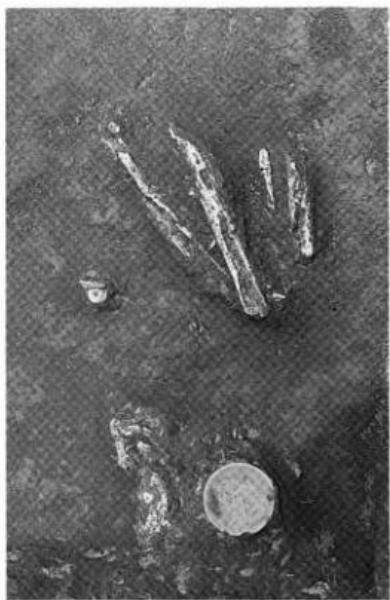
图版20



10号中世墓（上）、12号中世墓（下）

13号中世墓（上）、14号中世墓（下）

図版21



15号中世墓（上・下）

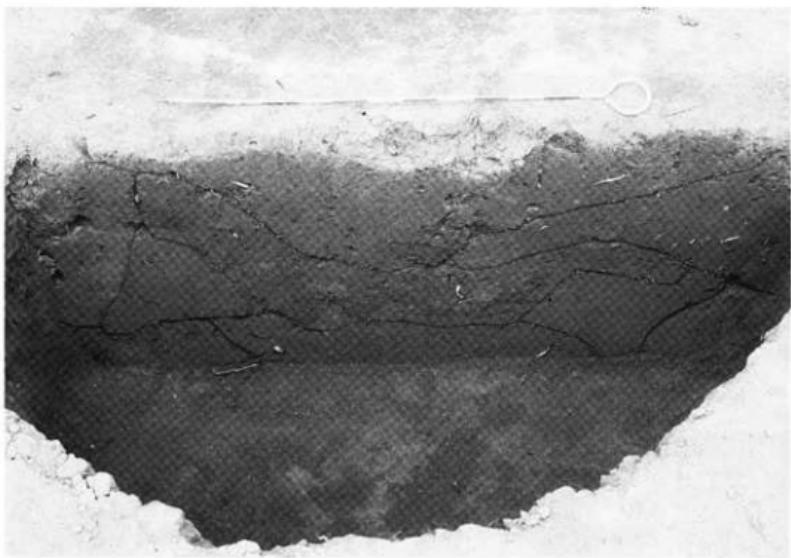


14号中世墓（上・下）

図版22

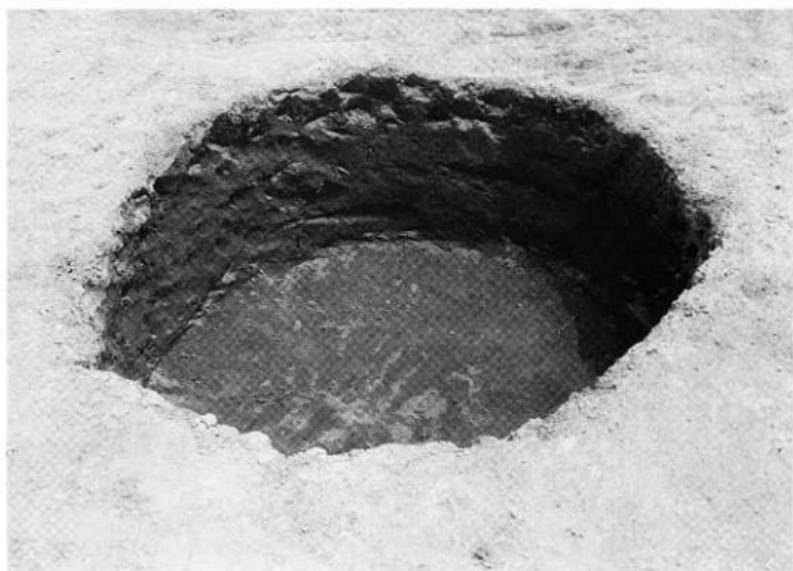


1号土壤土器出土状況



1号土壤土層断面

図版23



1号土壤完掘



2号土壤土器出土状況



N-1 レンチ (北方から)



N-2 レンチ (北方から)



N-3 レンチ (北方から)

図版25

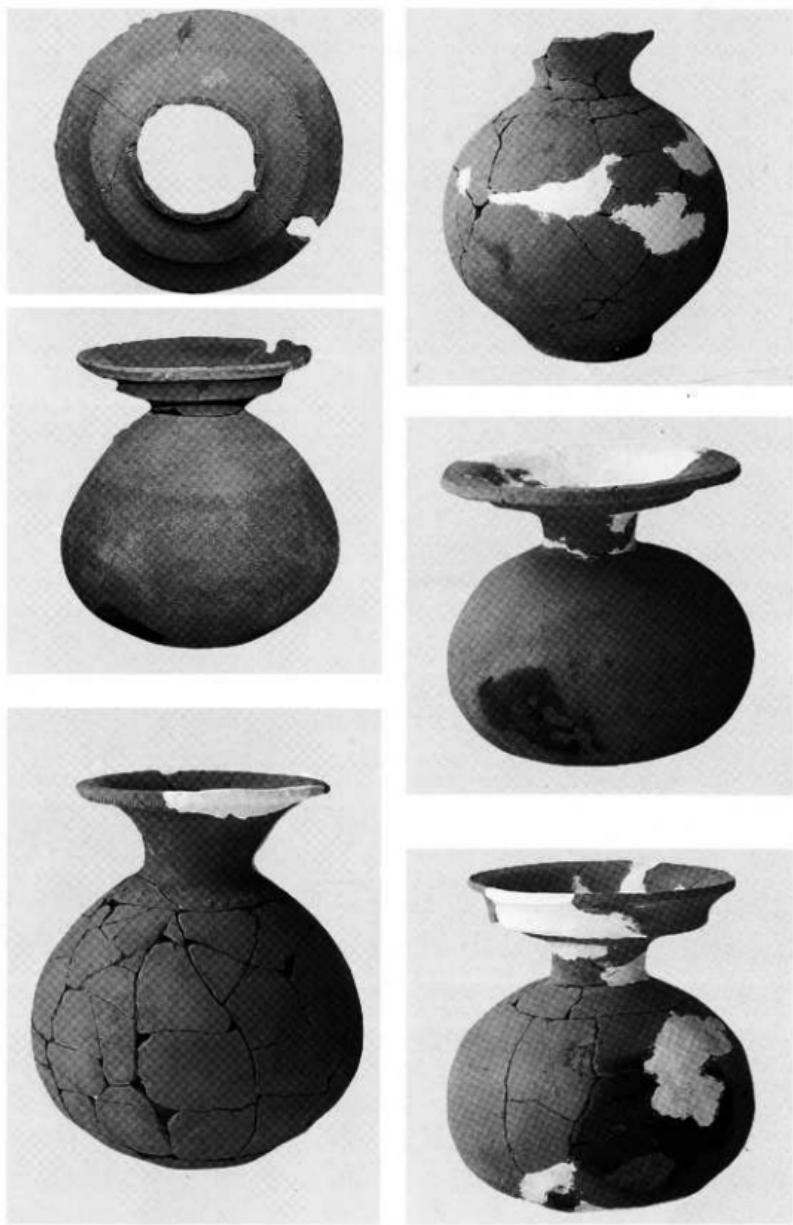


N-2 レンチ溝2

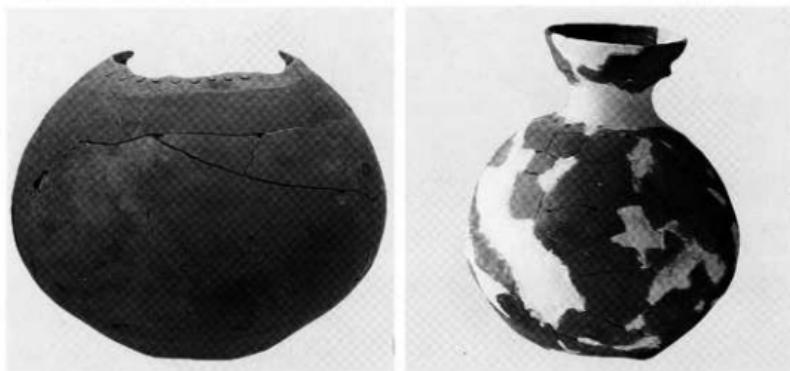


N-3 レンチ環溝（上）、N-2 レンチ環溝（下）（ともに西方から）





1号方形周溝墓出土土器(1)

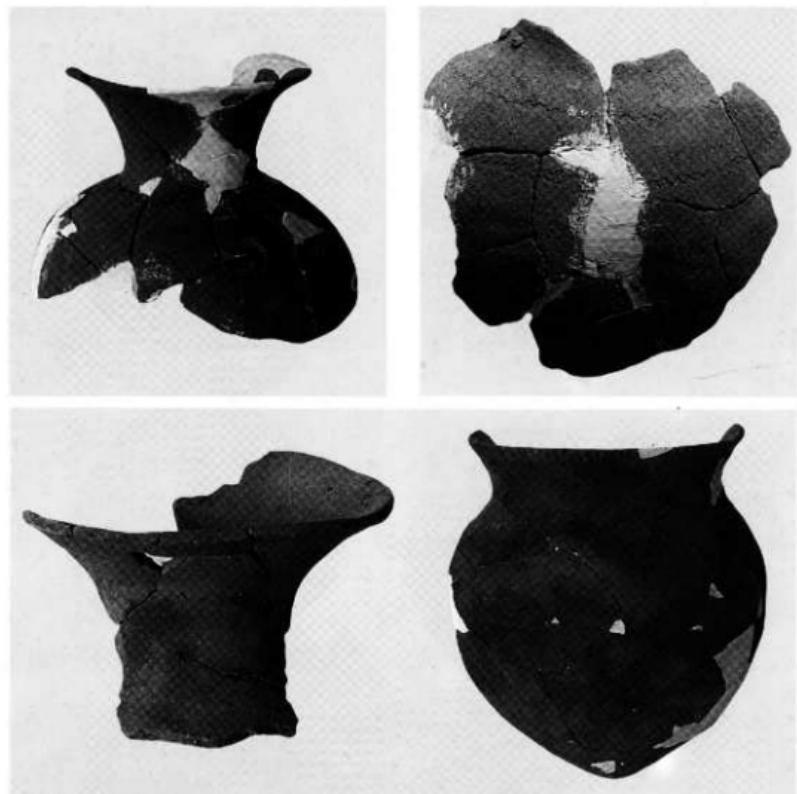


1号方形周溝墓出土土器(2)

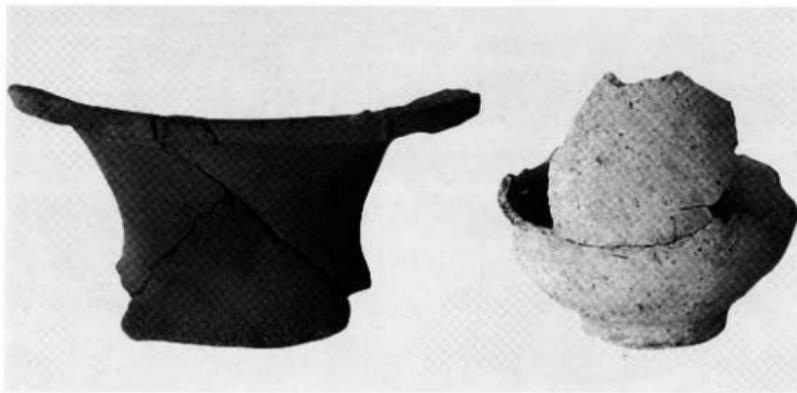


円形周溝墓出土土器

図版28



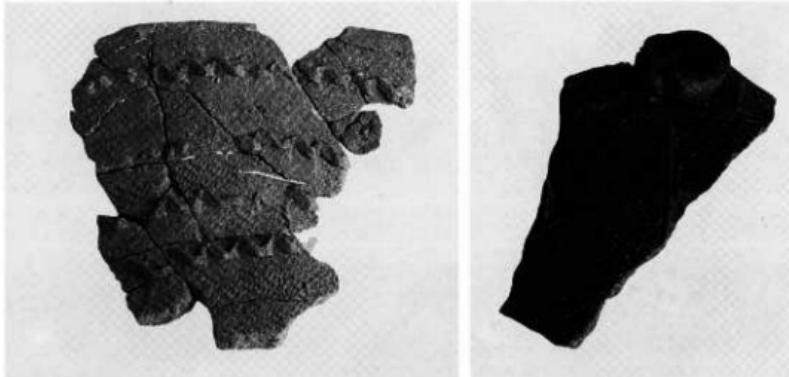
5号住居址出土土器



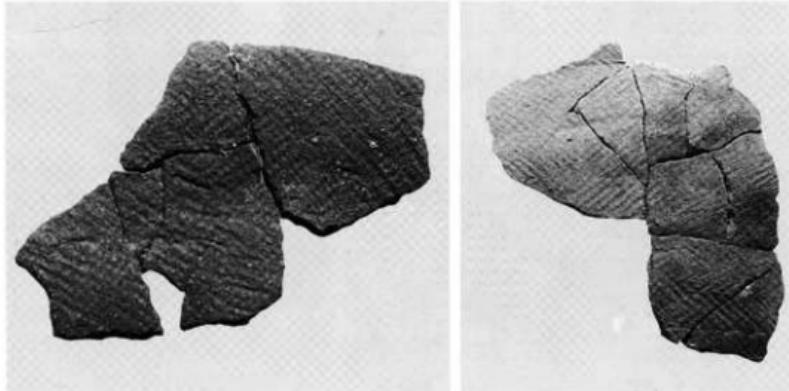
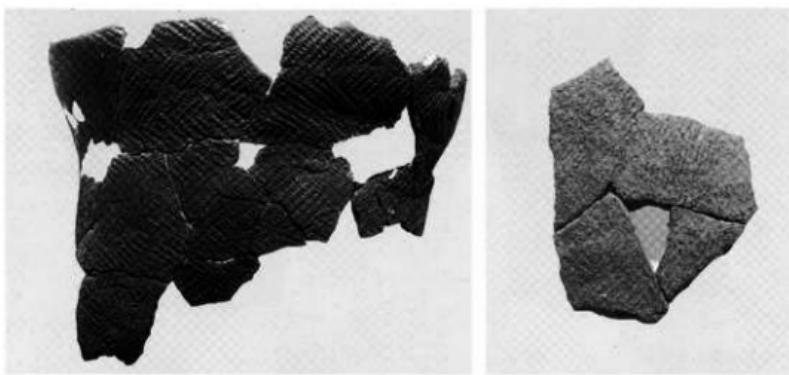
2号住居址出土土器

8号住居址出土土器

図版29

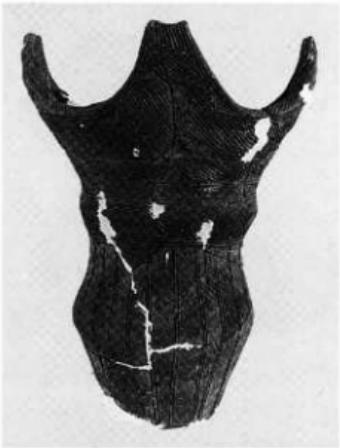


10号住居址出土土器



16号住居址出土土器

図版30



1号土壙出土土器



2号土壙出土土器

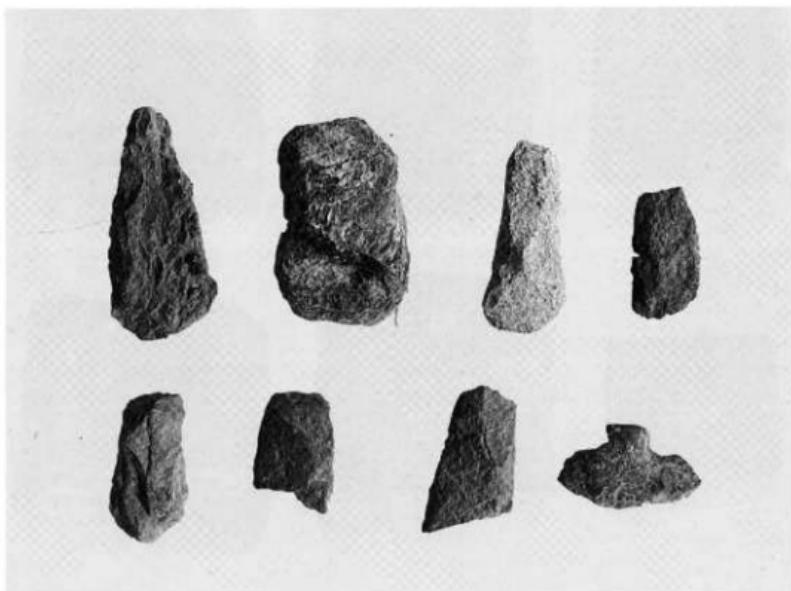


E-2 トレンチ5溝出土土器

图版31



16号住居址出土石器



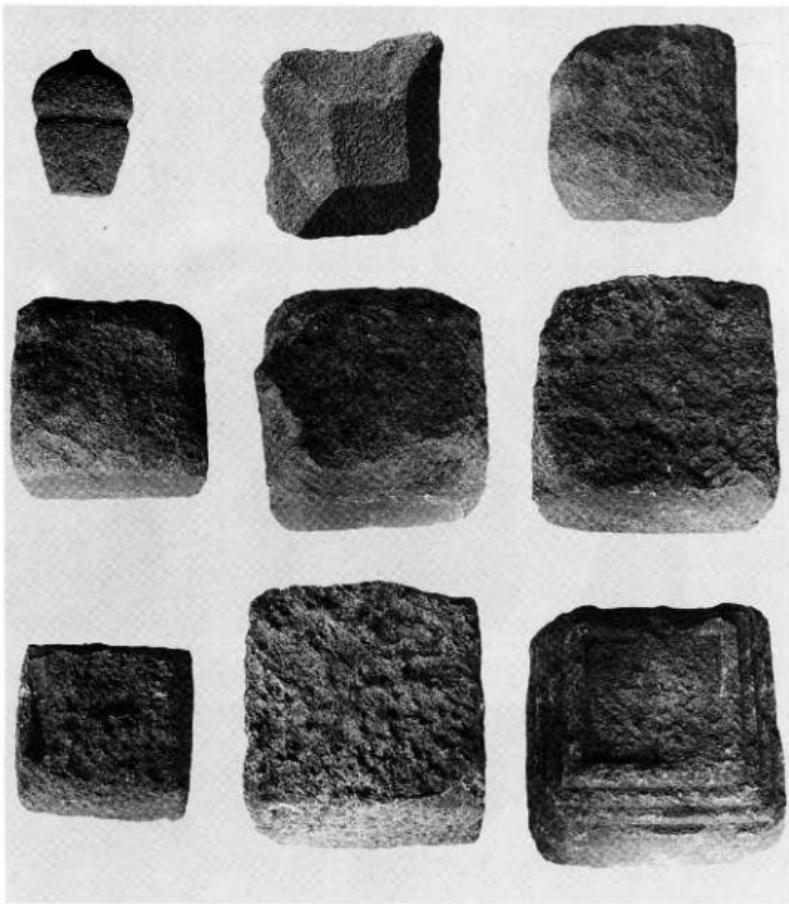
遗構外出土石器

圖版32



10号住居址出土土器、

遺構外出土石器



五輪塔・宝匣印塔

